
仮面の魔女と黒い銃

桂樹緑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面の魔女と黒い銃

【Nコード】

N9585U

【作者名】

桂樹緑

【あらすじ】

VR対戦ゲーム『ペルソナクライン』のプレイヤー『ジェット・バレル』こと真壁陸朗。彼はある日、正体を隠したトッププレイヤー・秋月雪乃の操る『ストレーガ』との賭け試合に大敗する。賭けの代償は、「雪乃の言うことを一つだけ聞く」こと。否応なしに雪乃のパートナーにされた陸朗は、彼女とたった二人きりで、ゲーム内最大の組織である『白銀騎士団』と敵対することになってしまう。

1 - 1 敗北

記憶が飛んでいた。

半ば反射的に『知覚変換^{センス・リアクト}』のダイレクト・フィードバックのレベルを落としながら、今何をやっていたのだろうと考える。

ちらりと視線を動かせば、目に入っただのは自分の対戦用アバターの手足だった。ひよる長い手足を持つこの姿は、『黒い銃身^{ジェット・バレル}』と彼自身が名付けたものだ。もっとも名前と異なり、今日は廃虚での対戦だったから、装甲のカラーリングをグレーの都市迷彩にしている。思い出してきた、自分は今対戦中だったのだ。『ペルソナクライン』——感覚同化型ヴァーチャル・リアリティ・アプリケーションの。

「くそっ！」

吠えるように吐き捨てながら、敵の姿を探す。

そうだ、完全に思い出した。とんでもない加速でぶっ飛んできた敵アバターの一撃を喰らって、意識を刈り取られたのだ。

思考内デスクトップのコンソール・パネルで『審判装置^{ジャッジ}』へとアクセスし、タイムカウントを確認すると『69』と表示されていた。さっき見た時はまだ『70』だったから、およそ一秒ほど昏倒していたことになる。コンマ何秒の単位で攻守の入れ替わるこの『ペルソナクライン』においては、致命的と言っていい隙をさらしていたはずだ。

「それなのに、追撃しなかっただろ？ ナメられてるのかよ……ッ！」

アバターに装着された仮面^{ヘルメット}の奥で、ギリツと唇を噛み締める。

だが今もって敵を捕捉できない自分の不甲斐なさを棚にあげてまで、相手の傲慢を責めることはできなかった。ナメられるだけの醜態はさらしているのだ。

『かつてイケブクロと呼ばれた廃虚』を模した対戦フィールドには、敵の気配はなく静まり返っている。音といえば時折建材の崩落が起こり、建物が倒壊して地鳴りを響かせるのみだ。

「どこ行きやがった？」

センサーの有効範囲ギリギリのところ、こちらの出方をうかがっているのは間違いない。市販されているセンサー拡張プラグインなど、性能はどれもどっこいどっこいだ。『ペルソナクライン』というアプリに習熟しているのならば、相手のセンサー範囲にアタリをつけるのは、不可能というほど難しいことではない。

それができるだけの技量を持つ相手であるのは認めるが、こうもナメてくれると腹が立つ。あるいはそこまで計算の上で、対戦相手は彼を挑発しているのかもしれない。

「……こんな奴にバカにされてたまるか」

舌打ちをしながら、ごく自然に彼は思考内デスクトップにある、そのアプリケーションを起動した。自分自身で組み上げた、フィールド内にある対戦相手の位置を特定するプログラムだ。

先述のセンサー拡張プラグインとはまったく性格が異なる。『ペルソナクライン』というアプリのセキュリティ・ホールを利用して、直接対戦相手の位置情報を不正に取得する干渉プログラム——いわゆるチートツールだった。

卑怯な手段という自覚はある。ただこれだけのシンプルなチートでも、索敵がシステムに組み込まれている『ペルソナクライン』では、圧倒的な優位が得られるのだから。

だがその歪んだ『圧倒的な優位』は忘れられない蜜の味がして、暗い愉悦が仮面の下にある口元を吊り上げたのを感じた。

アバターの両腕で主武装であるロング・ライフルを構えながら、チートツールが反応を返してくるのを待つ。時間にして一秒にも満たないような刹那の時だが、今の彼にはその数倍か数十倍の長さにも感じられた。

「来い、早く来い……来たっ！」

祈り、願う彼の目に映る『ホロ・モニタ投影視覚』のリーダーに、対戦相手を示すシンボルが一際強く輝いた——彼の立つ、その真後ろに。

「なっ……あがッ!？」

咄嗟に身体を入れ替えたとき、敵はすでに手にした薙刀のようなグレイヴ武器を振り上げていた。

武器を盾代わりにして、なんとか攻撃を受け止める。だが強烈な打ち込みに、ジェット・バレルの瘦躯が大きく揺らいた。

敵アバターはそのままグレイヴの刃を引っかけるようにして振り抜き、ライフルごと彼を廃屋へと吹き飛ばす。

「ぎっ!？」

叩きつけられて、舌を噛んだ。突き抜けるような痛みを感じる。すべての感覚が情動的に『リアクト変換』されているヴァーチャル・リアリティ空間——『ヴィジョン・スペース思考空間』においては、痛みさえもフィードバックされる。もっとも安全装置があるので、実際に血が出るということはないが。

「危ねえ……噛んだおかげで、また意識トバされずに済んだか」

瓦礫から立ち上がり、コンソール・パネルで半分ほどになった残

リライフ・ポイントの確認をしながら、小さく息を吐く。

自分は二発喰らっただけでフラフラしているというのに、目の前に悠然と立つ敵アバターは、息一つ切らしているように見えない。

長い角の生えた仮面にも、板バネを重ねたような形状の装甲にも、傷一つなかった。当たり前だ、ただの一回だって、こちらは有効打を当てられないのだから。相手のライフ・ポイントは百パーセントだ、一ミリも減っていない。

「くそっ……むかつく野郎だ」

一方的になぶられているようで、とても気分が悪い。

正直言つて、これほどの相手と立ち合うのは初めてだった。これほど強いのに、名前が知られていないというのが信じられない。手玉に取られている自分でさえ、イケブクロ・エリアではそれなりに知られた存在であるというのに。

どこかうさん臭いと感じて、チートしてんじゃねーのかと言いかけるが、慌てて口をつぐむ。

自分の事を棚に上げすぎた。やましいのは自分であって、むしろ藪蛇になりかねない。

二連続でダウンを取られて、自覚以上に頭に血が上っているのだろう。汗をかかないアバターであるはずなのに、じつとりと背中が冷たいもので濡れていくような錯覚を覚えた。

『この程度か。あくどく勝っている奴がいるって聞いて、久方ぶりに繋いでみたけど……思ったほどじゃあない、期待はずれだな』
「なっ!？」

間合いを取りながら息を整えていたジェット・バレルに、手にしたグレイヴを突き付けながら、対戦相手であるアバター『山羊角』ゴート・ホーンは落胆らしきため息をついた。

プライバシーを守るための標準装備である、アバターのボイスチ
エンジャーで加工された、男だか女だかわからない声がやけに腹立
たしい。

タイミングが良すぎるほどの見透かしたような言葉に、怖気のよ
うな不快感が胸の奥にいつぱいになる。

「な、なんだよッ、お前はッ!？」

『どもるな、器が知れるよ。痛い腹があるからといって、その態度
はよくないな』

「ぐッ……!」

証拠などあるはずがない。足がつくようなヘマはしていない。い
ないが――やはり見透かされると焦りは隠せなかった。

動揺し、激昂しそうになる気持ちを抑えて、バックジャンプで一
気に距離を取る。こんな近い距離では、射撃タイプであるジェット・
バレルは十分な能力を発揮出来ない。何はなくとも間合いだ。怒り
は銃弾に込めて叩きつけてやればいい。

『おやおや、案外と冷静だ』

「うるっ……せえよっ!」

装甲のハッチを開き、内蔵されたミサイルをばらまく。命中は期
待していない。ただ敵の足を止めたかった。あの踏み込みは脅威だ。
気づいた時にはもう、目の前にいるのだから。

弾幕が廃墟ごと敵の周囲を吹き飛ばす。粉塵が舞い上がり、煙幕
となってベールのように視界を奪った。だが、これで終わりではな
い。ここからがむしろ本番、真骨頂。

向こうは見えないが、自分は見える。座標取得プログラム最大の
恩恵は、この状態にあるのだ。

「そこっ!!」

ロング・ライフルを構え、煙幕の中に叩き込む。同時に新しいチートツール——弾道自動補正プログラムを起動して、念には念を入れる。

装甲に着弾した金属音、そして車輪の空転する甲高いスキル音が、煙幕の中で悲鳴のように響いた。数発攻撃を受けつつも、小刻みなストップ・アンド・ゴーで敵アバターが追撃をかわしているのが、レーダーの反応でわかる。

なるほど、と思った。あの音が敵の機動力の正体だ。踵部分に装着された車輪——グライド・スピナーと呼ばれている、地上滑走システム。

扱いが難しいこのシステムの使用者はそれほど多くないが、確かにあれを装備しているのなら、爆発的な機動力にも納得がいく。しかもスキル音の大きさを考えると、かなり大出力のタイプを装備しているのだろう。

「……この状況で直撃を避けるか普通!？」

仕留めきれなかったことに、苛立ちがさらに募る。視界を奪った上でなお、敵アバターに直撃を与えられなかったことはシヨックだった。

「ただど追い詰めちゃあいる。あっちとしては良くないカタチのはず……だったら」

彼は『不正改変者』、卑劣なプレイヤーだ。しかし——腕がないわけではない。状況を分析し、予測することにかけては自信があった。そうでなければ、状況に応じて様々なプログラムを使いわけるといった芸道をこなせるはずがない。

『はあっ!』

「そう来るよな！」

煙幕を突き破りながら、猛然と突進してくる敵アバター。速度、そしてタイミング共に彼の予想通りだった。こう来ることは、わかっていた。ならば、やりようはある。

グライド・スピナーは『地上を滑走する』という性質上、その機動がほぼ平面に限定されるという弱点がある。相手の上下の機動に追従するのが難しいのだ。不可能ではないだろうが、それはグライド・スピナーという機構が本来想定している動きではないため、どうしても無理がある。ジェット・バレルはそこを突いた。

「らあーっ!!」

アバターの脚部に力を込めて、大地を蹴り上げる。同時に身体各所の姿勢制御用スラスターを点火。ちょうど敵が水平に振り抜いた、グレイヴの上スレスレを飛び越える。

目の前には、滑走していく無防備なゴウト・ホーンの背中があった。重なりあった装甲は背中にも及んでいるが正面ほどではない、撃ち抜ける。逆さまになったままそう確信し、ライフルを抜き撃ちした——はずだった。

集中が意識を加速させ、『時間』を置き去りにする——無限に引き延ばされた刹那の瞬間。身体はもどかしいくらいに遅くしか動かず、ただ精神だけが加速された『世界』でそれを見た。

グライド・スピナーで突っ込んできたゴウト・ホーンの身体が、突然斜めに倒れる。バランスを崩したのではない、わざとだ。あれは倒したのだ。事実そのまま地面に手を突くと、腕を支点に百八十度ターンして、突っ込んできた勢いそのままに戻って来た。

『甘いよ』

「な、なんっ……」

だ、と言い終えるよりも早く、懷に入り込んだゴウト・ホーンの肘打ちが、ジェット・バレルの胸板に突き刺さる。

「が……はっ!？」

衝撃で息が詰まる。加速されていた精神が我に返り、痛みと共にアバターと同期する。

ジェット・バレルの身体は、大きく後方に跳ね飛ばされていた。決してペルソナアバターとしては重い方ではないジェット・バレルだが、同じくらいの体格相手にこれほどあっけなく吹き飛ばされない。

敵はグライド・スピナーの突進力を殺さず、そのままあの肘打ちに乗せていたのだ。容易くできることではない、だがそうでなければ説明のつかない威力だった。

廃墟をぶち壊し、再び瓦礫の中へと逆戻りしたジェット・バレルの受けたダメージは深刻だ。

大して強化もしていない胸部装甲は見る影もないほどに砕け散り、内部のプログラム・フレームが露わになっている。

コンソール・パネルに目を移せば、ライフ・ポイント残量だって五パーセントにも満たなかった。もしも肘ではなくあのグレイヴで貫かれていたら、今頃はとくにゲームオーバーとなっていただろう。

「こいつ……!」

格が違う。

認めなくてはならなかった。このアバターは、凄まじく強い。これほどの相手がまったくの無名であるなんて、信じられなかった。かといって、これから有名になる大型新人という感じもしない。

場慣れしすぎているのだ。圧倒的なまでの対戦経験が、あのゴウト・ホーンというアバターの戦闘能力を支えていると直感した。

はつきり言つて、彼が作り上げたジェット・バレルのポテンシャルは低くない。総合性能でならば、おそらく同ランクのペルソナアバターの中でも高いほうだろう。それだけのアバターを構築する技術が、彼にはあった。

だが敵は、ジェット・バレルが戦法を確立する上で生まれた弱点——装甲の強度であったり、接近戦での立ち回りだったり——を、的確に突いてくる。それは数多くのペルソナアバターと戦った経験がなければ到底なし得ない、老獪とさえ言える動きだ。

「ふん、正体を隠して正義の味方気取りってわけか。よくやるぜ」

きつとランキング上位の、どこその有名プレイヤーのダミー・アバターなのだろう。彼はそう結論付けた。

市販パーツを適当に組み合わせただけの野暮ったい外見は、油断を誘うための欺瞞にしかもはや思えない。

『ペルソナクライン』の上位ランカーが能力にリミッターをかけ、アバターの外見を変更して下位フィールドで戦うという話はごくまれにある。大抵の場合はいわゆる『初心者狩り』か、その『初心者狩り』に対する制裁目的だ。

このゴウト・ホーンの場合は口振りからして後者に近い。おそらく最初から自分を倒すことが目的で乱入してきたはずだった。

どこで自分は目をつけられたのか。この一種無法地帯と化している下位フィールド——別名『外道フィールド^{スレット・ダンフ}』で、チートを行う者はそれほど珍しくない。チート使いの事情は様々にあるが、少なくとも自分だけが狙われる理由はないはずだった。

それでもなおピンポイントで『制裁』を加えに来たのは、それこそ正義感の権化のようなものなのか、あるいは単にどこかで——^{リアル}それこそ現実も含めて——買った恨みを、自分が知らないだけなのか。

判断は付かない。

彼のそんな困惑した様子が伝わったのだろう。ゴウト・ホーンは軽く肩をすくめると、自嘲するような口振りで言った。

『なに、正義を名乗るつもりはないよ。ただの憂さ晴らしみたいなものさ』

「……本当なら、迷惑な話だぜ」

『そっちが言うべき台詞ではないと思うけど？』

「ああそっかい！」

瓦礫から身を起こし、なんとか立ち上がる。

強がっては悪態をついたところで、満身創痍なのは変わらない。もはや勝ち目はゼロだろう。万に一つの勝機もない。

ただし“うやむや”には持ち込めるかもしれない。

コンソール・パネルに目を走らせると、タイム・カウントは『37』と表示されていた。残り時間を使って死ぬ気で逃げ回り、首尾良く対戦用バトル・フィールドの外へと飛び出してしまえばノーゲームだ。

ここまで腕の差があるとそれすらも難しいとは思うが、こういう時のために組んだ緊急脱出用チートプログラムも準備してある。時間さえ稼げば、不可能なことではないだろうと考えていた。

「けど……せめて一発くらいは当てないと、ムカついたまんまだ」

ノーゲームになったとしても、対戦成績に傷がつかないだけだ。精神的には完敗、向こうも引き分けた気にはならないはず。腰抜けと思う存分あざ笑うことだろう。

「そいつはどう考えても悔しいよな」

一矢報いる——それをやれたらある意味勝ちだ。そのくらい実力に開きがあると、彼は自分と相手の戦力差を計算していた。

ずいぶん情けない事を言うものだ、と、苦笑してしまう。

しかし今はそれが精一杯で、そしてそれすら満足にできないであろうことがわかつている自分が情けない。

もっとも相手は煙幕の中ですら、弾道自動補正プログラムを凌駕するような化物だ。自分が心血注いで開発したツールがこうまで役に立たないのには信じがたいものがあつたが、事実は事実として認めなくてはならない。やるなら、ツール抜きのカチだ。条件は尚悪い。それでもやるか……？

しばし逡巡した後、腹をくくった。たまにはこういう対戦もありだろうと、自分を納得させる。

「のるかそるか好きじゃあないが……」

『ん……？』

ライフルを構え直したことに反応して、ゴウト・ホーンが頭を上げた。その名を象徴する、ねじくれた長い角の奥にある仮面の目が、じろりとジェット・バレルを睨む。

『仕掛けてくるんだ。意地を見せる気かな？』

「お前の完全勝利を阻めば、俺の溜飲^{パーフェクト}つてやつは下がるんでな」

『それはずいぶんと志が低い』

「何とも言いやがれ。どうしようが俺の勝手だ」

『確かにね……では来たまえ、引導を渡してやろう』

「気に入らねーな、その芝居がかった台詞と上から目線。おごるな、ヤギ野郎」

『……目線の角度が力の差だよ。チート^ゴときでは埋まらないほどのね』

「ほざいてろッ！」

横っ飛びで移動しながらライフルを連射したのと、ゴウト・ホーンがグライド・スピナーを急発進させて突っ込んできたのは、ほぼ同時だった。

『今の打ち込みを避けた！？』

グレイヴの刃が空を斬り、敵アバターが初めて驚いたような声を上げた。

たしかにゴウト・ホーンの打ち込みは速い。しかしいい加減、目も慣れた。読みが当たればギリギリ反応できなくはない。

そもそも、さっき一度は避けたのだ。もう一度やれないわけがない。

『まさか、かわされるとはね』

「直線的なんだよ、グライド・スピナーは！」

『そうは言っても、なかなか反応がいいじゃないか。段違いだった、さっきまでとは！』

「だから、その上から視線をやめやがれ！」

残っているミサイルを全弾バラ撒いて、旋回中の相手の周囲を吹き飛ばす。

結局のところ、射撃型の要点はここにある。逃げる空間を削り取られれば、あとは当たりに来るしかない——動いている標的を狙って当てるのではなく、標的に動いてもらって当たらせることこそが基本にして極意。

もっともこのゴウト・ホーンほどの強者であれば、追い詰めてもなお刹那のタイミングで避けてくるだろう。もう一押し、もう一押し何かで虚を突かなくては、尋常でない相手の人間性能を凌駕することは叶わない。

ゴウト・ホーンはひゅん、ひゅんと踊るように風を切りながら、グライド・スピナーを細かく加減速させてジェット・バレルの撃ち込む弾丸を避けていく。

だが、その場から踏み込んでくる様子はまだ見せない。戦いぶりの変わったジェット・バレルを警戒しているようだった。

『声色でわかる。腹をくくると強くなったね』

「てめえにや関係ないことだ！」

『そうでもない。今のほうがずっとマシだ、少し見直したよ。訂正しよう、わざわざ繋いだ甲斐はあった』

「勝手なことをッ！」

『だが手遅れだ。そんな残り体力では僕に一発当てるのだって、もはやままならないはず……！』

「そうだろうなあ、そうだろうよ！ わかってんだよ、そんなことは！」

あくまで冷静な相手と、焦りを隠せない自分。

ああそうか、実力の差というのはこういうときにも出てくるのかと、初めて知った。強者は決して慌てない。どんなときでも冷静沈着なのだ。そしてそうでいられない者が、弱者の位置に立つことになる。

『わかってるなら、あきらめたらどうか？』

「はん、やなことだ」

『なかなか往生際が悪い。そろそろ終わりにしようと思ってたのだが』

「思惑通りにいかせてたまるか。粘れるだけ粘ってやるよ！」

ライフルの残弾を撃ちきるまでは、この状態を維持出来る。だがリロードの際に起こる一瞬の隙、そこで間違いなくゴウト・ホーン

は勝負を決めようと襲いかかってくるだろう。その時にはもう、間合いはゼロになる。こちらは一発撃てるか撃てないかがせいぜいだ。

『いつまで続く、その曲がった根性で!』

「弾丸切れまでさ!」

そう言った瞬間、引き金が空しい金属音を立てた。まさしく今が弾切れだった。

ライフルの自動装填装置が起動して、アバターのアイテムインベントリから弾丸のデータをロードし始める。

『もらった!』

好機とばかりに、猛然と間合いを詰める敵アバター。これまで以上に速かった。

逆にジェット・バレルは一呼吸以上遅れている、リロードが間に合わない――!

(何か、何かないか!?)

ギリギリの状況の中で、必死に考えを巡らせる。

この場に及んで、今さらチートに頼るものか。そもそも今からプログラムを起動したのでは間に合わない。

これまでか――諦めが精神を支配しかけたその瞬間、閃くものがあった。目に映っていたのは、ホロ・モニタの片隅にあった『ペルソナクライン』のデフォルトコマンドリスト。

検証している余裕はない。直感を信じて、そのコマンドを実行する。

「アーマー・パージツ!」

『な、なにッ！？』

瞬間、ジェット・バレルの全身が爆裂した。装甲が吹き飛び、分解され、『情報デブリ』と化して発光しながら対戦フィールドの空間へと消滅する。

『アーマー・パージ』——チートでもなんでもない、単なる『ペルソナクライン』の基本ゲームシステム。彼はそれを利用した。ペルソナアバターは、任意でその装甲を排除できる。アバターのパラメータには重量の項目も存在するため、『アーマー・パージ』は、それを瞬間的に軽量化するための最終手段として存在するシステムだ。

ペルソナアバターの重量は、搭載された『アイ・デュー・アーマー情報密度装甲』の強度に由来する。単純に、密度が高く装甲は強靱であるほど重量は重くなるのだ。

よって重装甲であればあるほどアーマー・パージの恩恵は大きい。が、ジェット・バレルのように軽装甲の射撃型にとっては、わざわざ装甲を排除することに大したメリットはない。

だが十分だった。爆発して、光って消えるだけで十分だったのだ。目の前で閃光が炸裂し、一瞬ではあってもゴウト・ホーンの動きが止まる。

確かにわずかな、ごく短い時間のことであったかもしれない。しかしリロードの時間を稼ぎ、最後の一発を撃ち込む——ただそれだけのためには、ほんの刹那で事足りる。

「ぶち……当てるッ!!」
『クッ!』

狙うはゴウト・ホーンの頭部。当たれば一発逆転もあり得る急所狙いだ。

どうせ狙うなら貪欲に。しくじったところで、失うものなど勝ち

星くらい。背中を見せずに倒れたのなら、男の面目は保たれる。
そんならしくない想いに高揚感さえ抱きながら、引き金を引いた。
しかし――

『……惜しいな。もっと地力を鍛えていれば、この首だつて獲れた
だろうに』

「ッー!？」

明暗を分けたのは、反応速度の差だった。

普通の相手ならば、おそらくジェット・バレルは敵の頭を撃ち抜くことができたろう。だがゴウト・ホーンは普通の相手ではなかった。自分よりもはるかに強力なペルソナアバターであるという単純にして冷酷な事実が、最後の一手を反故にする。

眉間を狙った銃弾が、目標を捕らえることはなかった。ギリギリのところゴウト・ホーンが首を動かし、急所を外したのだ。

弾丸は額からこめかみを削るようにかすめると、ゴウト・ホーンの由来であろう、ねじくれた角に当たる。金属を叩き割るような音がして、左側の角が根本から折れた。

致命傷、ならず。ここまでだった。

「あーあ。ま、こんなもんか。所詮は俺だしな」

『卑下することはない。見事、と言わせてもらつよ』

「そいつは、どう……も」

ごん、と身体に縦向きの衝撃が走り、頭から真つ二つに斬り裂かれる。

ライフ・ポイント残量がゼロとなり、アバターの視界がゲームオーバー時のノイズ・エフェクトに切り替わる直前、片側の角を失ったゴウト・ホーンと眼が合った。

冷たい仮面に隠され、素顔など見えるはずはない――しかし何故

だが、相手は満足げに微笑んでいるような気がした。

1 - 2 真壁陸朗

高層ビルのエレベーターに乗っているような浮遊感と共に、意識が現実へと引き戻される。

『知覚変換』によるヴァーチャル・リアリティ空間『思考空間』へのアクセスを終えたジェット・バレル——真壁陸朗は、ゆっくりと眼鏡の奥にある両目を開いた。

「……何時だ？」

時間の感覚が狂っている。直前までやっていたことを、よく思い出せなかった。『思考空間』の最深部——現実よりも時間が速く流れる『深層球殻構造体』にダイブしていると、こういうことがよく起こる。

比較的時間の流れが緩やかなスフィア表層部で半日以上潜っていたから、こっちの感覚では一時間ちよつとは経っているはずだ。

左手に装着した極薄の『バーム・コミュニケーション掌装着型端末』に意識を送り、思考内デスクトップの時計をホロ・モニタ上に呼び出す。四時四十二分だった。

「ちょうど一時間、だな」

陸朗がいるのは学校の図書館だ。人気のあまりない、この奥まった個人用読書ブースから『思考空間』へアクセスするのが陸朗の日課だった。

家よりも回線が太く、快適な環境でグローバルネットを利用できる、というのがその理由だ。

普通の生徒の中には、学校側にログを取られるのがイヤだからという理由で、学校からの『思考空間』へのアクセスを控える者が少

なくない。

繋ぐのは陸朗のように一種開き直っている人間がほとんどだ。とくにスフィアへの直通回線の軽さは、利用者の少なさがもつとも大きい理由に違いない。

もつとも陸朗にしてみれば願ったり叶ったりだ。学校でもやるというよりは、学校こそが彼にとつて『ペルソナクライン』をプレイするために適した環境だった。

「さて、どうすつかな……」

『日課』を終えたはいいが、中途半端に時間が空いてしまった。家に帰るにはまだ早い。かといつてもう一回『ペルソナクライン』にログインしたら、おそらく戻ってくる頃には運動部の帰宅と鉢合わせになるだろう。ああいう連中と、わざわざ同じバスに乗るのもバカバカしい話だ。

それに——今日はもう、ログインしたい気分ではなかった。

こつこつと机を叩きながら、窓の外へと目を向ける。赤い夕日を受けてまぶしそうに目を細めた、神経質そうな面差しをした少年がそこには映っていた。

しかしいつもならば『思考空間』から戻って来たあと、どこか鬱屈としたものを溜め込んでいたはずの顔が、今日はやけにすっきりとしているように見える。

理由ははつきりしていた。今日唯一の黒星のせいだ。

「……何だありや、バケモノか」

ゴウト・ホーンの事を思い出すと、苦笑しか出ない。スペックで劣るダミー・アバターを用いてあの強さ。本気を出したらどこまで強いのか、まったく想像もつかない。ああいう不公平なまでに強い存在が『上位ランカー』なのだと——つらやむよりも

先に納得してしまった。

冷静になってみると、どうしてああまで意地を張ったのかが、わからない。最後こそ欲を出したが、『敵わない相手だ』というのわかりきっていたのに、どうして意固地になったのか。

自分を納得させられそうな理由はいくつか思いつくが、そのどれもが口に出すには恥ずかしすぎて、今の陸朗には受け入れがたいものがあつた。

冗談じゃない、あんなやり取りはもうたくさんだ。俺は戦うのが好きなんじゃなくて、勝つのが好きなんだ。勝ち目のない戦いなんて、逃げてしまえばよかったんだ。

しかし自分にそう言い聞かせてみても、そろそろしいほどの嘘は自身すらも騙すことはできなかった。

なぜならそれは詭弁でしかなく、彼にもかつてはあつたからだ。

ああいうものに憧れて、ああいう風になりたいと思っていたことが

——けれども、なれなかった。

雲上人めいた上位ランカーたちを見上げながら、勝ったり負けたりを繰り返す毎日。不甲斐ない自分に苛立ちを覚え、いつしか『ペルソナクライズ』にログインする目的が、ただ『勝つこと』のみへと変質していき、チートに手を染めるようになった。それがいつだった思い出せなくなったところ——ついに出会った『本物』が、あのゴウト・ホーンだ。

「格が違うよな、やっぱり」

一蹴された、と言っているんだろう。口先で自分を慰めても意味はない。

強いとはああいうことなのだと、かつて憧れたのはああいうものだったのだと、骨身に沁みて理解した。

速くて強い。ゴウト・ホーンというペルソナアバターを説明するのは、ひどくシンプルな言葉で事足りる。動きにも無駄がほとんど

なかった。

「……最短距離を突いてくるんだよな、あいつ」

左腕を宙で動かすようなジェスチャーを行い、思考内デスクトップから先ほどの戦闘のリプレイ動画を呼び出す。すぐさま神経を介し、ホロ・モニタへと映像が浮かび上がった。普段ならこういう『敗北の記録』はさっさと消去してしまうのだが、今回ばかりは特別に残しておきたい気分だった。

まだチートに手を染めていなかったころは対戦の度にリプレイを確認し、自分や他人の動きを研究したものだ。それを思い出し、ずいぶん懐かしい気分になる。

ゴウト・ホーンの動きは、リプレイによって第三者視点から見ても目で追うのがやつとというほどのものだった。

静と動の使い分けが抜群に上手いため、ただでさえ速いの、より一層見切りづらい動きになっている。これでは対戦中、目で捉えきれなくても当たり前だ。

性能にリミッターをかけた、ダミー・アバターでさえ並の上位ランカーと同等以上なこの動き。本来のペルソナアバターで戦えば、この何倍も速いはずだ。相当な腕利きがゴウト・ホーンの正体なのだろうと、容易に想像できる。

破れかぶれの一撃だったとはいえ、そんな強者の角を一本折ったのだ。自分も捨てたものではないなと、少しだけ嬉しくなった。

「ま、結局はこの時に勝負はついてたんだろうけどさ」

リプレイは戦いの終盤、ジェット・バレルがカウンターで肘打ちを喰らい、吹っ飛んだところまで差し掛かっていた。

「一歩間違えたら腕折れてんじゃないか、アレ。よくもこう思い切

った機動ができるもん……だ……？」

腕を軸にして、グライド・スピナーの勢いを殺さずにターンするゴウト・ホーン。同じシーンを巻き戻し、繰り返し再生する。気になることがあった。

「どっかで見た、間違いない。どっかで見た動きだぞ、これ」

陸朗は自分のプレイのみならず、他人の対戦リプレイもかなりの量をチェックしている。

身の回りに親しい対戦仲間のいなかった彼は、リプレイを分析することで他人の動きや戦術を研究していた。とくにランキング一桁台に位置するマスター・クラスと呼ばれるペルソナバターの動きは、何度も繰り返し見たものだ。それこそ目に焼き付けるように。

そんな忘れようもないリプレイ映像の一つと、今回ゴウト・ホーンが見せた動きに、どこか共通点がある気がした。

「まさか……いや、でも」

マスター・クラスは数千人とも数万人ともいわれるペルソナバターの頂点に立つ存在だ。その数はランキング一桁台というところからわかるとおり、全部で九人しかない。しかも陸朗の地元である池袋界限に出没する者となるとただ一人——『剣の魔女』^{ストーリーガ}と呼ばれるペルソナバターのみだった。

ただ、彼女はここ一年ほど『ペルソナクライン』内に姿を見せていないと聞いている。引退したのではないかという噂すらあった。

はやる心を抑えながら自分のライブラリにアクセスし、リプレイをダウンロードする。やけにもたついて思えるのは、興奮のせいだろうか。

「よし……」

ほどなくダウンロードが終わった。

わずかに緊張して、ごくりと唾を飲み込む。

再生が始まると、リプレイにはオペラピンクに輝く装甲を持ったペルソナアバターが、大剣を構え猛然と斬り込んでいく姿が映っていた。

黄金色の髪のような放熱索を翻し、ゴウト・ホーンをはるかに上回るスピードでフィールドを駆け巡るその動きには、一種の感動さえ覚える。それがストレーガだった。

ストレーガはグライド・スピナーを使っているわけではない。彼女の機動力の根幹にあるのは全身に装備した無数のスラスターだ。その推力を精緻にコントロールすることで、三次元的な高速機動を実現している。

地上を滑走していたゴウト・ホーンに比べると、彼女は空間を立体的に使うため、一見その動きは全くの別物だ。

しかしよくよく見ると、静と動の切り替え——細かい加減速や、スピードを維持したまま腕や踵を軸にするターンなど、緩急を効かせて鋭角に動くクセのようなものが、両者には共通しているように思えた。

「確証はない、よな……」

似ている、というだけだ。思い込みだと言いついたら、納得してしまう程度の根拠に過ぎない。反論されたらすぐに主張を引っ込める程度のものだ。

だがゴウト・ホーンやストレーガが得意とする鋭角機動は、刹那を見切る優れた目と失敗を恐れない強い心がなくては、なし得る事ではない。そしてそれを可能とするペルソナアバターが、そう何人

もいるとは思えなかった。

1 - 3 呼び出し

『図書館の利用について、確認したいことがあります。放課後、生徒会室にまでお越し下さい』

そんな電子メールを陸朗が受信したのは、翌日の昼休みのことだ。教室でコロッケパンをかじりながら、ホロ・モニタ内で差出人のところに目をやれば、そこには『生徒会』と書かれていた。ご丁寧にデジタル印章まで付いている。

手の込んだ冗談だとは思えなかった。わざわざ陸朗一人を陥れるのに、生徒会の名前を騙る必要などないのだから。

（生徒会？　なんでまた？）

図書館の利用というのはもちろん『思考空間』へのアクセスも含めての話だろうが、こうして目を付けられるほど、常軌を逸した使い方はしていないはずだった。

学校でスフィアを含めた『思考空間』の利用そのものは校則でも認められていたし、『ペルソナクライン』などスフィア内で展開するアプリケーションについても、直接制御こそできないものの、その利用自体は学校側が把握できるようになっている。当然、問題があれば遮断が可能だ。

そして『ペルソナクライン』は多少マイナーではあるものの、健全なヴァーチャル・リアリティ・アプリケーションである。学校側が名指しで放課後や休み時間における個人的な利用を制限しているアプリだということはない。

要するに、陸朗には呼び出しを受けるような心当たりはまったくないということだ。

「ま、考えてもわかるわきゃねーか」

正確な言葉ではない。正しく言えば、陸朗は考えることを最初から放棄していた。その原因は、今か今かとくつつきそうになっているまぶたにある。

眠そうな理由はもちろん夜更かし——昨日帰宅したあと、遅くまで対ゴウト・ホーン用のアバターセッティングをやっていたせいだ。こんなにまで『ペルソナクライン』のことだけに集中したのは、本当にずいぶん久しぶりだ。

等身大の人型機動兵器に意識をダイブして対戦するという、実にマンガチックな設定を持つ『ペルソナクライン』というゲームは、プレイヤーの分身となるペルソナアバターの構築において、過剰なほどの拡張性を持つ。その気になれば、いくらでも凝れるとまで言われているくらいだ。

とはいえ、ただリアルマネーをかければ強くなるというものでもないし、そもそも単純に強いアバターを作ればいいというものでもない。

たとえば昨日リプレイで見た、ストレーガという最強クラスのアバターを陸朗が使ったとしても、ろくな戦果は上げられないだろう。中身であるプレイヤーとペルソナアバターの相性まで考え、無駄を削り最適化していく。そういう緻密で地道な作業が求められる——それがアバターセッティングだった。

もともと凝り性で職人気質のある陸朗は、この作業が嫌いではない。興が乗ったときなど、それこそ何時間でもいじり倒していたものだ。昨夜のように。

そうしなくなったのはいつだったか——思い出すことはできなかったが、想像することはできる。しかしそれは“その日から現在までの”自分を否定することにも等しくて、考えを無理矢理頭の隅へと追いやリセッティングに没頭した。

とはいえ実のところ、対ゴウト・ホーン用のセッティングなどす

る気はなかった。二度と戦わないつもりだったのだから当然だ。

しかし帰宅後も対戦リプレイを繰り返し見ていると、心の奥底がうずいて、いてもたってもいられなくなった。地力で劣る自分が、どうやったらあの強力なアバターに一泡吹かせることができるのか、考えても考えても止まらなかった。

有効と思える武装の選定、アイテムインベントリの整理と拡張、それによって不足したアバター・ポテンシャルの再配分、変更した武装や能力に合わせた戦術立案。やることはいくらでもあった。自宅のサーバーを利用しながら夢中になって取り組むうちに、気付けば空が白んでいて——結局、二時間ほどしか寝ていない。

午前中の授業など、話半分以下にしか聞いていなかった。居眠りしなかったのが、奇跡的である。

学校の成績に関しては赤点さえ取らなければいいやと諦めている陸朗だが、だからこそ授業態度で目を付けられるわけにはいかない。少なくとも見た目くらいは、殊勝に授業を受けていると取り繕わなければならないのだ。

ならば、昼休みに少しでも寝ておくべきだろう。授業は午後も続くのだ、居眠りの誘惑に耐えるのは、昼飯を食べてからが本番だ。だというのに、目を閉じると脳裏に浮かぶのはメールの文面だ。考えても分かるはずがないと結論したはずなのに、不思議だった。本能的なものなのだろうか。陸朗はメールから、言いようのない危機感に似たものを感じていた。

確かにこれまでは大丈夫だった。

だが状況が変わったとすれば——誰かが突然、目に余る、禁止にしようとか言い出した可能性はゼロではない。

とくに今年の生徒会は、例年になく活発に活動している。まるで『改善』することに餓えているかようだ。もしかしたら図書館利用時における自分の長時間アクセスが、そういう生徒会の『やる気』にロックオンされてしまったのかもしれない。

「はあ……めんどくさいな」

パンの切れっ端を飲み込んで、顔をしかめる。大して美味くもない購買のパンが、余計に味気なく感じられた。

どれほど気分を損ねていようと、生徒会にいちいち逆らうつもりはない。学校で接続するなど言われたら、素直に従うつもりだった。もともとは放課後、不自然なくらい回線が空いていること気付いたから、有効活用していただけたことなのだ。

しかしこれから禁止にするというのなら、その旨をメールで伝えてくれればいいのだ。わざわざ生徒会室にまで呼び出すというのが気に入らない。

そこまでのことか、と思う。遊びで学校の回線を利用しているのは確かに褒められるようなことではないが、ここまでの仕打ちは何かおかしい気がした。

もちろん成績が下がっているなどであれば、呼び出しという事態もありうる。

だが幸いにも陸朗はどの科目においても赤点を取ったことはなかったし、だいたいそれならば担任が生活指導の担当だ。生徒会が首を突っ込んでくる理由にはならない——そう反論したところで、聞くような相手ではないのが厄介だ。

目をつけられたら終わり、というのが生徒の中で密かに流れている生徒会の噂だ。半分は与太話だとしても、一般生徒からの圧倒的サポートを背景に、相当な強権を振りかざしているのは事実だ。

どうしてそんなことが可能なのかと言えば、マンガみたいな話だが、これはもう『生徒会長』ただ一人のカリスマ性にあった。

学校生活に義務感以外のものを見出さず、友達どころか名前を知っている生徒すら少ない陸朗でも、彼女のことだけはそれなりに詳しくかった。そのくらい、今の生徒会長は校内で有名な人だ。

曰く、『ミス・パーフェクト完全無欠』。曰く、『歴代最強の生徒会長』。曰く、『生まれつきの統率者』などなど、彼女を称える言葉は枚挙に暇が

ない。

陸朗自身はそうした空虚な形容をする輩を嫌っていたが、今年の生徒会長という存在がそう言われるほどの傑物である、ということ は理解していた。

もつとも理解しているだけで興味はない。無視できるのなら無視 していたらう。そう、こんな風にちよっかいをかけてこなければ、 存在すら気にもとめなかったはずだ。

（……けど変だな。図書館の利用なら図書委員会の管轄じゃないの か？）

クラウド・コンピューティングの急速な発展によって、ネットワ ーク・コミュニティが成熟しつつある現代では書籍のデジタル化も 進み、紙の本というものがコレクション目的の嗜好品となりつつあ る。

だがそんなご時世でも、学校に図書館というものは存在している し、司書を手伝う図書委員会なるものも存続していた。

存在自体は旧態依然とした教育者側のノスタルジーが詰まったも のであることは違いないのだろうが、陸朗は図書館という施設が好 きだった。

単純に両親が本好きという好事家の家庭に育ったこともある。そ して何よりも図書館は利用者が少ないということがいい。

学校生活というものをわずらわしく感じている陸朗にとって、図 書館はパーソナルスペースに近い感覚でいられる、数少ない場所だ った。

しかし、その憩いの場に今生徒会からのメスが入られようとし ている。心穏やかなわけはなく——はつきり言えば不愉快だ。

しかも図書館を管理する図書委員会ならばともかく、何故かその 頭越しに生徒会が直接自分に干渉しようとしているのだ。納得はで きないし、不思議だった。

「行ってみりゃ、わかるんだろうけど。行きたくねえなあ……」

生徒会室に呼び出されるというのは、生徒たちの中では特別な意味を持っている。それも良きにつけ悪きにつけ。

生徒会室に入っていくところを見られただけで、校内ネットワークで尾ひれがついた噂があつという間に広がり、『次の犠牲者』が出るまで行く先々でひそひそと囁かれる羽目になるだろう。そのくらい影響力のある存在なのだ、今の生徒会は。

この学校に限らず、ネットワーク社会が抱える問題は、二十一世紀初頭から本質は何も変わっていない。『情報の真偽に関わらずあつという間に拡散する』ことは、情報化社会の大きなメリットであり、デメリットだ。扱いを間違えれば、手痛い火傷を負うことになる。

もつとも、そういう危険性さえ上手く利用できる人間こそ、時代の成功者となるのだろうが――あいにくと一介の中学生に過ぎない陸朗には、まだ縁のない話だった。

彼にとって当面の問題はネットワーク社会の抱える病巣ではなく、降って湧いたような災難と、退つ引きならない状況のほうだ。

行かないという選択肢はない。無視すれば催促のメールが来ることは目に見えているし、当然だが心証も悪くなる。わざわざ悪い方へと自分を追い込んでいく必要はない。

結局はなるべく他の生徒に見つからないようにしながら、生徒会を訪ねるくらいしか取り得る手段はないだろう。

放課後、という曖昧な時間を指定されたのは幸いだった。せめて部活動をしている生徒が移動するまで待つて、生徒会室に向かえばいいだろう。

そこまで考えて相手が時間を決めたとは思えないが、こと生徒会に関しては何があつても不思議ではない。自分でもずいぶん被害妄想めいたことを口にしていて、と思っているが、たった一通のメール

のせいで自分が追い詰められたのは事実だ。

「まいったなあ……」

また、ため息。このまま放課後まで数時間、憂鬱な気分ではなくてはならないと思うと、そのこと自体がまず憂鬱だった。

1 - 3 呼び出し（後書き）

登場人物の少ない小説だな……
w

1 - 4 秋月雪乃

生徒会室の扉は他の教室のような自動ドアではなく、今時オートロックすらついていない、古めかしい両開きの扉だった。ただ古い——というわけはもちろんなく、立派な彫刻の施された天井まである木製の扉は、陸朗のような人間が見ても金がかかっていることだけはわかった。

まるで生徒会の権力を象徴するかのような扉だ。似つかわしいといえは似つかわしいが、こういう権威主義的な趣味はどうも好きになれない。気後れしてしまう。

基本的に陸朗は小心者だ。世間様と波風を立てずに生きていきたいと思っている。シヨッキングでスリリングなイベントは、仮想現実の中だけでたくさんだ。

だがそんなふうを考える彼が、今こうしておそらくは入学以来、もつともシヨッキングでスリリングな状況に立たされているのは、なんとも皮肉なことだった。

どうしよう——ドアをノックしようと手を上げたまま、固まること数分。叩くという簡単なはずの行為に気後れして、手が震える。周囲に人はいない。なのに、緊張で口の中がカラカラだ。つくづく現実リアルの自分は臆病なのだと思い知らされる。たかがこの程度のことであたふたするのだから。

「うーん、早く入ってきてくれないかな」

「ひうつ！？」

「誰かに見られたくないのなら、そこで突っ立っているよりかは、入ったほうがよっぽどマシだと思うけどね？」

その声は、生徒会室の扉の中から聞こえた。扉越しなので少しぐもっているが、少女の声だ。諭すような口振りだが、それでいて

反論を許さない毅然とした印象を受ける。

逆らえない、と直感した。

「あ、あ……」

「はーやーくー」

「は、はいっ！」

ノブに手をかけると、それは大した抵抗もなくスムーズに回った。ぎいっと見た目通りの低い音を立てながら、ゆっくりと扉が開く。

「ほ……あ」

見ただけで思わず変な声が出た。

初めて入る生徒会室は、そうして感嘆の声を上げるに相応しいものだった。無味乾燥でそれこそ牢獄のような教室とは違う、言わば『高級そうな』雰囲気を持った場所である——と、感じた。

「よく来てくれたね。二年F組、真壁陸朗君」

「うえっ!？」

声のしたほうに振り向く。

そこにいたのは数々の噂から想像していたような、眼鏡をかけて詩集でも嗜みつつ、アフタヌーンティーを楽しむような完全無欠のお嬢様ではなく——窓際に置かれた大きな高級デスクの上に行儀悪く腰かける、金髪碧眼の美少女だった。きっちりと着込んだブレザーの襟元に結ばれたネクタイの色から、三年生であることがわかる。初対面の相手だ。しかし、それが誰であるかはすぐに思い当たった。

腰まであるふわふわした金髪と、ブルー・サファイアの瞳、白磁の肌。日の光の中にあって、それにいささかも劣らぬほどの、まさ

しく輝くような美貌。

日本人離れた容姿を持つこんな美少女など、この学校には一人しかない。

「はじめまして、僕は秋月雪乃^{あきつき ゆきの}。この学校の……生徒会長なんてものをやってる。ま、気軽に『雪乃ちゃん』とでも呼んでくれてかまわない」

「ゆ、雪乃ちゃんはちよつと……」

「いやいや、かしこまらなくて構わないよ。生徒会長なんて、そんな大したものじゃないんだ」

彼女はそう言って、悪戯っぽい笑みを浮かべた。

かしこまらなくていいと言われても、彼女を前にして緊張しない生徒などいない。色々な意味で、彼女は圧倒的すぎるのだ。同じ中学生だと思えないほどに。

「そうだ、立たせっぱなしじゃ悪いよね。そっちのソファにかけてくれるかい」

「あ、はい。じゃあ失礼して……」

促されるまま、部屋に置かれた応接セットに腰を下ろす。ぎしぎしと関節が音を立てそうなくらい、ぎこちない動きだった。

「固いなあ。そんな緊張しなくてもいいんだけど……コーヒーでも飲む？」

「コーヒーですか？」

「それとも、紅茶のほうがいいかな？」

「コ、コーヒーでお願いします！」

「はいよー」

生徒会長は頷くと、机から降りて部屋の片隅にある棚に向かった。私物だろうか、そこにあるのは外国製らしきステンレスのコーヒー・パーコレーターだ。

同じ棚から品のいいデザインのカップを取り出し、コーヒーを注ぐ。ふわりと漂う香ばしい匂いのおかげか、少しだけ心が落ち着いた気がした。

「お待たせ」

コーヒーと小さなミルクピッチャー、そして砂糖壺をテーブルに置いた生徒会長は、陸朗の向かいのソファに座る。一挙手一投足がいちいち優雅で、育ちの良さを感じさせる仕草だった。

陸朗は受け取ったコーヒーを喉の奥に流し込むふりをしつつ、生徒会長の様子をうかがう。

目の前では、彼女が砂糖壺から角砂糖を取り出すところだった。数は三個。ミルクもたっぷり入れていた。意外に甘党らしい。

しかしもちろん、知りたいのはそんなことではない——ないのだが、彼女は素知らぬ顔でカップの中身を緩やかに傾け、その味と香りを堪能していた。

「さて……と。わざわざ来てもらったんだ、こっちの理由から話るのがスジってもんだよね」

しばらくしてカップの中身が半分ほど減ったところ、生徒会長はようやくに本題に入るつもりになったようだった。

「とりあえずメールでは図書館利用についてと書いたんだけど……さて、キミに心当たりはあるかい？」

「……ないと、思います」

「ない？」

「少なくとも呼び出しを受けるようなことは、なにも」
「なるほど。図書館で放課後ゲームをプレイするのは別に悪くない、と」

「ええ」

昼休みからずっと考え続けたが、やはりゲームプレイぐらいで生徒会長に呼び出されるとは、どうしても思えなかった。

「要するに、『褒められたことではないが問題はない』くらいに思ってるってことか」

「そうですね、けど」

言葉を濁す。

そんな陸朗を、生徒会長を名乗る少女はまじまじと観察していた。正直居心地が悪い。品定めをされているようだ。

「うーん、僕の顔を伺うような言い方はやめたほうがいいね。悪いクセになるから。それより陸朗君、『ペルクラ』——いや、『ペルソナクライン』は楽しいかい？」
「……ッ！」

アプリの名前を出されて、少し驚く。が、知っていても当然だ。全部調べた上で、自分呼び出したのだろうから。

「毎日プレイしているようだけど……どうかな？」
「正直、わからないです。習慣みたいなものだし……だから、強烈に面白いつて感じることはもうなくて……」

生徒会長はそう、と頷くと、形のよい顎の先を摘んで考えるようなそぶりを見せる。

「あの、そういう言い方するってことは、やっぱり学校でプレイするってのがマズかったんですか？ それとも、これからダメになるとか」

「いや、そんなことはないよ？ そもそも学校からゲームしてるの、キミだけじゃないし。ま、多くはないけどね」

「そ、そうですか」

じゃあなんで呼びつけたんだ、と喉元まで出そうになった言葉を飲み込む。

きつと、それをこれから説明しようというのだろう。陸朗は彼女が口を開くのを、辛抱強く待った。

「ぶつちやけた話をするね、別にキミに詰問やら注意やらをしようってつもりはないんだ。ここに呼んだのは……」

「呼んだのは？」

オウム返しに問い返すと、可憐な口元がさも愉快そうに笑みの形を作る。

「単なる興味本位さ。キミが習慣になるほどやり込んだ『ペルソナクライン』、その話を聞こうと思ってね」

「そ、それだけのことで！？」

「先に言っておくけど、もちろん公私混同だよ。でも、どうしてもキミに直接尋ねたかったからね。こういう機会を作らせてもらった」

「俺にですか？」

「そう、キミにだ」

そう言つと、生徒会長は陸朗の左手を優しく掴んだ。手首のリングから伸びる極薄の『掌装着型端末』を付けた左手を。

「な、なにを？」

「ちよつと借りるよ、キミのパムコンを」

「借りるって……」

答えるより先に、生徒会長は陸朗と同じように『掌装着型端末』を装着している左手を彼の掌に重ね合わせる。一瞬、ピリつと『掌装着型端末』に電気が走ったのを感じた。二人の間でクローズド・ネットワークが繋がったのだ。

「少しデータを送るけどいいかい？ 大したサイズじゃないから、ストレージの容量は気にしないでいいよ」

「か、かまいませんけど」

生まれて初めて触る女の子の掌は、たとうもなく柔らかかった。

陸朗がそのぬくもりにどぎまぎしながら頷くと、すぐにホロ・モニタにアクセス許可の申請が出る。ウイルス・チェッカーを起動しつつ、それにOKと答えた。

流れてきたデータは、『思考空間』へのアクセスログだった。ざっと目を通すと、学校からVSへのアクセスを洗い出したものだということがわかる。

「一応説明すると、これは昨日の放課後、学校からVSへアクセスした記録だ。一般生徒の閲覧は禁止されているものだが……今だけは特別だよ？ それでだね、これにはもちろん陸朗君が図書館からアクセスしたのも入ってる。というか、ほとんどキミのばっかだね」

「あ……す、すみません！」

「別に謝らなくてもいいんだけど。で、これを調べるとキミが同じカテゴリの動画……『ペルクラ』のリプレイを繰り返し見ていた

ことがわかる。それも特定のもののだけを数種類。なぜだい？」

「な、なぜって言われても。俺はちよっと、調べ物をしただけで」

昨日繰り返し見たリプレイといえば、あの『剣の魔女』に関連するものだけだ。たしかにあれから他のリプレイもダウンロードして見比べてみたが、陸朗の直感を補強するような材料はなかった。

陸朗にとってはその時点で、リプレイそのものについての興味は完結してしまっている。今さら「なぜ」と問われても、大して答えようはない。

「ふうん。調べ物、ね」

すつと、生徒会長が目を細めた。

「な、なにか……俺、まずいことしたんですか？」

「そういうわけじゃないんだが……キミがしていたことではなく、キミが見ていたものに興味がある。どうしてこのリプレイを見ようと思ったのか、それが知りたい」

「それは……」

どうしてそんなことに興味を抱くのか、まるでわからない。

しかしその青い瞳を真っ直ぐに向けられると、喋らずにはいられない気分になる。抗いがたい、無言の強制力があつた。

「昨日『ペルクラ』で戦った対戦相手の動きで、ちよっと」

「っていうと？」

興味津々といった様子で、生徒会長が話の続きをつながした。

「説明しても理解してもらえるかわかりませんが……動きに個人

のクセが出やすいんですよ、このアプリ。それで、加速や減速するタイミングの取り方とか、そういう数値で出てこない部分が気になつて」

「なんだい、相手がズルでもしてると思ったのかい？」

「そういう意味じゃなくて……ただ、前に見たことのある動きだったから」

「それでリプレイを調べた？」

「ええ。ある有名なプレイヤーの動きと、どうにも似てる気がしていやその確証とかはなくて、単なる俺の思い込みだったりするのかもしれないけど、そのときは似てるって感じた……か……」

身乗り出すようにして話を聞く生徒会長の顔が、すぐ目の前にあった。重ねたままの左手がほんのりと汗ばんでいるのを感じる。それが自分の汗なのか、それとも彼女のものなのかすらわからない。

「あ、あの」

「うん？」

「ちよつと、近いです……」

「そうかい？　僕としてはもっと近づいてもいいんだけど」

口元に変わらぬ微笑みを浮かべたまま、生徒会長はすすつと音もなく陸朗に身を寄せる。長い金髪が揺れるとシャンプーのものだろうか、不思議な甘い匂いがした。

「いや、だから」

「そんなに嫌わなくてもいいじゃないか。大事な話は、ここからさ」
「は？」

左手にまた小さく電気の痛みが走る。

水口・モニタ内に、『思考空間』の最深層・情報球殻構造体へのアクセスが行われているアナウンスが表示された。外部から――目の前にいる生徒会長から、自分の『知覚変換』が制御されようとし

ているのだ。しかし手を重ねられたまま、振り払うことすらできなかった。

陸朗はただただ混乱し、間抜けな声を上げるだけ。状況が把握できなかった。

「え？ え！？」

「ありがとう、だいたい僕の推測通りだった。というわけで、キミをこのまま帰すわけにはいかなかったな」

「は、はい？ なんで！？」

青い目が静かに陸朗を見上げていた。大きく澄んだ瞳に、動揺を隠せない自分の顔が映っている。

「さっきのデータ、よく見たのかい？ ダメだなあ、流しただけだろう。よく見てれば気付いたろうに……いいかい、あれには校内から『ペルクラ』で遊んでいた記録が載ってた——そう、『校内』だ。図書館だけじゃあない」

「俺以外の記録も載っていたと……？ でも、それが？」

「記録は二カ所。一ツは図書館、一ツは『ここ』だ。そして両者は同じ時間、同じフィールドに繋いでいた……つまり、どういうことだろうね？」

それは教師が生徒に質問を投げかけるような口調だった。挑発的な表情が、「まだ気付かないのか？」と問いかけている。

考えれば、答えはすぐ見つかった。

そういえば彼女はさっきから、ずっと『ペルソナクライン』を略称で呼んでいる。まるでそのほうが言い慣れているかのよう。

ようやく気付いた。生徒会長が何を言おうとしているのか——いや、何者であるのかを。そして、陸朗自身に向けられた視線の意味を。

「俺と同じ時間に、誰かがこの部屋から『ペルクラ』をプレイしていた……いや、俺と対戦していた！ だったら、それって!？」
「そう。キミが昨日戦っていた相手は……この僕さ」

にいつと、生徒会長の口元が魔女のように吊り上がる。

その瞬間、真下に向かって自分の中にある『なにか』——魂とか、そういう不定形のものが引きずり出されるような、大きな力を感じた。

陸朗はこの感覚をよく知っている。スフィアへ『知覚変換』するときに感じる『引力』だ。それはつまり、生徒会長による外部アクセスによって、自分の『掌装着型端末』が完全にその支配下に置かれたということだった。

同時にホロ・モニタ内で勝手にプログラム・ランチャーが起動し、システムが『ペルソナクライン』を起動させていた。もはや止めようはない。

視界はすでに現実から『思考空間』^{リアル}の映像へ変換され、世界は仮想現実へと切り替わっていた。ほどなくペルソナアバターが展開され、スフィアへと突入することになる。

見れば、目の前にいる生徒会長も自分と同じようにスフィアへと引き込まれつつあった。いや、違う。彼女に同調する形で、陸朗こそが引きずられているのだ。

「な、なんで『同調変換』^{バディ・リアクト}をつ!？」

「ちよつと付き合ってもらつよ、ジェット・バレル。まだ、確かめたいことがあるからね」

1 - 4 秋月雪乃（後書き）

ヒロイン登場。

やっと登場人物二人目。

1 - 5 リベンジ・マツチ

リアクトにかかった時間は、ほんの一瞬だった。

深海の底を抜けるように、ある一点で引力から解放される。『知覚変換』によってアクセスするデータの海的最深層——情報圧縮による超高速処理空間である『スフィア』へと到達したのだ。

そこは世界を裏返したような空間だった。球状の情報境界面の内側に、ヴァーチャル・リアリティで再現された『世界』が張り付いている。上を見上げれば、青い空の代わりに反対側の大地が見えた。スフィアは『思考空間』内にいくつも存在するが、現実におけるメガシティ単位でそれぞれが個々の球状世界として独立している。学校からアクセスできるのは、東京二十三区をモデルにした『トーキョー・スフィア』だ。

陸朗たちが今いるのは、そのうちのイケブクロ・エリアと呼ばれる区画だった。

彼にしてみれば、慣れ親しんだ場所。ホームグラウンドそして世界の文字通り裏側にある『もう一つの現実』だ。

「くっ……!？」

その『現実』に気づいたときには、もう自分も生徒会長も、ペルソナバターをその身にまとっていた。思考内デスクトップには、周囲にペルソナクラインのバトルフィールドが展開されたことを示すシグナルが表示されている。

昨日、自分を一蹴したあのペルソナバター、ゴウト・ホーン。彼女が、自分のすぐ近くにいます。

当たり前だ。掌を重ねて行うバディ・リアクトで、彼女によってスフィアへと半強制的に連れてこられたのだから。

半ば混乱したまま繋がれていた手を振り払い、彼女から距離を取

った。

「……つれないなあ。女の子に、この仕打ちはないんじゃない？」
「あんたが……ゴウト・ホーンだったのか」

おどけたようなその言葉に、敗戦の記憶が甦る。

一本角のペルソナアバターを睨みつけると、彼女は困ったように肩をすくめた。

「なんでこんなことを？ 制裁でも加えようっていうんですか、昨日みたく？」

「うーん、ずいぶんくだらない質問をするね」

その言葉には、どこか揶揄するかのような響きがある。

「くだらない？」

「だってそうじゃないかな？ キミが僕に聞きたいのは、そんなどうでもいいようなことじゃないはずだ。違つかい？」

お前の考えなど、なにかもわかっているぞ。そう言わんばかりの口ぶりに反感を覚える。

しかし、事実生徒会長の言う通りだった。彼女の目的など、知ったところでどうにもならない。なるようにしかならないだろう。むしろ今気になっているのは、彼女がゴウト・ホーンであったことと、その『正体』のほうなのだから。

だが陸朗には——ジェット・バレルにはわかっている。彼の疑問に、ゴウト・ホーンが素直に答えることなどないことを。

「俺の質問になんか、答える気はないでしょう」

「まあね。けど、それもキミ次第だ。僕に言うこと、きかせてみな

よ。力尽くでもかまわない、できるものならね」

そう言って、含み笑いを漏らすゴウト・ホーンこと生徒会長。傲慢極まりない台詞だが、それを裏付けるだけの力を、彼女はたしかに持っていた。

「力尽く……ですか」

「そうさ。考えてもみなよ。ここは『ペルソナクライン』……そのバトルフィールドだろ？」

彼女の言うとおり、すでに『ペルソナクライン』が起動しているため、周囲は現実——生徒会室を再現した通常空間ではなく、元の空間データをベースとした専用のバトルフィールドへと切り替わっている。

状態は昨日と同じ廃墟。おそらくここへ引き込んだとき、生徒会長がわざとそう設定したのだろう。

「バトルフィールドに、ペルソナアバターが二人。とすれば、やることなんてひとつしかないじゃない」

「……昨日の続きをしようとしても？」

「はっはっは。あれは僕の勝ちだよ、疑いようもなくね。こっちの傷は、この角だけだもん」

彼女——ゴウト・ホーンはそう言って、片方折れたままの角を指差した。

「もっともダミー・アバターとはいえ、僕にまともな攻撃を当てた奴は久しぶりだ。正直言って、ずいぶん驚いた」

「大した自信ですね、会長」

「会長はやめてほしいなあ。今の僕はゴウト・ホーンだよ、ジェツ

ト・バレル君」

上から目線が素なのか、挑発なのか判断がつかない。

昨日と違い、ボイスチェンジャーを通さない彼女本来の涼やかな声から、その内心を推し量ることは難しかった。

「結局、何をしようってんですか、あんたは？」

苛立ちがつのれば、いつまでも従順な『下級生』を取り繕っても
いられない。自然と言葉が荒くなった。

「続きじゃなくて、仕切り直しだね。負けを取り返したくないかい、
リベンジ・マッチさ、ジェット・バレル。全力を出してみなよ。キ
ミの力は昨日みたいに、角一本分で終わりじゃないはずだ」

「……あれでも、精一杯やったつもりなんだけどな」

「精一杯……うん、精一杯か。たしかにそうかもしれない。けどね、
ただどね……『その先』って、あるものだよ？ キミはそこまで使
っちゃいない」

「そんなの、あんたにわかるはずが……」

「わかるさ。なにせ僕はキミより強いからね。『その先』だって知
っている」

「……ッ……！」

事実を事実であると突き付けられることは、ときに大きくプライ
ドを傷つけることがある。その事実を受け入れていたとしても、な
お。

「キミが望むなら、それを教えてあげることやぶさかじゃないけ
ど、どうする？」

そのまま聞き流すには過ぎた言葉だった。彼女が——ゴウト・ホーンが強いことは認めている。だがことさらそれを鼻にかけ、その上「哀れなお前に恵んでやる」と言わんばかりの物言いには、さすがに我慢ならなかった。

「馬鹿に……してるのか？」

「怒ったかい？ 僕の言葉に腹を立てたのかい？ じゃあ、やってみなよ。僕を地べたに叩き付けて、ひいひい言わせながらごめんなさいって謝らせてみたまえ。もちろんキミの持ちうるもの、すべてを使ってね。チートしたってかまわないよ、ん？」

試すような口振りだった。だが、こうやってけん制してチートを封じようというつもりはないのだろう。いや、間違いなく彼女は心底「チートをして構わない」と思っている。

ジェット・バレルごとき、どうにでもできるという絶大なる自信おそらくそれは事実で、真実だ。しかしそこまで言うかと、そこまですの矜持に傷をつけるかと、怒りのボルテージがさらに加速する。

「……俺、あんたのこと嫌いになりそうだ。いや、嫌いだ、間違いなく！」

「それは困るな。僕はキミのことが好きになりそうなのに」

「そういう台詞が……いちばんむかつくんだ！」

もはや敵意を隠すことはやめた。

吐き捨てるように言って、アイテムインベントリを開き、武器のデータをロードする。装備したのは、愛用のロング・ライフルだ。

勝てるかどうかなんて関係ない。とにかくこの腹が立つ女に一発ぶちこんでやらなければ、気がすまなかった。

「いいぜ、やってやるよ。リベンジ・マッチだ。昨日の借りを返し

「やる！」

「くつくつく。そうこなくっちゃ」

銃口を突き付けられても、ゴウト・ホーンの状態はまったく変わらない。余裕たっぷりひとしきり嘲笑すると、彼女はぱちりと指を弾いた。

虚空の一点で情報粒子が密度を増し、『^{ジャッジ}審判装置』が実体化する。

「時間は無制限、勝敗はダブルノックアウトによるドローなしのサドンデス。白黒はつきりつけるといことでもいいかな？」

「望むところだ」

「即答か。さすがに男の子だね、カッコいいじゃない。そこまで腹を決めてるんなら、ただの勝負じゃつまらないな……」

さつき初めて出会ったときに似た、悪戯っぽい口振りだった。仮面の奥では、さぞや悪辣な笑みでも浮かべているに違いない。

「つまらない？」

「つまらないさ。せつかく現実^{リアル}の知り合い同士^{デュエル}の対戦なんだ、勝ち星のやりとりだけじゃもったいない。だから……ここはひとつ『賭け』でもしようじゃないか、ジェット・バレル」

「賭け……だと？」

また妙なことを言い出した。

ゴウト・ホーン——いや、彼女が『秋月雪乃』であるときから、その言動はどこか突拍子がない。陸朗にとっては予想外のことはかりをやってくる。

手玉にとられているようで、面白くない。むしろはらわたが煮えくりかえっている。

だが、そうやって陸朗が腹を立てることさえ、彼女は計算尽くな

のだろう。重ね重ねの挑発は明らかにわざとだ。退けないところまで陸朗を追い込むことこそが、彼女の目的。

しかしそれに気付いたところで、今さら振り上げた拳を納めるつもりなどない。この高慢な女の鼻を明かしてやる。それだけを今、考えていた。

「……賭けるものは？」

「キミの身柄と、僕の身柄。勝った方は負けた方の言うことをひとつだけ、なんでも聞かなきゃいけない……なんてのはどうだい？」
「ずいぶん、ありがちな。個性派気取りのあんたらしくない条件だが」

「なーに、わかりやすい言葉にして、言質を取るだけだよ。結局はさっき言ったとおりさ。腕尽くで僕を屈服させてみな、ジェット・バレル」

「ああなるほど、それはわかりやすい！」

「その言葉、同意と見なしていいようだね。じゃあ……始めようか」

すつとゴウト・ホーンが腕を一振りすると、手の中にグレイヴが現れる。

『審判装置』が開始のシグナルを二人の水口・モニタに送ったのは、それとまったく同時のことだった。

1 - 5 リベンジ・マッチ（後書き）

学生の頃、学校の視聴覚室にサターン持ち込んで、バーチャファイターやってたことを思い出します。

1 - 6 奇襲

奇襲。

リベンジ・マッチの立ち上がりは、その二文字から始まった。

「おおおっ!!」

咆哮しながら大地を蹴りつけ、低い姿勢でゴウト・ホーンへと突進するジェット・バレル。

陸朗のペルソナアバター『ジェット・バレル黒い銃身』はその名の通り、射撃戦を主体としたチューニングをされている。インファイト接近戦もこなせないことはないが、わざわざ不向きな距離を維持する必要はない。開幕と同時にけん制しながらバツクダッシュで距離を取るのが、通常の戦闘セオリーだ。

しかし彼は今、そのセオリーを破った。ロング・ライフルを槍のごとく構えての突撃。むろん、やぶれかぶれの単なるセオリー無視ではない。狙いは間合いを詰めての射撃だ。

ゴウト・ホーンに残る傷——アバターの象徴とも言えるその角を折ったのは、ごく至近距離からの一撃だった。無論本来は仮面破壊を狙っていたもの。ゴウト・ホーンがかわしたのは、さすがというほかない。

だがしかし、彼女をしてなお超至近距離では直撃を避けるので精一杯だったのだ。だからこそ角は折れた。

突破口はそこにある。

避けきれないタイミングでの至近射撃——直撃を狙える可能性は、それ以外思いつかなかった。いや、これしかない。

開幕と同時の奇襲。この先彼女と何分戦うか、戦えるのかわからないが、間違いなくもっとも命中率が高いのは、今この瞬間になるはずだ。

状況、間合い、距離、そのすべてを揃えるチャンスは、そうめつたにあるものではないのだから。

開幕がミドルレンジで始まったのも幸運だった。懷に飛び込むまでにかかる時間はほんのわずか。ジェット・バレルが軽量高機動型のチューニングであることが、ここでプラスに働いた。

「詰めてくる！？ けどっ！」

「動き出す前に、撃ち抜くッ！」

昨日の戦いで、陸朗は学んだことがあった。

ゴウト・ホーンの機動力を支える特殊装備グライド・スピナーには、いくつか弱点がある。そのうちのひとつが上下方向に機動力を発揮できないということであり、そしてもうひとつが——車輪であるがゆえに、始動にわずかなラグがあるということだった。

『ペルソナクライン』というアプリケーションは、『知覚変換』^{リアル}技術を最大限に活用し、現実とほとんど区別がつかないほどの体験をプレイヤーに与える。だがそれゆえに、いくらでも現実から解き放たれる余地がありながら、あえて現実の物理法則による支配を許している面が存在するのだ。

甲高く耳に響くスキル音もそのひとつ。車輪であるグライド・スピナーは、急発進・急加速といった行動にグリップ力が追いつかず、空転させてしまうことがある。

前回の対戦で彼女が小刻みに動き続けていたのは、グライド・スピナーを静止させることを嫌ったに違いなかった。

グライド・スピナーは静止状態からでは始動がワンテンポ遅れる。ほんのわずかな時間ではあるが、陸朗にとってはそれこそが数少ない勝機。だからこそ開幕からの奇襲だった。開幕時は静止状態——『ペルソナクライン』の対戦モードにおける不文律だ。そここそを狙った。

「もらったあつ！」

走り込んだ姿勢のままライフルを構え、トリガーを引き絞る。狙いは一点、あの山羊の首を獲るのみだ。

ジェット・バレルのライフルには三点バースト——トリガーを一度引くと三連射される機能——はついていない。モードはフルオート連射のみとなる。しかし幾度も使い込んで慣れ親しんだこの銃ならば、指先の感覚だけで正確に望んだだけの弾数を撃ち込めるまでに習熟していた。

グリップに伝わる震動と共に、タタタツと短く発射音が鳴った。空を裂く三発の高速徹甲弾が、ゴウト・ホーンの首を撃ち貫かんと襲いかかる。

どれだけゴウト・ホーンが、その正体が達人であろうとも、無を有にすることは叶わない。ほんのわずかなタイミングの遅れは取り返しのつかない危機として、今まさに牙を剥こうとしている。

だがしかし、そこをこらえてこそその一流。ゼロを一にできないのなら、一以外の答えを探し、見つけだす。それができるから一流なのだ。

「せい……やつ！」

グライド・スピナーは頼れない。ならばと彼女が選んだのは縦の動き。しかし、ただの跳躍では銃弾を避けきれはらずは——ボールボルトグレイヴを使い棒高跳びの要領で、彼女はその身を宙へと躍らせる。

「そう避けるか、避けやがったか！」

「……っ!？」

「逃げるのならば、上しかないよな！」

しめた、まんまと、予想通りに、ゴウト・ホーンが動いてくれた。

陸朗が仮面の下で笑みを浮かべる。避けられたら玉砕する気で突っ込んだつもりはない。こうなる可能性は、二手三手の先のことは当然のように読んでいた。

ジェット・バレルの装甲が展開し、無数のマイクロミサイルが空に向かってバラ撒かれる。昨日の反省をふまえた多弾頭ミサイルが彼の頭上で炸裂し、あたかも花火のように空を飾った。

初撃の奇襲が当たれば良し、避けられるのもまた織り込み済み。そして『点』で避けられるなら、『面』で攻める。それが陸朗の出した結論だった。

そして爆煙に包まれるゴウト・ホーン。だが減ったライフ・ポイントのはんのわずかだ。あの板バネのような装甲パーツは、想定以上に防御力が高いらしい。

「堅牢だな、ちくしょう！」

拡散弾頭ミサイル程度ではこの程度か——すぐさま頭を切り換えて、打つべき次の手を探す。ホロ・モニタ内でアイテムインベントリを展開すると、新しい武器のデータをロードした。

それはレンガを二つ重ねたほどの大きさをした、金属製の武骨な箱だ。同じ形のものがいくつもジェット・バレルの前方に実体化し、ゴトゴトと音を立てながら、扇形の壁のように積み上がっていく。ちょうど、ゴウト・ホーンの予想着地点を取り囲むような格好になる。

「やるね、奇襲そのもののさえ陽動に使うとは！」

「まだ終わってないぞ、ゴウト・ホーン！」

「へっ！？ なっ、これは……クヴァドラット・ミネ指向性散弾地雷ッ！？」

「正解ッ！」

ゴウト・ホーンが着地した瞬間を狙い澄まし、無線で指向性散弾

地雷を起爆する。地雷の信管が一斉に点火され、金属製の箱に収められた内包物——ひとつあたり七百個にも及ぶ、直径一・二ミリの超合金ベアリング弾が炸裂する。

着地したゴウト・ホーンに全弾が集中するよう、適切に配置された地雷の数は四十個にも及ぶ。単純計算で三万発近いベアリング弾が、横殴りの豪雨のように獲物へと襲いかかった。

硬い板バネ装甲を撃ち抜く耳障りな金属音が、悲鳴のようにバートルフィールドに響く。断続的に黄色い輝きがきらめくのは、金属が削り取られたときに飛んだ火花か。

文字通り雨霞と降り注ぐ無数の超合金弾の猛威に曝されては、さすがのゴウト・ホーンも堪え忍ぶばかりではない。完全に足が止まっていた。

「……もう一撃いつ！」

散弾であるがゆえに威力はそこまで高くないが、いかんせん数が数だ。弾雨を浴びて確実に減っていく、ゴウト・ホーンのライフ・ポイント。だがここで攻手を緩めるほど、陸朗は思い上がってはいない。

ロング・ライフルを手放すと、新しい武器を両手に呼び出す。

それはグリップとサイト、肩当てのついた、金属製の円筒だった。だいたいジェット・バレルの身長と比べると、半分強の長さがある。分類上、『無反動砲』と呼ばれる武器だ。それを両手に一本ずつ構えるジェット・バレル。

「いつけえっ！！」

グリップをしっかりと握り込みトリガーを引いた瞬間、強烈な爆風を金属筒の後方より噴出しながら、砲弾が発射される。

弾種は成型炸薬弾。爆轟波によって発生する液化化金属の超高速

メタルジ
トミ

噴流によつて、重装甲さえも侵徹することが可能な弾頭だ。

ジェット・バレルが発射したものは多目的榴弾と呼ばれ、ベアリングやワイヤーを内蔵することで加害範囲を広げた、『面』と『点』の攻撃を併せ持つもの。誘導性能はまったくなく、完全に相手の動きを止めたときに備えて陸朗が用意した、切り札とも言える武器だった。

飛翔する弾頭が着弾する。その瞬間、彼女の身体がぐらりと傾いたように見えた。しかしそれを確かめる暇もなく、土ごと標的を吹き飛ばして盛大な爆風が巻き起こり、ゴウト・ホーンの姿を完全に覆い隠してしまう。

「当たった！ いや、でも、これは……！」

爆風の向こうを睨みつけながら、肩にずしりとのしかかっていた無反動砲を、苛立たしげに投げ捨てる。

コンソールに表示されているゴウト・ホーンの残りライフ・ポイントが五割弱。これだけの好機に、あれだけの攻撃を叩き込んで半分までしか追い込めなかった。

仮面の下で唇を噛む。悔しさは隠せない。

「嘘だろ……こんなに撃ち込んで倒せないとか、なんなんだよ……！」

アバターの本質的なポテンシャルが違いすぎるのだ。それが大きなダメージ補正となつて現れている。

アバターのランクの差は、『ペルソナクライズ』のあらゆる『原則』に補正をかける。本来これだけの連続攻撃は、ジェット・バレルがこれまで戦ってきたような同ランクの相手どころか、相当に格上の相手でもオーバーキルになるダメージだ。

しかし真の強者——さらなる上位ランカーとのまともな対戦経験

に乏しい陸朗は、ランク差によるダメージ補正がどれほどのものかというのを、実感として持っていない。それゆえゴウト・ホーンを見誤り、倒しきれなかったのだ。

やがて爆風が晴れる。ゆらりと幽鬼のように、ゴウト・ホーンが身を起こした。

強靱だった板バネ装甲も、拡散弾頭ミサイルと指向性散弾地雷、そして無反動砲による攻撃を立て続けに受けて細かくヒビが入り、見る影もなくボロボロになっている。見た目からしてダメージがなかったわけではないのだろうが、陸朗は倒すつもりでやったのだ。それなのにフィールドに立っているその姿からは、格の差というものを思い知らされている気がした。

「くそ！」

「そこまで悔しがることはないよ。最後の榴弾なんて、ホントにヤバかった。なんとか体をかわしたけど、直撃をもらったらさすがに危なかったよ」

「ちょ、直撃しなかったのか……！」

無数の散弾地雷の猛威にさらされた直後でなお、とっさの回避行動に移れる冷静な判断力と果断な行動力。それこそが彼女の経験のたまものであり、強さだ。陸朗には、ジェット・バレルにはないものだ。

「しかし驚いたよ。やれば出来る子だとは思ってたが、まさか一気呵成にここまで追い込まれるとはね。油断したとか、甘く見たとかは言い訳だし、失礼になるか……」

ゴウト・ホーンの肩が震えている。怒りではない。彼女は笑っていた。

「ふふふ…… たった一日でこれか、一度戦っただけでここまで対応するか、この僕に。すごいよ陸朗君、キミは僕の想像以上だ。本当にすごい……!」

陸朗を讃える彼女の言葉に、嫌味のようなマイナスの感情は一切感じられない。彼女は心の底から感激し、賞賛していた。

身体を震わせるたびに、ダミー・アバターの装甲にヒビが広がっていく。ヒビのあいだから漏れ出るのは、炎のようなオーラだ。

「ほら、見てくれよ陸朗君。ダミー・アバターはもう限界だ。キミがやったんだぞ？ キミは今の連続攻撃で、このゴウト・ホーンをこうまで追い込んだ。ボロボロだよ、ゴウト・ホーンはもう戦えない。情報構造が戦闘機動に耐えられないんだ、自壊してしまうだろう……」

聞きようにうつつでは、敗北宣言にもとれる。

だが違う、喜色の混じる彼女の声には、まだ確固たる自信が満ちている。敗北など、欠片たりと認めていない響きがある。

「こういう形でお披露目ストリップするとは、思っていなかったけど……『ごほうび』だ、ジェット・バレル。キミが一番知りたかったであろうことを、教えてあげよう」

「ご、ごほうび?」

「重くてのろいダミー・アバターはもうやめつてときさ。ここから先は…… 全力全開だッ……!」

バキンと大きな音を立てて、ダミー・アバターが崩れ落ちる。ただの情報デブリと化した板バネ装甲が風に溶け、内部に隠されていた『正体』をさらけ出した。

それはゴウト・ホーンよりも一回りほど小さい、女性型のペルソ

ナアバターだった。鮮烈なまでのオペラピンクにきらめく、ドレスの優美さと剣の鋭利さをあわせ持つ刃状装甲。まるで『秋月雪乃』の髪そのものであるかのような、風にたなびく黄金の放熱索。顔に装着している、切れ長のアイ・カメラを持つ装甲と同色の仮面。

そんな優美で怜悧な本体とは不釣り合いなほど武骨な大剣を携えて立つ、威風堂々たるその姿は、見る者すべてを圧倒するほどの存在がある。

このアバターが何者であるかなど、いちいち考える必要もなかった。彼女は、間違いない――、

「キミの直感^{ストレージ}は間違っちゃいなかったよ、ジェット・バレル。僕が……『剣の魔女』だ」

1 - 6 奇襲（後書き）

ここまで来るのに結構かかりました。

1 - 7 剣の魔女

予想はしていた。予感があった。

けれども……実物を前にしてなお、『剣の魔女』という伝説のバターがそこにいることを信じられなかった。

なんだこれは。こいつは、なんだ？ 本当に実在しているのか？ 自分はなにを見ているんだ？ 『知覚変換』の誤動作すら疑った。しかしどこにも異常はなく——魔女は確かにそこにいた。

『ペルソナクライン』のコンソールにアクセスして、対戦相手のデータ呼び出す。ネーム・エントリー部分には、はっきりと『剣の魔女』というアバターネームが書かれていた、本人に間違いない。だがそれ以上に陸朗の目を惹いたのは、彼女の対戦成績の欄だった。

五桁もある対戦数と勝利数はカウンターストップ——つまりすべてが『9』で埋まっていて、逆に敗北数はゼロ。シングルマッチにおける敗戦が、ただの一度もないということだ。噂通りの……いや、噂以上の強さ。もはやひたすらに感嘆するほかはない。

「どっちもカンスト以上の数値ではあるんだけど、勝利数のほうが実際にはちょっとだけ少ないよ。タイムアップでドローに持ち込まれたことは、それなりにあるからね」

ジェット・バレルの様子から、なにを調べているのかを察したストレーガが、そう補足する。

しかし引き分けの数が、彼女の不完全さを意味するとは思えない。むしろ時間切れに持ち込んだ相手を褒めるべきだろう。

「さて、そろそろいいかな？」

「え？」

陸朗の間の抜けた返事を聞かされると、ストレーガは困ったように小首を傾げた。

「え、じゃないよ。装甲拘束具を破棄ただけで、僕のライフ・ポイントはまだ半分残ってる。勝負はついちやいないんだ。最初に決めただろ、この対戦はタイムアップもドローもないサドンデス。キミが負けるか、僕が勝つまで終わることはない」

「それを言うなら……あんたが負けるか、だろう」

「はっはっは、僕が負けるわけじゃないじゃないか」

「……その高慢な台詞に、ひとつことも言い返せないのがむかつくな」

「言い返されないだけの努力はしたからね。そうやってがむしゃらに上へ上と登り続けて……気付いたら、周りには誰もいなかった。敵も、味方も」

いつも凜然とした彼女らしくない、寂しそうな声色が、その言葉には混じっていた。

陸朗とて木石ではない。強いこと、それ自体が彼女にとってひとつの心の傷になっているのだと察した。

「だから名を変え、姿を変えて？」

「いや、そっちは無関係。また別件だよ。なに、僕にも色々事情があるってことさ。いい女には秘密が多いってね」

「峰不二子みたいなことを」

「尊敬してる」

ふざけた答え、だがたしかに似合う。彼女がもう少し成長すれば、きつとあんなふうに男を手玉に取る美女になるに違いない。

いや、むしろもう手玉に取っているかもしれない。たとえば――

陸朗とか。

「……言っておくけど、対戦でキミをからかっているつもりはないよ。油断こそしたが、手抜きはしていない。ゴウト・ホーンを破棄する羽目になったのも、単にキミの戦力を過小評価した僕のあやまちだ」

じろり、と金色に輝くアイ・カメラが動いた。どこかその目付きが陰しくなったように思えるのは、彼女の仮面がソリッドな形状をしているからだけではないだろう。

「正直言つて、キミをゴウト・ホーンのまままで倒しきるつもりだった。そこからじっくり話を始めようと思ったんだ。しかしキミはキミ自身の力で、僕の正体を暴いてしまった。それほどの力を持つペルソナアバターだったとは、少し僕の予想を超えていた……これならば、と思ったね」

「……？」

「気にしないでいいよ。言つたら、僕には僕の事情がある。だからキミが今、理解しなきゃいけないことはただひとつ。僕からは逃げられないってことだけだ」

「本当に……大した自信だな」

かがみ込んで、無反動砲を撃つとき投げ捨てたライフルを拾い上げ、構える。

彼女は逃がさないといったが、今さら逃げる気もない。怖じ気づくような段階はとくに過ぎたのだ。

「……またそのライフルか。お気に入りなのかい」

「気に入ってはいるけど、武器に大してこだわりなんてない。今必要だから使っただけだ、あんたを仕留めるためにな」

「仕留める、ときたか。大きく出たねえ。けど、できるかな？　まだ、ライフ・ポイントはたった半分減っただけだよ？」

「もう半分、減らせばいいだけだ」

数字の上ではそうだが、それがいかに困難なことであるか。もちろん陸朗にもよくわかっていてる。減らず口を叩いたのは、彼女から受けるプレッシャーに押し潰されないようにするためだ。

さっきゴウト・ホーンを追い込めたのは、奇襲から連続攻撃が奇跡的に上手く機能したからに過ぎない。同じことをやっても、奇跡は二回も起こらないだろう。

さいわいにして用意していた策はあれだけではないが、それが通じるかどうかというのは良くて五分五分だろうと陸朗はみていた。

「平面移動に特化していたゴウト・ホーンの弱点を突く作戦は見事だった。しかし優秀なキミのことだ。ゴウト・ホーンのみを想定した装備と作戦では、今の僕に通じないことには気付いてるだろう？」

頷くほかはない。

「あっさりと認めるね。理解しているのならば、それ以外の策も用意してあるということか。なら、遠慮はいらないかな」

ストレーガの声色が変わった。杖代わりに地面に突き立てていた大剣を引き抜くと、左手にそれをだらりとぶら下げるように構える。

「では続きを始めようか、陸朗君……いや、ジェット・バレル。どこからでもかかってきなよ、僕は逃げも隠れもしない」

その言葉に、なにひとつ嘘も偽りもなかった。

ストレーガは一步も動かない。ただ自然体でそこに立っているだ

けだ。

しかし――、

「……ッ！」

ジェット・バレルは動けなかった。

計算も、作戦もすべて吹き飛んだ。

魔女の前に立つただけで感じる、凄まじい威圧感。一步でも動けばどこにしようと思われ、そんなふうになんて思えた。

剣という武器を用いる以上、射程距離は短いはずだ。グライド・スピナーを持つゴウト・ホーン以上であろうスピードも予想はつく。それでも相手の間合いがどこまで広いのか、見切ることができない。

「く、くそっ……！」

「ふふっ、どうしたのかな？ そんなところにいたら、斬ってくださいと言わんばかりだよ？」

魔女があざ笑うように、小さく肩を揺らした。しかし、それに激昂することさえ、今の状況は許されないのだ。

わかってしまった。わずかでも動いた瞬間、自分はその大剣の鋒になると。どんな抵抗、どんな計略、どんな覚悟があろうとも、その一切合切を叩き斬り、粉碎する。あれはそういう存在なのだと、それほどまでに実力差があるのだと、本能的に理解していた。

シングルマツチにおける敗戦はただのひとつもなし――さっき記録を見たときには信じられなかったが、今こそ実感した。こんな相手に勝てる者が、『ペルソナクライン』にいるだなんて想像すらできない。

甘く見ているつもりなど微塵もない。だがそれでもなお、見誤っていたのだろう。

さっきまでの戦いは――あんなものは、彼女にすればまるで本気

ではなかったのだ。機動力で相手をかき回すことなど、彼女にすれば持てる力のほんの一部でしかない。動かなくても相手を制し、斬ることができるのだから。

真の強者は動じない。それは些事に心を動かされないというだけではない。強者は状況を支配し、弱者の動きを自在に操る。

（……ここまで差があるのかよ！）

ライフルを持つ指先が震えた。恐怖というよりも、悔しさで。

ああ、やっぱり天辺はこんなにも遠かったのかと——そんなことを今、考えていた。

「そりゃあ遠いよ。キミと僕とじゃ努力の純度が違うもの」

「心を読んだみたいなた台詞を……！」

「一流はね、相手の心だつて読めるのさ」

「あんたが言うのと途端に胡散臭いな」

「ははっ、ひどいなあ」

台詞は軽いが、彼女のまとう剣呑な気配が濃さを増していく。

「ふうむ、どうやら動きづらいと見えるね。うかつに動いたらカウンターで終わる、と気付く時点で大したものだが……このままじゃ僕が面白くない。ちよつと遊びに付き合ってもらおうか？」

「えっ……！？」

ぶわつと、大きく風が巻いた。ほんのわずかに目を閉じていたあいだに、魔女の姿はかき消えていた。

「こつちだよ、ジェット・バレル。しっかりしたまえ」

「……ッ……！」

背後に悪寒。切っ先から感じる殺意にも似たエネルギーが、背中全体を撫でるように冒しているのを感じた。

圧倒的不利な状況で、圧倒的強者から送られる殺気。それがこれほど恐ろしいものであるのかと、初めて理解した。

「きつ、斬りたきや斬れよッ！俺に勝って、それこそ通報でもなんでも、すりゃあいいだろッ!？」

「……何でそんな話に？　っていうか、ヤケになるのはよくないよ?」

「この状況でどうしろって言うんだよ……!」

詰んでいる。そう判断するのも無理はなかった。ここからのような行動を取っても、ほんのわずかな踏み込みで、ストレージはたやすくジェット・バレルを串刺しにできるのだから。

しかし当の『魔女』自身は、そんな陸朗の言葉を聞くと意外そうに首を傾げた。

「そうかい？　いやあ、まだまだ僕にはスキがあると思うけどね。別に君をナメているわけじゃないが、こうやってわざわざ話をするあたりにさ」

「……ッ!」

確かにこんな会話はスキ以外の何ものでもない。だが、スキが“できた”ではない。スキを作り、これ見よがしに見せているのだ。悪辣とさえ言えるやり口だった。これが『魔女』の名の由来かと思っほに。

「まあ、ここで諦めるのもまた良し。僕の見込み違いだったと、反省することにしよう。だが……まさかジェット・バレルともあろう

者が、この程度の苦況^{ピンチ}で諦めてしまつとは言つまいね?」

仕掛けてこい。

要するに、彼女はそう言っているのだ。

この状態で、この後ろを取られた敗北必至の状態で、自分に抗つてみせろと言いつつ放った。

本来なら後ろを取った瞬間に剣を突き刺し、ゲームオーバーだったのだろう。だが何の気まぐれか、彼女は自分にチャンスを与えたのだ。

(……口でなんと言おうとも、これはバカにされてるよな……っ！)

『魔女』の誘いに乗るのも悔しいが、この最後のチャンスを投げてしまうのはもっとバカだ。相手がわざわざ機会をくれたというのなら、それを利用して吠え面をかせてやればいい。

今の陸朗でも、そのくらいのポジティブ思考はできるのだ。いや、そうとでも考えなければ、あまりにも自分がみじめだった。

だがどうする。最初の一手をしくじれば、待っているのは無様な敗北だ。彼女が与えた慈悲はこの思考時間のみ。ジェット・バレルが動きを見せた瞬間、『魔女』は手にした剣で彼を容赦なく突き刺すことだろう。

つまり要求されているのは——剣をかくぐり、相手の動きを止め、速やかに反撃に移行する——そんな行動だ。しかし、それがやすやすとできるなら、そもそも彼女に背後など取られはしない。要するに、無理難題というわけだ。

(けど、やる。可能性は……これしかないッ！)

躊躇はしなかった。思考内デスクトップでそのコマンドを実行すると、ジェット・バレルの暗灰色の装甲に、光で彩られたヒビが走

る。

「アーマー・パージでッ!!」

「……ッッ!!」

昨日、ダミー・アバターだったとはいえ彼女に一矢報いたのはこれだ。そしてこの土壇場で彼が取り得る手段は、もはやこれしかなかった。

しかし――、

「やはりそれか！　そう来たか！　そうだろう！　今のキミには、それしかないッ!!」

この行動すら、ストレーガは読んでいた。『アーマー・パージ』による爆発と閃光の目眩まし。それを使うと彼女は読んでいた。

だからこそ視界を奪われたこの状態でも、いささかも動揺することなく前へと踏み込み、迷わず剣を突き出した。

ガキンッと金属音が響く。だが、そこにあったのはジェット・バレルではない。身代わりのように地面に突き立てられた、彼のロング・ライフルだ。彼の姿はかき消えていた。

「^{デロイ}囷ッ！　武器を手放し、間合いを取ったか！　だが……!!」

「間合いなんか取っちゃいない。てめえから逃げられるなんて思っ
てないッ!!」

「何ッ!？」

声は、頭上からした。

「上だと!?　距離を離さなかったのか!?」

アーマー・パージが生み出した、ほんのわずかなチャンス。その少ない時間でジェット・バレルが退避先として選んだのは、あろう

ことが敵であるストレーガの上空だった。それも彼女に手が届くほどの、低い空間だ。

やけになって飛んだわけではない。たとえストレーガの視界を奪おうとも、躊躇なく突き込んでくるのは彼にも分かっていた。だからこそ、だ。

普段の状態なら、ストレーガが自分の頭上にいる相手を迎撃するなどたやすいことだ。しかし剣を突くために踏み込み、前のめりになった姿勢では、上――それもやや後背寄りの空間は死角となる。

もちろん、ストレーガの戦闘速度をもつてすれば、生まれる隙などほんの一瞬。文字通りの瞬く間でしかない。

賭けるにはあまりにも短い刹那の時。しかしジェット・バレルは、陸朗はその瞬間に賭けた。否、賭けるしかなかった。

ただ一つきりのチャンス。無駄にはできない。

「届けッ！」

「しまった、肩をッ!？」

落下を利用して、ストレーガの両肩を押さえ込む。これで剣を上振るうことはできない。関節の構造上の問題だ。そして取り回しの悪い大剣では、持ち替えてジェット・バレルを刺すことも難しい。『魔女』に生まれた一瞬の隙が、ここで決定的な失策へと変わる。最後の一手――彼女の後背を突くべきは、捨ててしまったライフではない。そして頼れぬ己の徒手空拳でもない。

機体に仕込まれたマイクロミサイル。普段はけん制にしか使わないこの武器が、今は最後の武器となる。

「これでッ！」

前方宙返りしながらストレーガの背後に降りると、素早く組み付いた。

細い見た目からは想像も出来ないほどのパワーを誇るストレーガを押さえ込むのは、上背で勝るとはいえ、華奢とさえ言える砲撃戦タイプのジェット・バレルには荷が勝ちすぎる。だがそれでも、必死に彼女にしがみつき、その動きを抑える。

「このままミサイルでッ!!」

「なっ……正気!?!」

「相打ち上等だ! 間合いを開けたらあんたは避けるだろッ!!」

「くッ……!!」

確信があつた。わずかでも動く隙間があれば、この『剣の魔女』ストレーガは避ける。それだけの技量の持ち主であると、この一瞬の交錯で理解できた。

常識ではあり得ないことを為す『超人』。最高位ランカーとは、ザ・オーバーロード『四英雄』の一角とは、そういうものだと思ひに染みて分かつた。ならば非力非才な自分を取り得る手など、選べるほどに多くない。自爆覚悟——いや、組み付いたままミサイルを爆発させるなど、これは自爆そのものだ。

「これならあんたでも、逃げられないはずだッ!」

「くく……はははっ、さすがは僕が見込んだ男の子! やってくれる! けどそんな覚悟じゃあ……まだまだ僕には届かないな!!」

「なら試してやるッ! 吹っ飛べよ、『剣の魔女』ッ!!」

火器管制プログラムから、ミサイルを選択。プログラムを起動すれば、発射される——はずだった。

「組み付くという発想は良かったが……どうせなら、肩を押さえた時にそのまま上半身を抱え込むべきだった!」

「え?」

ぞくりと背中に冷たいものが走った。手を離せと、恐怖が命じる。だが男の意地が、プライドが、その両腕を動かさなかった。その瞬間。

「腕が少しでも動くな、キミを弾き飛ばすなどわけではない。やはりキミには……地力が足りないのさッ!!」

「があッ!？」

アバターの腹に凄まじい衝撃が走り、身体がくの字に折れ曲がる。ハンマーで殴られたような——いや、トラックがぶつかってきたような、理不尽で暴力的な衝撃が、ジェット・バレルの身体を後方へと吹き飛ばした。

柄頭だ。剣の柄頭を、ジェット・バレルの腹に彼女は叩きこんだのだ。常識外れのパワーとスピードによって。

見れば死ぬ気で組み付いたはずの腕が、彼女に絡み付いたままもぎ取られ、肘から先がなくなっている。ただの一撃で、彼女はジェット・バレルの——陸朗の、男の意地さえ断ち切っていた。

決定的な敗北。そうとしか言いようがない。ジェット・バレルは万有引力に導かれるまま地面へと落下すると、そのまま二、三度無様に地べたを転がった。

「う……ウソだろ……こんな、これほどまでにッ」

「これが壁だよ、ジェット・バレル。絶体絶命を乗り越える者だけが、上の世界へいけるんだ」

剣をだらりとぶら下げたまま、ゆつくりとストレーガが近付いてくる。淡々としたその台詞は、勝ち誇るでもなく、哀れむでもなく、仮面の下にある表情を読ませない、静かで諭すような口調だった。

「僕の勝ちかな」

「ああ」

両腕を失った以上、勝ち目は完全になくなった。

事ここに至っては、悪態も悪あがきもしたくなかった。素直に勝者を賞賛し、自らの敗北を潔く受け入れることだけが、彼に残された最後の誇りだ。

「うーん、何かもう手はないのかな？ チートとかで」

「……ねえよ。あつても使わない」

「どうして？ 勝ちたくないのかい？ 悔しくないのかい？ 手段を選ばず勝ってきたのがキミだろう？」

「それは……」

勝ちたいに決まっている。悔しいに決まっている。だが彼はその言葉を飲み込んでしまった。

他の相手ならば、負けが込んだ時は卑劣なチートで叩きのめしてきた。それを当たり前のように受け入れていた。

だが彼女は違う。チートのような小細工を使ったところで、勝てる気などまるでしない。それどころか、今よりも手ひどい負け方をしそうだ。よしんば勝てたとしても、そんな勝利にどれほど意味があることが。

燦然と輝く勝利を積み重ねてきた存在がここにいる。あまりにも眩しいその存在の前には、『チートしてでも勝った方が強い』とうそぶくことすら虚しくなった。

だからこそ、彼は今、素直に敗北を受け入れたのだ。どれほど悔しくて、だ。

「何を考えているかはわかるよ。その悔しさは、忘れない方がいい」
「……ふん。こんなの、たかがゲームだろう？」

「よく言つよ。隠せてないね、悔しさを。だけど悔しくて当たり前さ」

『剣の魔女』の声は、優しかった。ただひたすらに。

おもわずハッと顔を上げた。

魔女のオペラ色の仮面の奥で、機械仕掛けの目がじっと彼女を見つめている。

吸い込まれるようだった。ジェット・バレルは、陸朗は、彼女から目を逸らすことができない。

そして彼女は、静かに言った。

「……あのね、陸朗君。負けたら悔しくて当たり前だよ。ここが仮想現実の世界だからとかつて、関係ない。だって、僕らがやり取りしてるのはただのデジタルデータじゃなくて……僕らのプライドなんだから」

1 - 7 剣の魔女（後書き）

書きため分はこれで最後です。
以降はのんびり更新します。

2 - 1 代価

それから何があったのか、どうやって家に帰ったのか、陸朗は覚えてはいなかった。

一度生徒会室に戻ったのは確かだから、そこで生徒会長と何かを話したような気もする。しかしどんな話をしたかなど、まったく完全に覚えていなかった。

夢を見ていたのではないか、という気がする。だが『ペルソナクライン』を簡易起動してみれば、そこには間違いなく対戦相手として『剣の魔女』の名があった。
ストレীগ

（夢じゃあ、ない）

あの戦い——と呼べるか微妙なものだが——は、確かに現実だったのだろう。手も足も出なかった、あの動き、あの脅威。目を閉じればリプレイ動画よりも鮮烈に思い出すことができる。

しかし、良い経験をした——などと、達観できるほど陸朗は老成はしていない。あんな逆立ちしても勝てないような相手であっても、負ければ悔しい気持ちに先に立つ。

正直言って、気分が悪い。見下されたわけではないが、自分が敗者というみじめな立場であるのは変わらないのだ。

「だったら、忘れよう……ってわけにも、いかないんだよなあ」

勝てない相手のことなど、忘れてしまうに限る。頭ではそれを理解していたが、素直に領けない自分がいた。

彼女の言葉が引っかかっている。

「その悔しさを、忘れるな」

彼女は——ストレーガはそう言った。
だが忘れずに、どうしろというのか。

悔しさを糧にできるのは、選ばれた一部の人間だけだ。自分のような凡俗は、くすぶる想いを抱えて悶々としているしかない。

強くはなれないのだ。彼女——生徒会長、秋月雪乃のように。

「僕が、どうかしたのかい？」

「うおあつ!？」

気がつくと、目の前に美少女の顔があつた。昨日見知った顔だ。

「せ、せえとかいちよお!？」

「んー、固いねえガチガチだねえ。肩書きじゃなくて、もつと気さくに呼んで欲しいな、僕は秋月雪乃だぜ? 覚えるのに難しい名前じゃないだろ?」

「いや、その」

すうつと耳元に口を寄せられて、そんな風に囁かれると、ドギマギしてしまう。

こういうシチュエーションは、孤独——そう、孤独な青春の時を過ごしている陸朗にとって、ついぞ経験したことのないもの。どう対応していいのか、どんな態度を取ればいいのか分からない。

助けを求めるように——もっとも、助けてくれるような友人は陸朗にはいないのだが——クラスメートたちへと顔を向ける。

「う……」

自分に向けられている奇異の視線に、ようやく気がついた。奇異だけではない、嫉妬も混じっていた。刺すような視線だ。

当然だろう。陸朗だつて、この金髪の少女が持つ声望については十分知っている。雲上人だと思つていたくらいには。

そんな生徒会長が、冴えないただの下級生——それも、クラスの鼻つまみ者だ——と親しげに話している。クラスメートたちにとつて、これはもはや一つの事件だった。それも、極めて許し難い方向での。

クラスメートに距離を置かれるのは慣れているが、敵視されるのは困る。大いに困る。リアルでは、波風立てずに生きたい。嫉妬するの也被るのも御免だ。

傍らの生徒会長を睨みつけるが、彼女はにやにやとした人の悪い笑みを浮かべて意に介さない。全てを分かつていてやっているのだ、この女は。

「くっ……！」

「あつ、陸朗君!？」

これ以上、教室にはいられない、いたくない。陸朗は早足で教室を飛び出した。

背後で教室の中がざわめくのが聞こえる。振り返る気はなかった。陰口ならいくら言われても平気だが、さすがに耳にするのは好ましくない。当たり前だ、好き好んで嫌味や悪口を聞きたい者など、どこにいるものか。

(それもこれも……)

あの、生徒会長のせいだ。

リアルでの生活に、土足で踏み込んでくるようなこの仕打ち。許し難いものがあつた。

リアルでの——この学校における彼女は間違いなく権力者。気に入らないからといって、そういう『力』を嬉々として振るうタイプ

でないことは十分察するが、陸朗のような者からすれば、彼女が奔放に振る舞うだけで十分な脅威なのだ。

「待つてよ陸朗君。待てつてば」

いつの間にか、張本人が隣を歩いていった。けっこうな早足で歩いているはずだが、しっかりと男の早足についてきている。無言で足を速めても、まったく意味がない、健脚だった。こんなことまでスキがないのか、しれっとした顔で普通に歩いているように見えるのが、余計に腹立たしい。

ついてくるな、と大声でわめきたくなるのを堪えて、ひたすら廊下を歩く。

「おいおい、どこまで行くんだい？」

「どこだつていいでしょう」

「よくない、困るよ。僕は用事があつて、キミに会いに来たんだからさ。昼休みが終わっちゃうよ」

「用事？」

ほんの少しだけ、歩く速度を緩める。

考えてみれば当たり前だった。彼女は暇人ではない。むしろこの学校内では、もっとも忙しい部類に入る生徒だろう。適当な理由で、わざわざ下級生の教室に顔を出すような存在ではないのだ。

忙しい中時間を割いた。その事実気付くと、少しばかりバツが悪くなった。相手の都合ではある。だがそこまでするのならば、その理由くらいは確かめてもいいだろう。

陸朗は足を止めると、大きくため息をつきながら、聞いた。

「……なんの用なんですか？」

「うーん、ここではちよつとね」

そう言って、生徒会長は困ったように笑った。

昼休みの廊下だ、人通りが多い。

しかもさすがは知らぬ者のいない生徒会長、道行く生徒たちがひっきりなしに挨拶してくるため、まとまった話もできない。

「誰かに聞かせて楽しい話をする気もないしね。場所を変えようか？」

一緒に来い。

彼女は目だけでそう言うと、踵を返して歩き始めた。

食料を補給しようと促され、購買に寄った後、生徒会長に連れて来られたのは、やはりというか、予想通りというか、彼女の根城とも言うべき部屋だった。

生徒会室——まるで数十年前の少女小説から切り取ったかのような、アンティークなたたずまいを持つその部屋に入ると、二人は向かい合ってソファに腰を下ろした。

「やっぱりここですか」

「ここなら、邪魔は入らないからね」

「生徒会のほかの面子は？」

「来ないよ。あらかじめ言っておいたし」

つまり、最初から陸朗を生徒会室に連れ込む気だったということだ。

「もっとも、仕事以外でここには近づく気はないんじゃないかな」

「？」

まるで、自分が嫌われているような口振りだ。

誰からも一目置かれる、最強の生徒会長らしからぬ物言いに、陸朗は首を傾げる。

「別に嫌われてるわけじゃないよ。少なくとも僕はそう思ってる。ただね、僕は『みんなのアイドル』だからさ。どうしてもってところはある、キヨリ的に」

それ以上、彼女は言葉を重ねようとはしなかった。

色々と思うところはあるらしいが、口にしたら負けとも思っているのかもしれない。

「じゃあ、俺もかしこまった方がいいですかね？」

「……キミは分かっているってそういう事を言うんだから、底意地が悪いよね」

「生まれつきなもので」

「かわいくないの」

玉子サンドをほおばりながら、心底嫌そうに眉をしかめる。

「男にかわいさを期待するのは間違ってるでしょう」

「えー？　だって年下じゃんキミ。別におかしい話じゃないよね？」

「男に同意を求めてください。言われて嬉しい言葉じゃないし」

「なんだ、キミもやっぱりそーゆートコは男の子なんだ」

「かわいって言われて男が喜ぶのは、幼稚園児までですよ」

「言うねえ、男の子」

そう言って、ケタケタと笑う。よほど日頃の娯楽に飢えているの

だろうか。

彼女のこういうところが、実に苦手だ。

「……で、俺を嘲笑うために、こんなところまで連れて来たんですか？」

「おっと、そうだった。たまに男の子と食事なんてしたから、すっかり忘れてた」

「……」

「何か言いたげだけど、聞いてあげない」

しれつと言いつつ、彼女は椅子に座り直し、まっすぐに陸朗の方へと向き直った。

蒼い瞳から放たれるのは、まるで相手を射貫くような鋭い視線。思わず息を呑んだ。真面目な話をしようとしているのが、馬鹿にでも分かる。また皮肉の一つでも言ってやろうかと思っていたが、その気がどこかに飛んで失せてしまう。

彼女は少なくとも陸朗の前ではおちゃらけているクセに、時折こうして妙に鋭い表情を作るのだ。どちらが本当の彼女なのか。そんな詮無い考えが頭に浮かぶ。

「む。僕の話をちゃんと聞いてるか、陸朗君？」

「あ……す、すいません」

「まったく……もっかい言うよ。昨日の勝負のこと、覚えているかい？」

「そりゃ、覚えてます、けど……」

言葉尻が、しどろもどろになる。

昨日の勝負は結局負けた。敗北を認めた瞬間から、どうやって決着したかはよく覚えていないが、ちらつとログを見たらアバターが頭から真っ二つになっていたので、おそらくはまたしても一刀両断

されたのだろう。

「そう。勝負は僕の勝ちで、キミの負け。それはいいかな？」

「……そのくらいの潔さは、あるつもりですよ」

「素晴らしい。負けをばかす奴は、強くなれないよ。負けず嫌いとい負けを認めないのは、全然違うことだからね」

「それは経験則ですか？」

そう尋ねると、可愛らしく小首を傾げながら、生徒会長はわずかに考えるような仕草を見せた。

「どちらかというと、観察結果だね。だってほら、僕は負けたことってあんまりないからさ」

「あんまり？」

異なことを言う、と思った。

十万戦以上もデュエルを繰り返して、黒星はただの一つもなし。無敵というのも生やさしい、文字通り電脳世界最強のペルソナマスタ―が口にするような台詞ではなかった。

「そりゃシングルでは無敗だよ。それは僕の誇りさ。でも……タッグマッチで負けたことは、いくらあるからね」

理屈としては理解できる。だが、信じがたいのは変わらなかった。もしかして、ハンデ代わりにすごく弱い相手とタッグを組んでいたのだろうか？

「足を引つ張られていた、ということではないね。むしろ……おそらく……足を引つ張っていたのは、僕だ」

「……冗談でしょう？」

「他人がどう思い、どう見ているかは分からない。でも、当事者である僕は、そうだったと考えているよ。息が合ってなかったのは間違いないね、だから負けたのさ」

淡々と語るその言葉の裏に、隠しきれない悔しさが滲んでいる。始めて見せるその表情、だがそれも一瞬の事。剥き出しになりかけた感情はすぐになりを潜め、いつも通りの、人好きのする明朗快活な彼女に戻っていた。

「ま、昔のことはどうでもいいんだ。雪乃ちゃん大失敗の巻とか、キミに聞かせたかったわけじゃないし。問題は、これからの話さ。僕と、キミのね」

「これから？ これからって、何です？」

「とぼけてるのかい？ いや、キミはそんなに器用じゃないし、素で忘れてるのかな？」

「忘れてるって言われても……」

「よく思い出してよ。約束したよね？ あの勝負、負けた方が勝った方の言うことを聞くって」

「そ、そう言えば……」

売り言葉に買い言葉。ノリと勢いで、そんな約束をしてしまった気がする。

頭に血が上っていたとはいえ、格の違いなど分かっていたはず。馬鹿な約束をしたものだ、今さら後悔しても、すでに遅かった。

「……要求は？」

「いや、そんな冷酷非道の悪魔を見るような顔はやめてほしいんだけど」

どのツラを下げてもそれを言うのか。

ため息をつきつつも、その口元が愉快そうにつり上がっているのは隠せない。

「言っとくけど、キミが負けたのが悪いからね」

「くっ……！ し、しかし！」

「もちろん、僕は最初から勝つつもりで賭けをもちかけたことは、お察しのとおりではある。でも、そんな僕の絶対の自信を崩すために、キミは僕に挑んだんだろう？」

そう。彼女は最初から勝つことを前提にして、陸朗を賭けに誘った。そして何よりも腹が立つのは、雪乃がそれを微塵も隠そうとしていなかったことだ。

自分が勝って当たり前だけど、それでもお前は賭けに乗るのか？ そんな敵をナメた態度で挑まれて、黙っていられるほど陸朗は人好きではない。

その鼻っ柱をへし折ってやる。そう意気込んで、あの有様だ。プライドもへつたくれもない。完敗だった。その敗北を認めさせた上で、彼女はさらに要求するという。

つくづく——つくづく、最悪な性格の女だ。そこまでして自分を弄んで、この上自分に何をさせようというのか。

「そんなに悔しそうな顔するなよう。ダメダメ、ちゃんと言うこと、聞いてもらうからね」

「分かりましたよ。それで、俺に何をさせたいんです？」

逆らっても無駄というのは分かっている。いかにして被害を減らすかが、今の最優先事項だ。
マスト・ファクター

「ん。まあ、最初から決めてたんだよね、実は」

「……よく分からねーけど、俺にできることにしてくださいよ？」

「なあに、できるできる。簡単なことさ。身構える必要はない」

一ミリも信頼できそうにない、軽薄な言葉だった。

しかし今の陸朗に、それを理由にして拒む権利はない。負けは負けだ、そこは認めた。賭けに破れたのだ。ならばそれをうやむやにしないのが、なけなしのプライドというやつだった。

もっとも、ある種の安心感があった。

彼女は裕福な家庭に生まれた掛け値なしのお嬢様だ。金や物をせがまれるようなことはないだろうと確信があったし、生徒会長という立場的に、生徒一人に個人的な恥をかかせるようなこともするまいと予想していた。

おそらく、たぶん、きっと——彼女の要求は、現実^{リアル}についてのことではない。『思考空間』内での、それも『ペルソナクライン』での頼みに違いない——そんな自分の読み通りになるか、否か。

わずかに手足を緊張させながら、陸朗は彼女の次の言葉を待った。

「キミに求めることはたった一つ」

ピアニストと見まごうような繊細で綺麗な指をくるりと回し、まっすぐ陸朗を指差す。

たっぷりと三秒タメを作ってから、彼女は——生徒会長・秋月雪乃は、傲岸不遜に、一切の拒否を許さない決然たる態度で、陸朗にこう宣告した。

「僕のものになれ、真壁陸朗。僕には、キミが必要だ」

2 - 1 代価（後書き）

長いプロローグが終わり、ようやく話が動き始めます。

最初から書き直そうかだいぶ悩んだのですが、とりあえず最後まで書いてから修正しようかと。

そういうわけで今シバラクお付き合い下さい。

2 - 2 上層区画

そして放課後。

『思考空間』に展開された『ペルソナ・クライン』のゲーム・エリアの片隅で、ジェット・バレルとなった陸朗が、壁に身体を預けながらぼんやりと立っていた。

人待ちだ。もちろん、誰を待っているかなど、言うまでもない。

「はいはい、おまたせー！ 待ったかい？」

「少しばかり」

空間がたわみ、目にするのは二回目となる伝説のアバター、ストレーガが姿を現した。

「おいおい、そこは「僕も今来たところだよ、マイハニー」とかさ
ラリと流すところじゃないかい？」

「呼ばれたいんですか、マイハニーって？」

「……いやごめん、僕が悪かった」

呼ばれたところを想像したのだろう。

秋月雪乃ことストレーガは、げんなりとした様子でこめかみのあたりを抑えてかぶりを振った。

彼女のアバターは今、オペラピンクの刃状装甲ドレスの上から、ダークグレーのフード付きマントを羽織っている。

妙に地味な色のマントであるあたり、どうやら正体を隠しているつもりらしい。

「その格好は？」

「キミに壊されたダミー・アバター、修復してないんだよ。もう要

らないけどね、キミがいるから」

「はあ」

「……覇気がないねえ。しっかりしてよ、男の子だろ？」

「セクシャルなハラスメントですよそれ」

「おまけにパワハラもつけてあげようか？」

「あんたが言うത്シャレになってません」

その気になれば、陸朗本人はおろか、彼の親を路頭に迷わせるくらいは簡単にやってのけるだろう。

秋月の長女というのは、それくらいのビッグネームなのだ。学生である陸朗ですら知っているレベルの。

（しかし……）

マントを風になびかせて歩くストレーガについて行きながら、周囲に視線を走らせる。

見慣れたはずのイケブクロ・エリアの光景。しかし、いつも一人で歩いていたこの場所が、少し違って見える。

どこに連れて行かれるのか、陸朗は聞かされていない。尋ねるタイミングは、すでに逸していた。それに必要ならば、向こうから説明をしているだろう。しないということは、黙ってついてきて欲しいということなのだ。

「……どうしたもんかな」

「何か言ったかい？」

「いえ、別に」

フードを被った頭が、もぞつと動いた。後ろを振り向いたようだが、フードに邪魔をされてこちらが見えず、諦めて前を向き直したらしい。

「心配しなくてもいい。もうすぐ着くよ」

足を止めると、彼女は二十メートルほど先にある、大きな建物を指差した。長さが不揃いな円柱を無数に束ねたような、天にそびえる巨塔。

それが何であるか、陸朗にも覚えがあった。

「『セントラル・エリアポーター統合転送機構』です……よね？」

「さすがに知ってるか」

「そりゃ知ってます。もつとも、あまり近付きませんけど。こういう『ハイランド・コア上層区画』への入り口って、俺には縁がないですし」

「縁がない、か。だろうね」

二人が今歩いてきたのは、現実リアルでいうところの都道四四一号線、俗に『立教通り』とか『要町通り』と呼ばれている道だった。

その道を要町方面から歩いて十数分ほどで着いたこの場所が、池袋駅西口——『スフィア』における『セントラル・エリアポーター統合転送機構』だ。

「って、まさか『上層区画』に行くんですか？」

「そだよ。あ、切符ポータル・パス買ってね切符。クレジットある？　ないなら貸すけど」

「いえ、それは大丈夫ですが……そもそも俺、ランカーじゃないから『上層区画』入れませんよ？」

『上層区画』とは、スフィアにおける中枢管理領域にもっと近い情報的に安定した状態にある領域を指す。『ペルソナクライン』をプレイしているアバターから見ると、球状世界として構築されたスフィアの中心に浮かんでいる、多層構造物として存在していた。

その『上層区画』へ入るためには、一つだけ条件がある。

対戦勝利によって獲得できるアバターポイントが一定値以上ある『ランカー』以外は、入場ゲートで弾かれてしまうのだ。これは建前上は初心者を保護するための制約だが、誰もその建前を信じてはいない。

事実上、『上層区画』でのプレイは一定以上の実力を持つ存在への特典である——そういう認識がまかり通っていた。

ジェット・バレルがホームとしているスピット・ダンプのようなフィールドでは、このアバターポイントがほとんど溜まらない。

ゆえに実力はさておき、公のランキングにおいてジェット・バレルというアバターは、『上層区画』へ侵入する資格を持たなかったのだ。

「その辺は大丈夫。僕とパートナー登録したろ？　ぬかりはないさ」

「けど……上つて、そんな、急に言われても」

「そういう反応を予想していたからね、面倒だし黙ってた。でもついてきてもらうよ、これも賭けの負け金の内だと思ってる」

「わ、わかりましたよ……ここまで来て、今さら帰るとか言いませんよ」

賭けの結果、今のジェット・バレルはその身分を『魔女』の所有物に甘んじている。無論望んではないし納得もしていないが、賭けの結果を反故にするほど、陸朗の性根は腐っていない。

おまけに互いに現実リアルを知っているのだ。逃げ場はない。ならば負けは負け、よほど無体なことではなければ従うのが得策だろうと、彼はこの状況に折り合いをつけていた。

渋々ながら『クレジット電腦通貨』を取り出し、バスクード・ベンダー券売機で切符を買う。けれどもやっぱり気乗りはしない、とてもしない。

トーキョー・スフィアの中核部に浮遊している『上層区画』は、陸朗にしてみれば近付きたくないし、近付いてはいけないし、近づくことは許されない、そんな場所だった。

理由はひとえに、彼が『不正改変者^{チーター}』であるためだ。

名うて、『不正改変者』としてはそう言ってもいい陸朗だが、それゆえに敵も少なくない。怨みを買っている自覚もある。正体を隠したストレーガと戦ったとき、狙われた理由をそこに求めたくらいには。

『ペルソナクライン』のゲームシステム上、スフィアの大部分に設定された『通常戦域^{ニコトラル・フィールド}』では、戦闘拒否設定にしておけば対戦モードに入ることはないので身の安全を確保できるが、『上層区画』ではそうはいかない。

『上層区画』での設定は『戦闘拒否不可能^{アンリミテッド}』、夜討ち朝駆け罪に問わずなバトルロイヤルモードの仕様になっている。そんなところに陸朗——ジェット・バレルのような身の上でノコノコと姿をさらすのは、彼の感覚からすれば論外もいいところだった。

「気休めだけど、俺もそういうの被っておこう」

アイテムベントリからポンチョ状の野戦コートをロードし、身にまとう。自分でカスタマイズしたアイテムなので、ちょっとした追加機能を付与してあるが、今は使用する必要はないのでそのまま羽織った。

そんなジェット・バレルの様子を、じつとストレーガが見つめていた。

「何か？」

「コートか……もったいないな、せっかく細身でカッコいいアバタ
ーなのに隠しちゃうのは」

「そんなこと言われても。『戦闘拒否不能戦域^{アンリミテッド・フィールド}』を、何も対策しないで歩くってのは考えられないでしょ」

「警戒しすぎじゃない？ 男らしくない、堂々としなよー？」

「……どのツラ下げてそれを言うんだあんたは……」

自分だってフードで正体を隠してるくせに、そんなことを言われる筋合いはない。

「冗談だつてば。怒りっぱいね、キミは」

「誰のせいだと思ってるんだよ!？」

「あとで牛乳と煮干しを奢っちゃおう、うん」

「人の話を聞け!」

しかしさらつとスルーされてしまった。だいたいそんなもの奢ってもらっても困るのだが。

そうやってイライラしてるうちに、『統合転送機構』の中央部にあるポータルエレベーション・ドライバの前に到着していた。

「んじゃ行こうか? ドライバの使い方は知ってる?」

「そのくらいは。パスをロードしながら、ドア横のスクヤナに掌合わせればいいんですよね?」

目の前にそびえる巨大な円柱を見上げながら答える。

縦方向の交通機関であるポータルエレベーション・ドライバを使うのは初めてだが、要するにこれはエレベーターのようなものだ。乗って、上に飛ばされて、『上層区画』に到着する。それだけの機構だ。

先にスクヤナに触れた彼女の続いて、インベントリからさつき購入した切符をロードし、読み取り口へと重ね合わせると、円柱の一角が空気の抜けるような音と共に開いた。

「そうそう。よし、乗るよ」
「……あの」

ストレーガがドアの中に煌めく光の奔流に身を委ねようとした瞬間、陸朗は——ジェット・バレルは、足を止める。

ここから先は、陸朗にとって初体験のエリアとなる。思うところがあった。

怖じ気づいたわけではない。だが、少しばかりは覚悟を決める必要がある。そのためには、こんな曖昧な気持ちでは無理だ。

「ん、何だい？」

彼女が振り向くのを待つ。

そのまま行ってしまう素振りがあれば、掴んでも止めるつもりだったが、その必要はなかったようだ。

『魔女』はマントの裾を軽く翻しながら、彼の方へと向き直る。

「……やっぱり、よく分からないままってのは、性に合わないんですよ」

「どういうことだい？」

約束は約束、だが知るべきことは知っておきたい。そのくらいの権利は、主張しておきたい。出会ってからこっち、彼女には主導権を握られっぱなしだ。それが少しばかり、面白くなかった。

「俺みたいなのは、本来こんなところに近づく機会も必要もない。というか、近付きたくない。そのあたりは、会長も知ってるはずでしょう」

「うん、そうだね」

「じゃあ何故なんです？　そういう俺の立場とかを無視してでも、

連れて行きたい理由ってのは？」

「ふむ、つまり連れて行かれるにしても、納得しておきたいということかな？ …… 気持ちは分かるけどね、理由を知ったら約束を反故にされそうだしねえ」

見下されている、という感じではなかった。

どちらかというと自分の無茶が分かってて、不安になっているように見える。

「どんだけ無体なことさせるつもりですか、あんたは？」

「いや、そこまでの事態にはならないと思うけど…… 万が一はあるかも」

彼女はそう言って、ちらりとジェット・バレルの顔をうかがう。どうやら、確約しなければ話は進みそうにない。

彼女のような人間に目をつけられたのが運の尽きだったと諦め、ジェット・バレルは首を縦に動かした。

それを見ると、彼女はつるりとしたカウル状のペルソナに手をやり、困っているかのように、その表面に軽く爪を立てた。上手い説明を思いつかない、とでも言いたげな仕草だ。

「結局、どういう理由なんです？」

「…… ま、大したこっちゃないんだ」

その声色は、わざとらしく軽薄を装っていて——ひどく信頼できないような台詞に思える。それでも陸朗は辛抱強く、彼女の次の言葉を待った。

そして。

「まずはキミにも、見てもらおうと思ってさ。僕の…… 『敵』 って

やつをね」

「敵……？」

聞いた言葉を繰り返す陸朗。

だがもう、彼女はそれに答えようとはしない。静かに踵を返すと、エレベーション・ドライバのシャフトの中へと、身を躍らせる。

結局、望んだ答えを得られないまま、陸朗は彼女を追いかけるほかなかった。

ごうん、と鈍い音が身体の奥から響く。

気がつけば、ジェット・バレルの身体が、エレベーション・ドライバのシャフトから外に出ていた。

「う……」

わずかな吐き気。スフィアにいる限り、実際にこみ上げるものなどありはしないが、思わず口元を抑える。

「わ……！ 大丈夫かい！？」

「ああ、いえ、少し気分が悪くなっただけで……すぐ治します、から」

トラフィック・エラーによる転送酔いだろうか、地上でポータルを利用するときは、こんなことはなかったのに。

頭を振って、無理矢理吐き気を押さえ込むと、周囲の光景が目に入った。

「あの、ここは……？」

「ここは『上層区画』のエントランスさ。『ペルソナクライン』内での呼び方は、『シュニーヤ・ガーデン』だね」

スフィア本体と空間的に切り離されているのだろう。不自然なほどに広大な空間が、どこまでも続いていた。ただし空は見えない。空の代わりにあるのは、無数のブロック状の構造物だ。ランダムに積み上げられた幾何学的なオブジェが、何層にも積み重なっている。天井と地面、どちらも同じデザインだった。まるで異形のビルの群れに、上下から推し挟まれているようだ。

「当たらずとも遠からずだね。あのうちの幾つかは本拠地として、中堅以上のアライアンスが使っているはずだよ」

アライアンスというのは、『ペルソナクライン』におけるアバターたちの共同体、いわゆるギルドやクランといったものに相当するシステムだ。

『ペルソナクライン』はゲームデザイン上、一対一の決闘を重視した設計になっているが、Co-op人数での共同戦闘行為が不可能なわけではない。

そして多対多の戦闘を円滑に運営するべく、アバター同士が連帯することをサポートするためのシステムが、アライアンスだった。

ちなみに、陸朗はアライアンスには入っていない。彼が主な活動場所に使っていた『スピット・ダンプ』にもいくつかアライアンスはあったが、彼は独り身を好んだ。その方が身軽でいい、という判断からだった。

もちろん、アライアンスに関してうとい、というわけではない。むしろその逆だ。群れないからこそ、敵となる『群れ』の動向については、常にアンテナを張り巡らせている。そういう情報収集は、彼にとって日常だった。

(そういえば……)

『ストレーガ剣の魔女』がどこかのアライアンスに入っていた、という話は聞いたことがない。

アライアンスについてに限らず、パーソナルデータ——突き詰めれば目撃情報がほかの有名アバターに比べて圧倒的に少ないのは、彼女の大きな特徴だった。

そもそも『剣の魔女』は、陸朗も見ていたあのリプレイが『思考空間』で共有されたことにより、知名度が一気に広まったアバターだ。

いかなる理由か、もともとアバター・ランキングにおいてほとんどのパーソナルデータがマスクされていたので、リプレイ公開までほとんど都市伝説に近い扱いをされていた。徹底して己の正体を隠すというのが、少なくとも一線にいた頃の魔女のやり方だった。

しかしランキング上位者というのは彼女のような特殊な例外を除き、自己顕示欲旺盛な傾向がある。トーキョー・スフィア最大のアライアンスである『エンプレス・オーダー白銀騎士団』を率いるリーダー、『エンプレス・オブ・クローム聖銀の女皇』など、自分たちの勢力を誇るかのような行動がとくに多いことで有名だ。

「アライアンスか……」

ふと、そう呟いたストレーガの言葉には、どこか苦い雰囲気があった。

「誰かに合わせるのはどうも苦手だね。アライアンスもいい記憶があんまりないよ、おかげで今は無所属さ」

この言い方だと、彼女もかつてアライアンスに所属していたこと

があるように聞こえる。

追放にでもあったのだろうか？　だとしたら、きつと所属していたとき、他人の迷惑を顧みないわがまま放題をやらかしたに違いない。

「なんだい、その生ぬるい視線は？」

「いえ、別に」

それより——と言いかけて、ゆっくりとあたりを見回す。

初めて見る場所だが、想像とは少しばかり違っていた。もっと、上位ランカーがあちこちにたむろしているような、そんな空間を想像していたのだが、彼自身とストレーガ以外のアバターの姿は見当たらない。

しん、とまるで死んだように静まり返っている。

「静かですね」

「そりゃ、今日は貸し切りだから。人が少ないんだよ」

「貸し切り？」

誰がだろうか。

まさか、この『剣の魔女』がそんなことをするとは思えない。

もちろん彼女は仮にも現役最高ランクのアバターだ。しばらく身を隠していたとはいえ、本来の人脈は相当なものだろうし、その気になればどんなことでも実現してしまいそうなイメージはある。

だが、自分を連れてくるためだけに『上層区画』を貸し切りにするなど、さすがにあり得ない。

「どういうことです？　誰がここを貸し切りに？　何のために？」

「えらくクエスチョンマークが多い台詞だね」

「はぐらかさずに」

「……今日はここでパーティがあるのさ。まったく、バトルロイヤル上等の『アンリミテッド・フィールド戦闘拒否不能戦域』で壮行会とは、思い上がりも甚だし
いじゃないか。ねえ？」

同意を求められても困る。

「話がまったく見えてこないんですけど」

「パーティがあるんだよって、言ったじゃない」

「いや、だから誰がパーティを開くんです？」

ストレーガは仮面の下で、わずかに目をしかめたようだった。視覚補正用のシールド・コンタクトが、不愉快そうに細められている。何か口にしたくないことを、我慢しているのだろう。わずかの後、渋々といった様子で彼女はこう答えた。

「……これからここで開かれるのはね、三大アライアンスの一つ、エンプレス・オーダー『白銀騎士団』の出陣式だよ」

「はあ、なるほど……って、はいいい！？」

「変な声出さないでよ。パーティだよパーティ、そんな驚くことないでしょうが」

「いや、そこじゃないです！『白銀騎士団』って！？」

「……イタバシ、ネリマ、ナカノ、シンジユクの四エリアを支配する、トーキョー・スフィア最大最強のアライアンスだよ。さすがに知らないとは思わないけど？」

「分かってる！俺が言いたいのはそのじゃない！」

「じゃあ、何？」

「……あんたは、『白銀騎士団』相手に何をやるうっていうんだよ！？」

ようやく、聞きたかった質問に辿り着いた気がした。

巨大アライアンスが施設貸し切りで開くパーティ。それがこれから行われようとしている。

そこに乗り込んだ、無関係で部外者で招かれざる客の『剣の魔女』。この状況で何もしいない——いや、何もしでかさないわけがない。そして『統合転送機構』で彼女が漏らした、『敵』という言葉。これだけ揃えば、何が目的かなんて馬鹿でも分かる。

「ひどいなあ、ジェット・バレル。僕がまるでよからぬことでも企んでるような口振りじゃないか、そりゃ」

いかにも心外です、と言わんばかりに肩をすくめる。

しかし、たった数日間の付き合いではあっても、彼女がどういう人間性の持ち主かは、だいぶ分かってきた。口で何と言おうと、微塵も信用できるものではない。

「……違うんですか？」

「あつたりまえだろ。信用ないなあ、僕」

「さっき下で言ってたことは？」

「……確かに、ここには僕の『敵』がいる。けど、それだけさ。闇討ちしようだなんて、考えちゃいないよ」

「なら、なんでここに？」

「決まってる。参加しに来たんだよ、パーティにね」

その台詞にはどこを切り取っても真実が含まれていない——そんな風にしか思えない、胡散臭い言葉だった。

2 - 2 上層区画（後書き）

自分で書いておいてなんだけど、ヒロインの行動が実に大雑把だw
どんぶりヒロインと名付けたい。
ちなみにおっぱいもどんぶり並です。

2 - 3 検問

「ああ、ちなみに……もう帰ろうと思っても、キミ一人じゃ帰れないからね」

「はえ？」

さすがに付き合いきれない、陸朗がそう考えたのを見透かしたように、ストレーガが告げる。仮面の奥では、その口元が悪辣につり上がっているに違いない。

「僕のパートナー権限で入ってるんだ、出る時も僕が一緒じゃないと出られないよ。何のために認証があると思ってるのさ」

「なにいつ！？」

「ログアウトしてもここに出ちゃうよ。あとあと面倒なことになるから、あんま変なことはいないようにね」

『上層区画』のセキュリティは固い。そういう点でも、『ペルソナクライン』の開発者が、この空間に対し特別な価値を付加しようと考えていることが分かる。

一通りゲームを遊んだユーザーが辿り着く、いわゆるエンド・コンテンツにおいてステータス的な活用ができるよう、最初から想定してあるのだろう。事実、『ペルソナクライン』ではかなりの数の高ランク専用コンテンツが、この『上層区画』に用意されている。

その結果、この場所はトップランカーを数多く抱えている、『白銀騎士団』を含めた大規模アライアンスによる共同支配が行われることとなったのだ。

そのため陸朗のような“下々の者”は、『上層区画』の実情などほとんど知らない。いや、知りたくもない、と言った方が正解か。

無論言うまでもなく、そこに渦巻く感情は『嫉妬』だ。「あいつ

らだけ上手くやりやがって」——そんな風に思っている。格差社会とそのひずみは、『思考空間』の中にすら存在するのだ。

しかし本来ならばそんな『嫉妬』を一身に受ける存在であるストレーガは、他人の負の情念など高らかに笑い飛ばすような、圧倒的に豪快な性格の持ち主だった。

もしかして、こうでないと『上』には行けないのではないか、と思わせるものがある。自分とはオーラのようなものが違うなあ、などと陸朗は思ってしまうのだ。本人に言う調子に乗りそうなので、口にするのではないが。

「どうかしたかい？」

「ああいえ、別に」

まじまじと見ていたせいで気づかれてしまった。慌てて顔を動かし、視線をよそへと向ける。

果ての分からない無機質な風景は、平衡感覚でも麻痺させる効果があるのだろうか。少し、頭がくらくらした。

「……で、どうよ、感想は？ 初めてなんだよね？」

「ええまあ、何というか……意外と殺風景なところですね。これって、処理を軽くするために？」

「いやあ……設計者の趣味じゃないかな。地上はほら、バトル・フィールドの処理を重ねなければ、現実リアルそっくりなわけだろ。それに比べると、こっちは完全な架空の施設だからね。現実味を出しても面白くないってとこじゃない？」

「なるほど」

死んだような雰囲気ビル街だが、言われてみれば神殿のようなそんなある種の神々しさを感じなくもない。だとすれば、さしずめここは文字通りの『天上界』だろうか。

「それでも普段はもつと、人がいるかな。でっかいアライアンスは、大抵交代で配下を駐屯させてるし。規模は様々だけどね」

「今日は『白銀騎士団』の貸し切りだからってことですか」

「いえす、ざつっらい。ただその分、騎士団連中の警戒は厳しくなってると思うよ」

「何故です？」

「簡単だよ、テロるのに都合がいいからさ。いかに騎士団がでかくても、この『上層区画』すべてにくまなく警備を配置するのは不可能だ。普段なら大手アライアンス同士が互いに監視しあうことで、頭数と死角を補っている。けれども、それが今はいない。隙だらけさ」

「……大丈夫なんですか、それで？」

「だから言つたら、思いつてるってね。自分は何者にも傷つけられない、そう確信してるんだ。その名のごとく女王様気取りなんだよ、『エンプレス・オブ・クローム聖銀の女皇』は」

吐き捨てるような強い語勢に、隠しきれない嫌悪が滲んでいる。傲慢、というならストレーガ自身も相当なものだが、それは棚に上げているようだ。いや、あるいは同族嫌悪なのかもしれない。大組織の長である女皇に比べたら、取り巻きを持たない彼女は、さしずめ裸の王様といった感じだが。

「僕の裸がどうしたって？」

「うえっ!？」

「キミ、時々考えてることがただ洩れになってるから、気をつけた方がいいよ」

「は、はあ」

別にやましいことを考えていたわけではないが、思わず恐縮して

しまつ。

「もっとも、年頃の男の子だもんね。興味があるのはしょうがないよ。僕もそういうの、理解がないわけじゃないし」

「いや、違ってですね……」

「隠さなくていいって。僕は全然気にしてないから」

ひどい誤解だった。

「さて、いつまでも立ち話しててもしょうがない。そろそろ行こうか」

「どこへです？」

「もちろんパーティー会場だよ。中央にある大広間でやってるはずさ」

彼女はそう言って、ばさりとマントを羽織り直すと、ゆっくり歩き始めた。追いかけながらその背中に向かって、さつきから気になっていたことを尋ねてみる。

「あの、会長」

「ああ、そうそう。その会長ってのやめてね。ここは学校じゃないんだしさ。僕とキミはただのプレイヤー同士だよ、会長も生徒もないだろ、つか、下手したら現実が割れる」

「じゃあ、なんて呼べば？」

「アバターの名前で……『剣の魔女^{ストレーガ}』と呼べばいいよ」

「わかりました会長」

「……おい」

一瞬、すさまじい殺気がジェット・バレルの全身を突き刺した。

「じよ、冗談ですよ、ストレーガ」
「まったく……」

ため息をひとつつく彼女。だが、さっきの怒気は本物だった。軽い冗談のつもりだったが、あれほどの怒りを見せるとは想定外だ。どうやら、彼女は現実と『リアル』を切り離すことに、強いこだわりがあるらしい。

だったら学校で素性を知らせてまで、自分などに関わる必要などなかったと思うのだが。

正直、彼女が何を考えているのか分からない。今だってそうだ。

「それで、何か聞きたいことがあったんじゃないの？」

「ああ……ええと、場所もそうですけど、やけに詳しいじゃないですか、そのパーティとやらのこと。どこでそんな情報仕入れたんですか？」

「何だ、そんなのか」

彼女は事も無げに言うのと、ついつと右手を差し出し、自らのアイテム・インベントリから立体電子書類状のアイテムをロードする。ホロ・ペーパー薄水色の半透明のその書類には、『召集状』という題名が書かれていた。

「召集状？」

「そう。騎士団員のランカーのみに配られたものでね。今度、久しぶりに女皇直々に出陣するらしい。その前に閱兵式みたいなのをやって、士気高揚しようって魂胆なんだな。ま、他のアライアンスに自分たちの力を見せつけるって意味も、当然あるんだが」

「出陣……『コンクエスト領土戦』ですか？」

『領土戦』^{コンクエスト}というのは、文字通りアライアンスが『戦域』^{エリア}の支配権を奪い合うシステムを指す。

各戦域にはそれを統治する『城』^{キャッスル}が存在し、イケブクロ・エリアならばサンシャイン60、シンジユク・エリアなら都庁というように、現実^{リアル}においてエリアを象徴する建造物があるところに『城』は配置されている。その『城』を巡って、アライアンスは鎬を削るというわけだ。

『城』を手に入れたアライアンスは、獲得した『戦域』^{ホーム・ポイント}を本拠地としているプレイヤーから各種租税の徴収のほか、『城』持ち専用の一時的な能力ブースト・スキルの使用や、所属アバター上限数の拡大など、様々な特典を得ることが出来る。血眼になってまで『城』を求めるだけの理由は、確かにあると言えた。

そしてトーキョー・スフィアに存在する二十三の『城』を——いや二十三の『戦域』のうち、四つを支配しているのが『白銀騎士団』なのだ。

四つの『戦域』を支配しているアライアンスは、騎士団のほかに二つ。しかし新規の『戦域』獲得に今もっとも近いという意味で、騎士団はほかのアライアンスよりも頭一つ分ほど抜けていると言えた。

そんな状況であるならば、もう一押しして『戦域』を獲得するため、『領土戦』へアライアンスの頭首^{リーダー}自らが出陣するというのも、あり得ない話ではない。

「いや、それが『領土戦』じゃないんだよね。というか、大規模共同戦闘^{トップ・デュエリング}ですらない。ただのプレイヤー主催の大会なんだ、ちよつとばかり賞品が特殊なだけのね」

「そんなのあり得ないですよ！　どうして頭首がそんな、ただリスクだけを抱えるような真似を？」

「さっきも言っただろ。自分が負けるわけがないと思ってるのさ」

頭首権限を持つアバターは、アライアンスや『戦域』から受ける能力ブーストなどの恩恵と引き替えに、ある弱点を抱えることになる。あるいは責任と言い換えてもいい。

それは自分が敗北したとき、頭首は自分が本拠地と設定していた『戦域』を失ってしまう、ということだ。

たとえばイケブクロとシンジユク、二つの『戦域』を支配しているアライアンスがあつたとして、本拠地がイケブクロに設定されているとする。この状態の頭首がイケブクロで敗北した場合はイケブクロを、シンジユクの攻城戦で敗北したら、イケブクロとシンジユク、二つの『戦域』を失ってしまうのだ。

このようなリスクの中で『城』を取り『戦域』を支配する、ということは並大抵の努力でできることではない。所属アバター数では全アライアンス中最大を誇る『白銀騎士団』ですら、二十三箇所中四つしか支配できていないというところからもそれが分かる。

『戦域』の支配者が変わることなどしょっちゅう。それどころか、暫定支配者すら決まっていない『戦域』も多々ある。ジェット・バレルの本拠地であるイケブクロ・エリアもそうだ。

そう。あたかも戦国時代のごとく、『領土戦』は熱く激しく燃え上がっていた。

「そう、そんな状況で頭首がフラフラ対戦にでかけるとか、バカにしてんのかって思うよ。いや、してるのさ。きっと……自分以外の全てのプレイヤーのことを」

「そういうものですかね？」

「それは……あつと。そろそろ着くはずだよ、女皇の話はこれで終わりだ。騎士団員が増えてくる、女皇批判は連中にはタブーだからね」

目的地の入り口が見えてきたことで、ストレーガの語気が鋭くなった。

大広間と彼女が呼んだホールは、正直言って広間という言葉が似つかわしくないほど巨大なものだった。大きさでいえば野球場ほど、それもただの野球場ではなく、東京ドームとかそういった規模のものに匹敵するサイズだ。反対側が霞んで見える。

その先の入り口らしきところに、物々しい藍色の戦闘用重甲冑デュエリング・アーマーと身の丈の二倍もある長槍ランスで武装した、一人のペルソナアバターが立っていた。

「検問らしきものがありますね。騎士が詰めてる」

「なに、この召集状があれば、問題はないよ。自動改札みたいなもんさ」

「そついやそれ、どうやって手に入れたんです？」

「蛇の道は蛇だよ、ジェット・バレル」

まっとうな手段でないということだけは分かった。

（大丈夫なのか、本当に？）

そんな陸朗の不安を煽るように、検問に立っていた騎士団員が二人を呼び止める。

「止まれ」

事務的な言葉だった。

ランカーだけでも数十人、そのパートナーとして来ているものも含めれば、女皇の召集状によって呼ばれたアバターの数は百を超えるだろう。いちいち何らかの情緒的反応を返してなど、到底いられなくて当然だ。

「召集状を見せろ」

「これでいいかい？」

マントの隙間から手を伸ばし、召集状の立体電子書類を騎士団員に見せるストレーガ。

「五番隊所属、『ブラッド・ハウンド鮮血獵犬』か？」

「いかにも。おつとめご苦労さん」

「そっちは？」

「僕のデュエル・パートナー、『ディープ・グレイ暗き深淵』だよ」

「知らん顔だな。他アライアンスの人間か？　ならば、たとえばパートナーであっても入れるわけにはいかないが」

「フリーだったけど、入団希望っていうからスカウトしたんだ。登録が間に合わなかったただけでね、人物は保証するさ」

「ほう……」

胡乱な目付きで、じろじろと無遠慮にジェット・バレルを眺め回す。

ディープ・グレイという存在に不審点を感じたのだろう。当然だ、本当にいるのか、今でつち上げたのかは知らないが、少なくともジェット・バレルはディープ・グレイではないのだから。

しかしここは『ディープ・グレイ』らしく振る舞わなければならぬだろう……どうやって？

視線でストレーガに助けを求めるが、彼女はわずかに頷くだけで、具体的に何かの指示を与えてはくれなかった。

もはやハッタリで切り抜けるしかない。

「ディープ・グレイですッ！　ブラッド・ハウンドさんの下で、勉強させてもらってますッ！！」

「……」

青い騎士は答えなかった。身じろぎ一つせず、じつとジェット・バレルを見つめ続けている。器を見定めているようにも思えた。

ジェット・バレルは高機動射撃型という戦闘特性上、あの『山羊^{ゴウ}角^{カク}』の角のようなドレスアップパーツをほとんど装備しない、ネイキッド・スタイルのアバターだ。そのつるりとしたシンプルな外観は特徴がなく、同じ戦闘特性を持ったアバターと似たり寄ったりだ。相当見慣れた相手でなければ、個体識別は難しい。要するに、誰が誰だかなど分かりっこないのだ。

彼がディープ・グレイ氏（仮）の存在を確信していない限り、嘘を見破られる可能性はほとんどないはずだった。

「もういいかい？ 遅刻しちゃうよ」

しめしめ上手くいったぞ、馬鹿め間抜けめ益暗め、そんな思いつく限りの卑劣な言葉を押し隠したまま、ストレーガは青い騎士の横を通り抜けようとした。

「……待て」

「まだ何か？」

「ブラッド・ハウンド、一つ聞きたい。貴様、『仕事』はどうした？」

「……まだ途中だよ。スピット・ダンプは制圧中だ」

聞き覚えのある単語に、ジェット・バレルの動きが止まる。

何か、とてつもなく嫌な予感がした。こういう時の勘は、外れた試しがない。

即座にアイテム・インベントリにアクセスして、いつでも武器が取り出せるように準備する。用心のため——いや、そうではない。それはもう、確信に近かった。

「手こずっているのか？」

「まさか。一番手強い奴は落としたからね。後は雑魚ばかりさ、時間にかかるけど」

「そうか……」

青い騎士はそう言うのと、二、三步後ろへと下がった。手にした槍がゆっくりと降りてきて、腰の辺りに構えられる。

「つまり……落としたから、連れて来たのか？ その男を……」
『^{ジェット・バレル}黒い銃身』を！
「ッー！」

ぶうん、と風が巻き、長槍が空を裂く。だが一瞬それよりも早く、ストレーガはその身を宙へと躍らせていた。

「ジェット、下がって援護！」

「分かってますよッ！」

言われるまでもない。不穏な気配はやはり外れなかった。何が自動改札だ、いきなりルビコン河になってるじゃないか！ 聞きたい疑問と言いたい文句は山ほどあったし今でも増えているが、今はそれどころではない。

騙そうとした不埒者二人に怒りを燃やす受け付け騎士は見るからに重装甲のインファイター。あんなのと真っ向勝負など、死んでもごめんだ。

即座にインベントリからP・90に似た二丁のアサルト・ライフルをロード。弾をバラ巻きながら、後ろに跳んで大きく距離を取る。頑健な青い騎士の装甲は、威力の低い減装弾などやすやすと弾いてしまうが、今はそれでいい。相手を一瞬でも足止めできるなら、彼の役目はそれで十分だ。

「ちい！ ジェット・バレルと……そっちの貴様！ 何者だ！？」
「狼藉者ってところかな！ 悪いが、ここは通してもらっよー！」

空中でマントをを脱ぎ捨てるストレーガ。

彼女はやる気だ。その両手にはもう、二振りの剣が握られていた。

2 - 3 検問（後書き）

だいぶ世界観についての説明が多いです。

そして相変わらず性格が悪くて血の気の多い魔女であったw

ちなみに『ペルソナクライン』というVRゲーム、内容としてはFPS（視点）+RTS（世界構造）+RPG（成長要素）+武器格闘ゲーム（アクション）という感じのシステムになってます。

総合体験型アプリケーションとか、そんな雰囲気という言葉にまとめられるかな。

2 - 4 野良犬

「オペラピンクの戦闘礼装！^{ドレス・アーマー} 輝く黄金色の放熱索！ 貴様……キ
サマ、『剣の魔女』^{ストレーガ}か！」

マントを脱ぎ捨てたストレーガの姿を見て、青い騎士が驚愕めいた声を上げる。

当然だろう。伝説の存在だ、それが眼前に現れれば歴戦の勇士であつても動揺はやむなし——というわけではないようだった。

「おっと、僕をご存じで？」

「知らぬはずがあるか！ 我らが女皇の仇敵ならば、我らの仇敵よ
！！」

「およ、その程度の認識なの？ なるほど、つてことは……」

「何をゴチャゴチャと……さえずるな、魔女！ 女皇に成り代わり、
ここで成敗してくれる！」

青い騎士の長槍が唸りを上げる。蛇体のごとくしなり、いまだ宙にあるストレーガを打ち据えようと襲いかかった。

素早い動きをしにくい空中、^{ファースト・アタック}初太刀はもらつたと、青い騎士も確信していたことだろう。なるほど、道理だ。ジェット・バレルであるならば、あの一撃を避けようもない。

だが彼女は『剣の魔女』^{ストレーガ}。十万戦無敗と謳われる、もっとも最強に近いペルソナアバターだ。そんな彼女ともあるう者が、どのような体勢だろうと一対一で遅れを取ろうはずがない。

両手に構えたやや細身の剣を、槍の穂先にかち合わせる。一ミリの狂いもなく、鋭く尖った先端同士をぶつけたのだ。

ビィインと、金属が軋む耳障りな音が響く。それが耳に届いたとき、彼女はすでに次の行動へと動き出していた。

一瞬、ストレーガの全身が発光したように白く輝く。全身に装備したスラスターを、瞬間的に吹かした。精妙にコントロールされるスラスターが生み出した推力は、空中にある彼女に爆発的な加速を与え、その身を一条の閃光と為す。

「懐がから空きだよ。ざっくりいかせてもらおう！」

「その程度の打ち込み、装甲で弾いてくれる！」

「できるかな？」

「なめるな！ この戦闘用重甲冑、生半可な攻撃を通しはせん！！」
「ああ、そうかい。だったら試して……みようじゃないか！」

ストレーガは身体ごとぶつかるようにして、双剣を青い騎士の胸元へと突き立てる。

甲高い金属音と共に表面を切っ先が引っ掻き、火花がパツと輝いた。

「言ったらう！ 無駄だ！」

「確かに刺さらない。けど無駄かどうかは……僕が決める！ 生意気言ってんなよ、このバケツ頭が！」

「ば、バケツ頭！？」

確かに青い騎士の鎧は、ストレーガの打ち込みをその表面で弾き、受け流していた。だが彼女の顔には、いささかの動揺さえも浮かんでいない。これでよいと、その目が言っていた。

「装甲の一番厚い部分で受け止める。確かにディフェンスの基本中の基本だ。ならばこつちも基本中の基本、装甲の弱いところを狙うまで！」

「ぬうつー！」

装甲表面に剣を滑らせ、装甲の弱い部分——すなわち可動する関節部分へ切っ先を向ける。狙いは肩口、脇の下。前後上下と複雑な可動を行うその関節は、ストレーガにとっては剥き出しの弱点も同じことだ。

「もらった！」

「ぬっ！！」

だが、青い騎士もまたランカー。騎士団の屋台骨を支える強者の一人だ。即座にストレーガの双剣が避けられないことを察すると、一つの躊躇もなく身体を捻る。くれてやる、そう言わんばかりに、左肩を大きく突き出した。

双剣の刃が青い騎士の肩に食い込む。『剣の魔女』の卓越した殺法は、アバターの関節をまるでバターのようにやすやすと切断していた。

「ぐうつ！！」

「ちっ……！！」

うめき声と舌打ち。

無論前者が青い騎士、後者がストレーガだ。

彼女にしては珍しく、いらついた雰囲気をもっていた。青い騎士の文字通りの捨て身、腕一本を犠牲にする防御のせいで、一太刀で仕留め損ねたからだろう。

「一合で終わらせるつもりだったが……案外、やる」

「なめるなと言ったはずだ！」

痛みを堪えているのがありありと分かる、だがその言葉はまだ闘争心を失ってはいなかった。

『感覚変換』によるダイレクト・フィードバックは、プレイヤーの体感で自在に動かせることを実現しているが、同時にアバターの受けたダメージを『痛み』として伝えてしまう。

純粹に受けたダメージを全て伝えていてはまともに動くことすらできないので、その機能にはレベルとリミッターがかけられているが、多くのトッププレイヤーはリミッターギリギリまでダイレクト・フィードバックのレベルを上げ、反応速度を鋭敏にチューニングしているのが常だ。

この青い騎士も例外ではなかった。現実^{リアル}で腕一本を失うに等しい痛みが、今彼を襲っていることだろう。それをかみ殺し、なお仇敵に立ち向かおうとする彼の姿には、鬼気迫るものがあつた。

「じゃあっ！」

片腕一本で長槍を操り、鋭い連続突きを繰り出す。巨軀だが、その速度は軽量級にも劣らない。

しかし相手はストレーガ、一対一では負けなしの鬼神である。しかもその戦闘力は、超絶的な機動性能に由来するものだ。こと速さで比べたならば、遅れを取る理由は何一つとして存在しなかった。

「ぬるい……精進が足らんね。まったく、あいつは何を教えてるんだ、キミたちに？」

「聞いた風な口をつ！ 思い上がるな、魔女！！」

「大した忠誠心だね。だが思い上がってるのはキミのほうだぜ？」

その隻腕で僕と渡り合おうなんざ、十三年ほど早いんじゃないかな」

「貴様^{役立たず}がその男をかばっていることに比べれば、片腕などちようどいいハンデだ！」

「……」

一瞬、ストレーガの目が危険な色を帯びて煌めいた。その両腕が

目にも止まらぬ速さで動き、猛烈な突風——剣を振るったときに起こる『刃風』が、青い騎士の身体を弾き飛ばす。転倒こそまぬがれたものの、大きく体勢を崩す青い騎士。

「こっ……これはっ!？」

「ハンデが……どうしたって？」

確かに青い騎士の装甲は硬い。ブルー・メタルに輝く装甲は、ストレーガが操る細身の双剣を防ぎきり、一寸たりとて斬り込ませない。過日にジェット・バレルとの戦いで用いた豪剣を使えば良さそうなものだが、彼女はあえてそれをしなかった。

何故ならば。

「硬い装甲も考えものだね。時にはこうして命取りになる！」

「ぐはっ! おぐっ! うおっ!」

ストレーガはあろうことか、装甲を斬らず、その衝撃のみを装甲の奥にあるフレームに叩きこんでいた。斬らぬ斬撃——矛盾を体現したその攻撃には、装甲厚などまさしく無意味。どれほど強靱な装甲であろうと、厚みを突き抜けて内部にダメージが炸裂するのだ。卓越した技量と、華奢な見た目からは想像もつかないほどの膂力、圧倒的なまでの剣速。ストレーガが備えるその三つが合わさってこそ実現される妙技だった。

堂々たる体躯に相応しいだけの耐久力タフネスが青い騎士を支えてはいたが、それも時間の問題。やがて足がもつれて、ぐらりと身体が傾く。それを見逃すようなストレーガではなかった。

「はあっ!」

「ぐおっ!」

そのまま懐へと潜り込み、剣の柄でアッパー気味に殴りつける。
顎を打ち据えられ、今度こそもんどり打って青い巨体が崩れ落ちた。
ストレーガと青い騎士には、二回り以上の体格差がある。大人と
子供、そういうレベルだ。その差を覆す、圧倒的なまでの戦闘能力。
それこそが魔女の真骨頂。

「う、うぐっ！」

「すぐさま立ち上がる、その意気や良し。けど、彼のことをハンデ
呼ばわりは許せないんだよね。その醜態で、そんな台詞は吐かせな
い」

「な、何だと？ 貴様ならともかく、あんな下層の弱小アバターに、
騎士団の一員たるこの私が劣るとでも……」

「ふん。じゃあ、その身で知ってもらおうじゃないか。ジェット！」

彼女は双剣をアイテム・インベントリに収めると、戦いを見守っ
ていたジェット・バレルの名を呼んだ。

「な、何です？」

「後は任せた。キミが仕留めろ」

「は、はいいつ！？」

いきなり何を言い出すのだこのヒトは？ と、陸朗の頭の中がク
エスチョン・マークで埋め尽くされる。台詞と声は聞こえても、言
葉の意味が理解できなかった。

あの青い騎士に喧嘩を売ったのは彼女だ。正体がバレなければ大
人しくしているつもりだったと言っていたが、こうなった今はその
言葉も怪しく思える。ましてやどうして自分が彼女の尻ぬぐいをせ
ねばならないのか。

「ちょ、ちょっと待ってくださいよ！ 何で俺が……」

「あんなに見くびられて、悔しくないのかキミは!？」
「いや……事実ですし、あの人の言ってること」

陸朗自身はハンデ扱いに異論はなかった。ストレীগに一蹴される程度の力しかない自分など、足手まとい以外の何者でもない。どれほど自分に甘く点を付けようと、数合なりともストレীগと打ち合えるランカーに勝ち目などないと思っていた。

むしろ感心していたくらいだ。さすがは上位ランカーだ、すげえなあとか、まさしく他人事に思いながら。

「はあ……キミにはやっぱり覇気が足りないなあ。ちょうどいい機会だよ、これは」

「何がちょうどいいのかさっぱり分からないんすけど」

「キミが自分の身の程を知るのにちょうどいいってこと。ほら、行った行った!」

「わわっ!？」

ドン、と背中を押されて、青い騎士の前に転がり出てるジェット・バレル。

ジェット・バレルは決して小柄なペルソナアバターではないが、その彼よりも頭一つ分ほど大きい敵アバターが、彼のことをじろりと見下ろしている。

「……正気か？」

「悪いけど、それは魔女あの人に聞いてくれ」

ぎぎぎつと、軋むような音を立てて、青い騎士の頭がストレীগへと向いた。

彼女は腕組みして壁に寄りかかるといって、完全な傍観者スタイルだ。きつと、あの仮面の下ではいつも通り、美しくも悪辣な笑みを

浮かべているに違いない。

「なんだい、青いの？ ジェットを倒すのは、そもそもキミたち騎士団の目的だったんだろ？ おあつらえ向きじゃないか、彼を倒せたらその首、キミたちにくれてやるよ」

ブルー・グラード
「……『蒼い氷壁』だ」

ジェット・バレル本人を無視して、話がどんどん進んでいる。——
ミリも彼の意志を反映する気はないらしい。

「青いの、仕切り直しにするよ。まずはダメージを修復するといい。
ジェットに手は出させないから」

「ちよっ！ まっ！」

「……後悔するなよ」

ばちつと音を立てながら、青い騎士改めブルー・グラードの足下で光が弾けた。円状の幾何学的紋様——たとえるなら魔法陣のような——が展開され、そこから立ち上る光の帯が、ブルー・グラードの全身を包み込むと、斬り落とされた腕を初めとして、彼の受けていたダメージがみるみるうちに回復されていく。

対戦終了することでアバターの状態がリセットされるニユートラル・フィールドと異なり、アンリミテッド・フィールドでは、ログインしている間に受けたダメージを回復する手段は限られている。

一つは時間による自動回復。何もせず、その場にとどまっていれば十五分ほどでダメージは全回復する仕様だ。しかし移動していたり、ましてや戦闘を行っている場合は当然回復はストップ。いつ襲われるか分からないアンリミテッド・フィールドで、そんな悠長ことはやっていられない。

そこで登場するのが『リカバー・コード』と呼ばれる回復用アイテムだ。『ペルソナクライン』内の通貨である『クレジット』で購

入することができるそれを、一個や二個は常に持ち歩くのは、どんなプレイヤーでも常識のレベルだ。当然、ブルー・グラードも二、三度全回復できる程度には所有していた。

「災難だな、ジェット・バレル。あのような魔女に目を付けられて」

調子確かめるように、再生した腕をぐるりと回すブルー・グラード。ストレーガの打ち込みで受けたダメージも、すでに回復しているようだ。

「同情されてもなあ……やることはやるんだろ、あんた？」

「無論。貴様らスピット・ダンプの住民を駆逐するのは、女皇の決定事項だ」

現在暫定支配者の存在しないイケブクロ・エリアにおいて、最大の戦闘力を持っている集団は、ジェット・バレルらスピット・ダンプの住人だ。無論アライアンスに比べれば団結力などないに等しい有象無象に違いはないが、こと共通の『敵』が出てくれば話は別。拙いながらも手を組んで、アライアンスの侵攻を撃退したことは一度や二度ではない。

エリア制圧を狙うアライアンスから見れば、頭の痛い存在だった。

「……俺たちを駆逐してどうする？」

「言うまでもない。イケブクロを獲る……！ ブラッド・ハウンドは、そのための尖兵だった。もつとも、どうやら報告すらできないほどの敗北……『活動臨界』^{リミット・バースト}に追い込まれたようだがな」

じろりと睨んだ先にいるのはもちろんストレーガだ。かつて招集状の入手方法を尋ねたときに『蛇の道は蛇』と言ったのはつまり、哀れな『鮮血獵犬』をぶちのめして奪い取ったということなのだろう。

う。

おまけに『活動臨界』——一度に強烈なダメージを与えることで『ペルソナクライン』から強制ログアウトさせる行為のこと。急激な『感覚変換』解除によって神経系に付加がかかる怖れがわずかながらあるため、再ログインするためには一定期間の経過と簡易的なメデイカルチェックが必要になる——に相手を追い込んでいるのだから、その攻撃の苛烈さたるや推して知るべしだ。えげつない。

「同じ騎士団とはいえ直接の面識はなかったが、その無念察するに余りある。せめて奴の任務を私が果たすことで、その慰めとしよう」
「地上げ屋め。そんなにイケブクロが欲しいのか」

「当然だろう。戦域拡大は全てのアライアンスの悲願だ。貴様や魔女のような野良犬には分かん話だろうがな」

「野良犬、ね」

ランカーが実力の劣る者を見下すのは納得できる。それは強さの裏打ちがあるからだ。上下がランクという数字ではつきりと表れている以上、反論は負け犬の遠吠えに過ぎない。

ましてや、ジェット・バレルには己が汚い方法に手を染めている負い目がある。どれだけ見下されても、その事実に関しては弁解の余地など一片もない。

だが。

「あんたらみたいに徒党を組まないことを、ごちゃごちゃ言われる筋合いはねえんだよな……！」

思考内デスクトップから、アイテム・インベントリにアクセス。

ロード
実体化したのは、愛用のロング・ライフルよりもさらに大型の火砲。攻城戦などで用いられる、大口径破碎榴弾砲『ストライク・ワ
ン』だった。

「おっ……」

黙って会話を聞いていたストレーガが、小さく声を上げた。ジェット・バレルのやる気を感じたのだろう。

「そんな武器、持ってたんだ。いいチョイスだよ。でも……」

「分かってる。そうそう当たるもんじゃない、こういうのはな」

「ふふ、分かっているならいいさ。上手くやんなよ」

その声はどこか楽しげだ。傍観者ですらない、ただの——そう、ただの『観客』だ。手など一切出さない、魔女は暗にそう言っているようだ。

だが、それに異など唱えようはずもない。いや、手など出させない。陸朗にだってプライドはあるのだ。踏みつけられても、蔑まれても黙り続ける案山子ではない。

ブルー・グラードは彼を野良犬と呼んだ。しかし、野良犬は野良犬でも彼は飼いだ崩れではなく——鋭い牙も爪もある『野生の猛犬^{オオカミ}』だった。

2 - 4 野良犬（後書き）

魔女は設定上強すぎるので、バトルはどうしても一方的になってしまっ
まうなあ。

五分で戦える奴を早く出さないと……。

あと才力ミってルビは無茶があると思う、我ながらw

2 - 5 蒼い氷壁

対峙する二人のペルソナアバター、『ジェット・バレル黒い銃身』と『ブルー・グライド蒼い氷壁』。鎧兜に身を包んだブルー・グライドに比べると、装甲を外し軽量化を図っているジェット・バレルの見た目は、あらゆる意味で対照的だ。

構える巨砲『ストライク・ワン』は、確かにブルー・グライドをも撃ち崩せそうな威容であった。しかし、それを支える両腕はフレームが剥き出しになっており、あまりにも細く頼りない。

脆弱さを補うように、分厚い携行防盾が砲の機関部に取り付けられているものの、それでも彼の身を全て守るには足りないだろう。どうしてもこの超重量は足かせになるし、的になる。

通常、このクラスの重火砲は攻城兵器として使われることが多い。大地に身体を固定し、イナーシャル・キャンセラー慣性中和装置を併用して、反動を軽減させて使うのが常だ。持ち運んで使うにしても、それは重量級アバターであることが多い。高機動射撃を得意とする軽量瘦躯のジェット・バレルが使うには、あまりにも不釣り合いだった。重火砲の、そしてジェット・バレル自身の長所を、互いに潰してしまう。ミス・マッチ——常識的に考えれば、そうなる。

だがそんなことは分かっている。自分の武器だ、エモジェット・バレル自身だって弱点など百も承知だ。だがそれでも、これを使わなければいけない理由というのはある。

かつて魔女との戦いで、アバター・ランクの差によるダメージ補正によって苦汁をなめたことは、彼の記憶に新しい。上位ランカーとの戦いは初経験だったが、それゆえに鮮烈に記憶に残ったのだ。単純な攻撃力不足、彼はそれを懸念した。ストレーガの打ち込みを弾いたあの防御力を、低く見積もるのは愚者の思考。それゆえにジェット・バレルは愛用のロング・ライフルではなく、この火力に特化した重火砲を選んだ。刺さらぬ矛に意味はない、軽装タイプの

機動力という自分の利点を捨ててでも、火力を選ぶ必要があったのだ。もちろん、それを補う方法は幾通りも準備した上で、だが。

(よし……)

両手でぶら下げるように『ストライク・ワン』を構えながら、相手の――ブルー・グラードの様子をうかがう。

相手もまた、左前に槍を構えて『見』に徹しているようだった。だが見た目ほど重心を大地に預けてはいない。曲げた膝の具合から、いつでも動き出せるよう力を溜めているようだ。あたかも、獲物に飛びかからんとする猫科の猛獣のように。

相手は仮にもランカーだ。自分と比べてどちらが強そうに、あるいはどちらが格上に見えるかといえば、考えるまでもない、間違いなくブルー・グラードのほうだ。

実力も同様だろう。地力に勝る相手に、ペースを掴まれたら負ける。そう確認した瞬間だった。

「まずはッ!!」

ブルー・グラードが動いた。

先手を取られた――！　だが、理にはかかっている。『ストライク・ワン』のような重火砲を装備したアバターは、接近戦では滅法弱い。撃たれる前に間合いを詰めれば、恐るるに足りない。それもまた教科書通り。セオリ

彼の判断に間違いはなく、繰り出される長槍がジェット・バレルベルソナの仮面を捉え、貫かんと唸りを上げた。

(……怯むな！)

迫る槍。だがジェット・バレルは――陸朗は、己を叱咤し乱れた

心を一瞬で押さえ込むと、まっすぐにブルー・グライドの巨体を見据え、迎え撃つ。

「はアッ!」

狙いを定めている余裕はない。重火砲をがっちりと抱え、気合いとともにトリガーを引き絞った。

砲口が蒼白く輝き、チャンバーから砲身で加速・圧縮され熱光体と化した情報粒子が、奔流となってほとばしる。

「当たるかッ!」

かわすまでもなかった。轟音はブルー・グライドをかすめただけで、光はその身を打ち据えることはない。

しかし、それでいいのだ。当たれば幸運、だが外れても不運ではない。

なぜならば。

「一撃で仕留めて……何ッ!」

繰り出した槍が空のみを穿つ。さっきまで、確実にジェット・バレルはそこにいたというのに。その身は一瞬で遙か彼方へと移動していた。そう、遠距離戦^{アウトレンジ}——彼が得意とする距離へと。

「反動を使ったか。いいね、いいね、その発想。そういう突拍子もないことなのさ、僕がキミに求めていたのは!」

魔女の嬌声上がる。手を叩きだしそんな口振りだ。

「反動? まさか重火砲を撃った衝撃で移動したというの……ぬあ

っ!？」

ブルー・グラードの動揺を突いて投げつけられた『何か』が、その頭部を直撃する。爆弾——投擲タイプの円盤状地雷ディスク・マインだった。

「くそっ！」

ブルー・グラードは慌てて向き直るが、すでにジェット・バレルはその場にいない。

ジェット・バレルはスラスターを吹かして間合いを取りながら、さらにディスク・マインを構え、投げつける。このタイプの武器は威力よりも爆風によって視界と行動を遮ることができるのが最大の利点だ。

(この間合いを……維持するッ！)

相手の行動を制限し、制圧する。それはジェット・バレルのような砲撃戦タイプのアバターにとって、絶対の真理であり奥義だ。

反動で移動するという奇策は、二度も三度も使えるものではない。速いとはいえ直線移動、それに無駄撃ちであることには違いがない。読まれてしまえば射撃後の無防備な瞬間を狙われるのは必然。

動け、止まるな。そう己の足を叱咤し、重い火砲を抱えて走り続ける。

インファイトは相手の土俵。そこに踏み込んだら負けの覚悟で、ディスク・マインの爆風を利用し、相手の行動を遮り移動時間を稼ぐ。相手の自由を奪うこと、自分の自由を奪われないこと。それが銃使ガンナーいたる者の忘れるべからざる心得だ。

ジェット・バレルは奇策を好む。相手をいかに出し抜くか、そればかりを考えて、戦いに臨む、そんな男だ。カタにはめて勝つ、そういう戦い方こそ、彼が本来望み求めるものだ。そのために、彼は

銃使い^{ガンナー}となつたのだ。

布石を打ち、罫を張り、策を練り、敵を追い込む。すなわちそれは、当たるべくして当たるのだ。その戦術に偶然はなく、ただ必然のみが積み重なって現出する。そう、彼は勝つべくして勝つ——その行動は、全て同じベクトルを向いている。

「そこおっ!!」

ディスク・マインによつて徹底して追い詰めたブルー・グラードに向けて、『ストライク・ワン』^{スライア}が火を吹いた。

高密度の熱エネルギーをこの世界において再現された必滅の砲火は、空を裂く一条の蒼白の槍となつて、標的へと殺到する。

そう、まさに殺到だ。本体の半分を占める巨大なエネルギー・ドライヴが生み出す出力は、その本来の役目である対城兵器の名に恥じぬもの。溢れ出した死を呼ぶ光の奔流は、今度こそブルー・グラードの巨体を飲み込んだ——かに見えた。

「なんのおっ!」

「流石と言つべきだよ!」

ドームのように拡散・膨張・炸裂する光体の向こうで、青いアバターが一瞬見えた。動いている、直撃していない。ランカーの意地か、狙い澄ました一撃を、彼は辛うじて避けていた。

いまだ荒れ狂う光の残滓を突き破るようにして、ブルー・グラードが踏み込んでくるのが分かった。手にした槍はしっかりとジェット・バレルを狙っている。ダメージはほとんど見られない。

詰められる——着弾確認の分だけ、初動が遅れた。今度こそ当てる気で、仕留める気で撃つたことが裏目に出た。判断を誤つたと後悔する暇はない。あの構槍突撃^{チャージング}は避けきれない。当たる、そしてそこからおそらく横への薙ぎ払いへシフトするだろう。剣ならともか

く、槍のレンジは広い。一撃目を耐えてから動き出したのでは、薙ぎ払いという追撃をかわしきれない。どうする――！？

「……コイツでっ！！」

ジェット・バレルは左腕にディスク・マインをロードすると、投擲するのではなく、それを手にしたままブルー・グライドへと殴りかかる。いや、正確に言えばブルー・グライドではない。彼の手にした長槍、それこそが標的。

「自爆する気か！？」

「南無三ツ！！」

長槍がディスク・マインを貫く。穂先によって裂けた構造材から、内包されたエネルギーが溢れ出し、爆風が炸裂する。

ブルー・グライドにとっては、今日何度も味わってきたもの。視界を遮り、足が止まることは厄介だろうが、彼の装甲からすれば威力は脅威になるほどではない。装甲表面を少々削り取る程度のものだ。何発も喰らい続けるのでなければ問題なかった。

だが解せないのだろう。なぜ、ジェット・バレルがこのような真似に及んだか理解できず、苛立ったように叫んだ。

「くっ……何のつもりだ！？ そんなに私の槍が怖いか！」

「ああ、怖いね」

少し離れたところに立つジェット・バレルが答えた。詰めたはずの間合いが、また開いている。

「なにっ！？ そうか、今度は爆風を利用して……身体を後ろに流したというのか！」

「あんたの槍はずいぶん堪えそうなんですね。爆風で装甲を焼いたほうがなんばかマシだったのさ」

「こんな避け方があるとはな……！」

ブルー・グラードの声には、隠しきれない動揺が滲んでいる。文字通り捨て身の回避、下手をすれば爆風も槍も喰らっていたような際どい動きだ。

実のところ、ジェット・バレルは無傷ではない。そもそもが余波で大きく吹き飛ばされるような軽量軽装甲のアバターだ。爆風を浴びれば、頑強さが自慢のブルー・グラードのように、装甲がわずかに削り取られるくらいでは済まない。

コンソール・パネルに表示されたジェット・バレルのライフ・ポイントはおよそ七割にまで減っていた。

楽な戦いではない。

それは、最初から分かっていたことだ。あの魔女は、ストレガジェット・バレルにいつだって無理難題しかよこさないに決まっているのだから。

けれども、きっと——出来ないことは口にしない。そう、信じていいような気がした。

ちらりと魔女を見る。仮面の奥にあるその目から表情を推し量るのは難しいが、決して機嫌が悪そうには思えない。むしろ得意げに自慢を口に出しているかのようだ。

どうだい、なかなかできるだろう、キミってやつも。僕の見立ては間違ったりしないのさ——という感じに。

彼女が言いそうなことが、自然に思いつく。まだ三日の付き合いだというのに、随分と密度の濃い交流をしているからだろう。戦いというコミュニケーションは、案外言葉よりも雄弁に本人を語るも

のだ。

ブルー・グライドとの交錯も同じだ。あくまでもなんとなくだが、その傾向は掴めてきていた。

彼は勇猛だ。誇るべき闘志の持ち主だ。しかし——少々、搦め手に弱い。矛を交えたからこそ、その性向が明確に分かる。

どこまでいっても、ブルー・グライドは『騎士』なのだろう。自らのプライドに拘り、節を曲げることができない。だからジェット・バレルが仕込むちょっとした策で、たやすく翻弄される。それでも彼がランカーという地位にいられるのは、ひとえに反応速度や決断力といった、プレイヤーとしての基礎能力に恵まれているがゆえ。しかし、そこから生まれる自信こそが、ジェット・バレルの付け入る隙になる。

「くっ……この間合いでは！」

「おっと、近付かせるか！」

自分の得意距離^{ベストレンジ}へと詰めようと焦っていたブルー・グライドに、装甲に内蔵してあるホーミング・ミサイルをお見舞いする。鼻っ柱に直撃されて、角の付いたバケツのような形の頭が大きく揺れた。

「ぐおっ!？」

「はははっ！ 凹んだバケツになっちまったな」

「お、おのれえっ!！」

安い挑発にも簡単に乗ってくる。同格の相手ならばまた別なのかもしれないが、格下に馬鹿にされるのは、我慢がならないのだろう。その気持ちはよく分かる。だからこそ——利用する、させてもらう。

「シュッ！」

地面を滑走させるように、下投げでディスク・マインを投擲。本来、これはこうして地形に這わせるようにして使うものだ。さつきまでのように手榴弾のごとく投擲するのは、いささか定石から外れていた。

ディスク・マインの本来の使用法。それは設置することにある。スピンをかけて投げることにより、ディスク・マインは投擲先で停滞。地形に張り付いたようになる。その様はまさしく『地雷^{マイン}』。ディスク・マインの名の由来は、偏にこの使用方法にあった。

一つ、二つ、三つ……アイテム・インベントリからありったけのディスク・マインを連続でロードし、次々に設置する。ちょうど、ブルー・グライドを取り囲むような格好にだ。逆上し、突っ込んでくる彼の動きを先読みするのは、それほど難しいことではない。

「しまった!？」

ここに至って、ようやくブルー・グライドも自分の失策を理解したようだった。行く手を埋め尽くすような無数の地雷を前にして、思わず足が止まる。

飛ぶか、征くか。二つに一つだ。ここで止まれば狙い撃ち、ブルー・グライドの立場からすれば、どちらかを選ぶしかない。しかし重装甲であるがゆえに、ブルー・グライドは空中機動性に劣るのは明らか。飛べばジェット・バレルの対空射撃の的になるのも、また目に見えていた。

ブルー・グライドは征くしかない——たとえ、それをジェット・バレルに選ばされたことが、分かりきっていたとしても。

「たかが! 地雷ごときでっ!」

雄叫びと共に、ブルー・グライドが地雷を踏み越える。投擲とし

たときとはわけが違う、踏まれた荷重で起爆したディスク・マインは、その爆発エネルギーを正しく上方向へと集束させる。『地雷^{マイン}』の名が付くのは伊達ではない。

無論これだけで倒すことはできない。ブルー・グランドにもランカーとしての意地がある、傾きはしても膝を屈するには至らない。しかしそれでも、確実に動きは鈍る。爆発と閃光に怯むのは人の本能、あらがえるものではない。進み討ち果たすその覚悟が、ジェット・バレルに届く前に途切れる。

動きが止まった。撃ち抜くのは、今——確信とともに、トリガーを引き絞ろうとしたその時。

「エンプレス・オーダー
白銀騎士団を……なめるなっ!!」

咆吼と共に、構えた槍を大きく振りかぶる。

「なっ……!?!」

まさか、と考えるよりも速く、長槍がブルー・グランドの手から離れる。甲冑に包まれた太い腕から放たれた一撃は、音速の壁を突き破り、巨大な矢と化してジェット・バレルへと襲いかかった。

避けられない、すでに腰を落とした射撃体勢に入っていた。逃られない直撃、ここまで追い詰めてからの逆転敗北が頭をよぎる。投擲された槍の勢いは凄まじい、喰らえば残り七割のライフ・ポイントを丸ごと持っていかるのは確実。投槍のサイズではない、投擲はないとタカをくくっていたツケを支払うことになる。

「さ……せるかあっ!!」

悩んでいる暇はなかった。トリガーから指を離すと、足をしっかりと踏ん張り、身体全体を使って『ストライク・ワン』を振り回す。

ディフェンス・プレート
携行防盾を前面に立てて、迫り来る槍を迎え撃った。

「ぬあっ！」

まず衝撃が肩を、そして全身を襲う。踏みしめた踵が地面に食い込み、耳障りな擦過音を立てる。金属が引き千切られるような音とともに、もう一段上の衝撃が叩き込まれ、身体が後ろへと流される。防ぎきれなくなった携行防盾を槍が貫通し、本体である重火砲の機関部へと食い込んだのだ。

もはや槍が盾にした『ストライク・ワン』ごと自分を貫くのは時間の問題——その幻像がはつきりと見える。弱い考えが生み出すその幻を打ち払えと、己の心に活を入れ、しっかりと重火砲を握り直した。

「ここでーっ！！」

ついに機関部を槍が貫く。その瞬間全身を捻り、『殺意』の顎から身を逸らした。ジェット・バレルの脇腹を、槍の穂先がかすめていく。だが、それだけだ。槍はアバター・フレームに突き刺さることなく、重火砲を串刺しにただけで、止まった。

だが……。

「ぬおおおっ！！」

「ッ！？」

殺気を感じ振り返れば、そこには腕を振り上げ、殴りかかろうとするブルー・グランド。防御に徹している間に、間合いを詰められていた。足下からはぶすぶすと、地雷で焼かれた装甲が煙を上げている。それでも足取りに弱さはなく、ただジェット・バレルを討ち果たさんとする気概だけが、彼の身体から満ちていた。

「素手同士なら、負けんツ!!」

「が……はあっ!?!」

鉄拳をまともに喰らった。顎——いや、頬か。

圧倒的な体重差は、ジェット・バレルに踏みとどまることを許さない。槍を受け止めたとき以上の衝撃で、真横に身体を吹き飛ばされる。

(ダウンは……できないッ!)

転んでしまえばアウトだ。マウントポジションを取られ、ライフ・ポイントがゼロになるまで殴られ続ける。ここで立て直さなければ、反撃の目はない。

瞬間的にスラスターを吹かし、無理矢理体勢を整える。一瞬だけ地面に足をつけると、そのまま地面を蹴った。横でも後ろでもない、ブルー・グラードの懐へ向かって飛び込む。

「なにっ!?!」

「あんたのせいで重^{エモ}火炮はオシャカだ! 間合いを取る意味はねえ!」

機関部を貫かれ、機能を失った重火炮は、もはや単なる鈍重な金属の塊でしかない。だが、いちいちそれを手放している余裕はもはやなかった。

「白兵戦で、その細腕で勝てるとでも!」

「勝てるかじゃない! 勝つんだよッ!!」

今までとはまったく逆のベクトルを向いた行動に、一瞬だが動揺

したブルー・グライド。だがすぐさま意識を敵へと集中すると、追撃を加えんとばかりに襲いかかる。やはりランカー、強者だ。槍はなくとも、白兵戦は己の土俵とばかりに、その動きには躊躇がない勝てるという確信が、その拳から溢れている。

事実、そうだ。先ほどの拳一発で、さらに一割強ほどライフ・ポイントを削られた。今のジェット・バレルを五発か六発殴るのは、それほど困難なことではない。

だから――、

「喰らうわけにやあ、いかないんだっ！」

「なにいつ!？」

「撃てなくなつて、こういう使い方だつてあるっ!!」

わずかに身を沈め、構えた重火砲をスパイクのごとく地面へと突き立てる。だが身体の勢いは止まらない、突き立てられた場所を起点に、砲身ごと身体が跳ね上がる。

「と、跳んだっ!？」

「うらあっ！」

だがそこで重火砲を放さなかった。腕の力、体重移動、スラストの推力。全てを活用して、重い金属の塊であるそれを引き上げる。それに意味はあるのか――もちろんある、あるに決まっている。そうでなければ、やりはしない。

「こいつで、どうだあっ！」

「な、なんだとおっ!？」

重火砲の機関部を、ブルー・グライドの頭上へ力任せに振り下ろす。すでに火器として役には立たない『ストライク・ワン』だが、

その質量そのものは破損前と変わらない。そう、ジェット・バレルは超重量の打撃武器として、重火炮を使ったのだ。

ただでさえアバター一人分に匹敵する重さを持つ金属塊だ。その上運動エネルギーを加えて叩き付けられれば、いかに防御力が自慢といえど、ひとたまりもない。

「ぐがあ……っ！」

ぐしゃり、と金属が変形する嫌な音を立てながら、一撃で半壊するブルー・グラードの頭部。だがそれでも倒れない。彼を動かしているのは、栄光の『エンプレス・オーダー白銀騎士団』としての矜持か、それとも格下に負けられないという意地か。

「……しぶとい！　だが、これで！」

だが、どちらであろうと今尽きる。

着地したジェット・バレルは、『ストライク・ワン』に突き刺さっていた槍を引き抜くと、原型を止めていない頭部へと、決り込むように突き立てた。

金属が裂け、情報粒子のスパークルが迸る。ペルソナアバターにとって、頭部は絶対的な弱点だ。破壊されれば、一撃でノックアウトもありえるほどの。

しかし、頭部を串刺しにされてもなお、ブルー・グラードは数秒間痙攣するように動いていた。それでも——やがて、ゆっくりと膝から崩れ落ち、ついにその動きを止めた。

ジェット・バレルの思考内デスクトップで、コンソール・パネルの数字が変化する。勝利数が一つ、カウントされて——戦いは、終わった。

2 - 5 蒼い氷壁（後書き）

青騎士戦決着。

いきなり魔女にボコボコにされてるほどの基本噛ませなんですが、書いてみたら意外に長くなった。

このあと出すキャラの戦闘描写と被らないように気をつけないとなあ。

2 - 6 白銀騎士団

「ははっ、やったじゃないか！」

疲労から重火砲に身を預けるようにして立つジェット・バレルに、ストレーガが駆け寄って祝福する。喜色溢れる言葉は、まるで我がことを喜ぶかのようだ。

「ま、なんとか勝ったって感じですが」

「いやいや、僕は信じていたよ。キミはやれば出来る子だって。ちよろいもんだろ、ランカーなんてのはさ」

「そこで「はい」なんて答えられるほど、俺は思い上がってません」

「んー、謙虚だねえ。まだ自信が足りないかな？ よし、もう一人くらい手頃な相手を見つけて……」

「頼むから勘弁して下さい……」

腕を掴み、引き留める。こうでもしないと、魔女は本当に敵を探してきてしまいそうだ。

「えー、なんでだい？」

「氣力が尽きました。もう集中できないですよ、今日は」

「ふむ、今後の課題は精神面の鍛錬、と。特訓メニューを組んであげよう」

「謹んでご辞退申し上げます」

どうやら師匠ポジションを狙っているらしい。冗談ではなかった、彼女の基準で特訓などされた日には、アバターはおろかりアルの方まで再起不能になるのは確実だ。是非とも遠慮したいところである。

「そうかい？　僕、キミはまだまだ強くなれると思うんだけどね。
今の戦いを見て、もう疑いようはないと思ったんだけど」

「相性とか、幸運とか、自分の能力以外のところにずいぶん助け
られた気がしてるんですがね、本人としては」

「バカなことを。まぐれでどうにかなるような……」

「い、いいや……まぐれ……だ！」

すうつと、二人の頭上に影が差す。

ブルー・グールドが、二人の背後に迫っていた。リカバー・コー
ドを再度使ったのだらう、めちやくちゃになっただけの頭部は、ゆ
っくりと再生しつつある。それでもまだ本調子ではないようで、そ
の動きはのろく緩慢だ。しかしそれがかえって、得体の知れないゾ
ンビのような不気味さを感じさせていた。

「なっ……いつの間に!？」

「やれやれ、往生際が悪いね」

ジェット・バレルを守るように、ブルー・グールドの前に立ち塞
がるストレーガ。言葉には、明らかに不快感が滲んでいる。折角の
勝利、彼への祝福に水を差されたと、腹を立てているのは明らかだ
った。

軽蔑を滲ませたその言葉。だが、敗北者は気付く様子もなく、威
嚇するように両腕を広げて、ただ妄言を吐き散らす。

「認めんぞ……こんな結果は……！　薄汚い手を使ったのだらう！
？　スピット・ダンプの野良犬が、私を倒すことなどできるはずが
……！」

「使っていない、キミは地力で負けたんだ。見苦しい真似は止すん
だね。自分がマヌケだと、世に喧伝するだけだよ？　彼への侮辱は
許さない」

「ふざける！ 魔女の言葉など、信じ……」

ブルー・グラードの台詞は、最後まで口にされることがなかった。

「が、がはあっ！？」

彼の腹部を、鉄柱のようなものが貫いていた。

いや、柱ではない。よく見れば、それは円錐を途中で断ち切ったような形状で、側面には荒々しい『刃』が幾筋も走り、円錐の断面まで伸びている。どこことなく、トンネル掘削用のシールド・マシンを彷彿とさせる形だった。先端こそ尖っていないが、全体の雰囲気は騎兵^{ランス}槍に近い。ただし、尋常でないほど大きいのだが。

「ぐ……あ……」

ゆっくりとした動きで、後ろを振り返ろうとブルー・グラードが身体を動かす。

だが、自分の胸幅ほどもある巨大な槍に串刺しにされているのだ。ぎこちなく捻って傾けることしかできない。しかし、がくがくと震えるその身体は、腹部へのダメージだけが原因でないように見える。恐れている、そして怯えている——そういう印象を受けた。

「ジェット……！」

「分かりますよ。誰か、来る……！」

人の気配を感じた。ブルー・グラードの肩越しに、視線をホール
のほうへと向ける。

いや、それは本当に人であるのか。ズシン、ズシンと地面を揺らすほどに重厚な足音を立てる者が、本当に人なのか。

凄まじく重い、凄まじく巨大な何かが、こちらに近付いている――

―それはきつと、錯覚ではない。

「気をつけて、ジェット・バレル。この『ミンチ・ランサー重戮槍』を使うのは、騎士団ではたった一人だけ。奴が来るよ」

「奴……？」

この巨大な槍を投げた相手に、心当たりがありそうなストレীগの言葉。しかし、誰ですかと問うまでもなかった。

ほどなくホールのゲートから、一人のペルソナアバターが姿を見せる。ぬうつと現れたそのアバターは、天を突くという言葉が相応しい超巨体の持ち主だった。

最大サイズのH級フレームを持つブルー・グランドよりも、さらに二回りは大きい。高さも、横幅も、そして厚みも。彼と同じ騎士甲冑に似た重装甲を身にまとっているようだが、見るからに堅牢なその威容は、もはや二足歩行する銀色の戦車にも等しく思える。いかなる手を用いてアバターとして成立させているのか、規格外しか言いようのない巨大な体躯の持ち主だった。

「……き、騎士団長……！」

「痴れ者め！ 敗者が勝者に背中から襲いかかる法があるか！」

エフェクターを通した合成音声で、半死半生のブルー・グランドを轟く雷鳴のように激しく怒鳴りつける。

騎士団長と呼ばれたアバターは、まだ突き刺さったままのミンチ・ランサーに手をかけると、軽々と彼の身体ごと持ち上げた。あの重量級アバターを、片手でだ。恐るべき臂力としか言いようがない。

「女皇の配下に恥知らずは要らぬ！」

ミンチ・ランサーの握り手近くに取り付けられた、大型レシプロ

エンジンにも似た機関部が唸りを上げる。本体の『刃』が振動し、あたかもチェンソーのように高速で動き始めた。ガリガリと音を立てながら、アバター・フレームが内側からえぐり取られていく。

『ミンチ・マシン挽肉作成機』の名を冠するのは伊達ではない。

「ゆ、許し……」

「……猛省せよ……!」

ブルー・グラードの懇願は一切聞き入れられることなく――騎士団長がミンチ・ランサーを横真一文字に振り抜いた瞬間、その五体が木っ端微塵に爆散した。残骸すら残らない。

彼のアバターは全てが情報粒子の光塵となり、スライア世界の風へと溶けていく。これこそ、アバターが『リミット・バースト活動臨界』を起こしたとき特有の現象だった。

「す、すごい……!」

ブルー・グラードの防御力がどれほどのものか、実際に立ち合ったジェット・バレルはよく知っている。自分だけではない。おそらく本気でなかったとはいえ、一度はストレーガの剣すら弾いているのだ。けっして脆いわけではない。

だというのに、その青い重装甲を易々と貫き、ガラクタのように槍の一振りですれど粉々に打ち砕く。騎士団長の名に恥じぬ、凄まじいまでのパワーに、戦慄さえ覚えた。

「あいつは、一体……?」

「覚えておくんだ、ジェット・バレル。あれが白銀騎士団ナンバーツィ、『ガウエイン太陽の騎士』。通称『不死身のガウエイン』だ」

騎士ガウエイン。それは『アーサー王伝説』の登場人物として知られている名だ。アーサー王の側近、かの有名な『円卓の騎士』の一員にして、至誠忠勤から『忠義の騎士』とまで呼ばれる騎士の鑑である。

その名を冠しているのは伊達ではないのだろう。この『太陽の騎士』もまた、『エンプレス・オブ・クロム聖銀の女皇』という主に仕える忠臣に違いなかった。女皇の名誉を汚そうとしたブルー・グランドを、かくも苛烈に処断したことから、それが分かる。

しかし、そんな忠義の塊のようなところこそが、ストレーガの気に入らないところのようだった。皮肉たっぷりに口を開く。

「やあガウエイン、騎士団長ともあろう者が、わざわざ出迎えにまで出てくるとは。団長職はいつから使いつ走りになったんだい？」

「黙れ、魔女。貴様の言葉は聞くに耐えぬ」

「ふん、つれないじゃないか。偉くなったものだね」

「下野した貴様に言われる筋合いはない。それとも地位に未練があるのか、俗物」

「勘違いしないでほしいな。そんなくだらないもの、興味なんてあるものか」

ビリビリと、二人の間の空気が帯電していく。スパークする情報粒子が、目に見えるくらいに。

なるほど二人は間違いなく旧知であるが、同時にこの上なく険悪な関係でもあるようだった。

「……女皇の命令がなければ、脳が焼け落ちるまで何度でも『活動臨界』に追い込んでやるところだ」

「寝言は寝てから言うものだよ？ できっこないね、お前じゃ無理さ、ガウエイン」

「いつまでも己が最強であると思わぬことだ、魔女」

ガウエインの剥き出しの敵意を感じた。無論それは直接ジェット・バレルに向けられたものではない。にも関わらず、装甲表面に無数の針を突き立てられるかのような錯覚を覚えた。センサーの故障ではないかと、一瞬疑ってしまったほどだ。

肝心の魔女といえば、意外にもガウエインの敵意を平然と受け止めていた。剣を抜くことすらしない。まるで相手が襲いかかってくることはない、と、確信しているようだ。

いや、事実確信しているのだろう。ガウエインは先ほど『女皇の命令』と口にした。騎士団長の地位にある者にとって、その命令は何よりも重いはず。どれほど遺恨があるかは知らないが、女皇の意向に背いてまで牙を剥くとは思えない。

それでも、自分たちを見下ろすその巨体から、いくばくかの怖れを感じずにはいらなかったが。

「ほらほら、子供じゃないんだ。いつまでも面白いこと言っていないで、使いつ走りらしく用事を済ませたらどうなんだい？」

この人は他人を怒らせる天才なんじゃなかるうか。ロールプレイ演技というものをまったく行わず、日常生活の延長としてスラスラと罵倒が出てくる。どういう育ち方をすればこれだけ悪口雑言に長けるのか、秘訣を教えて欲しいくらいだ。

「ふん……」

鼻白んだ様子で、ガウエインが踵を返して歩き始める。口では何も言わなかったが、ついて来いという意志が感じられた。

「……どうします？」

「どうしますも何も、行くに決まってるじゃない。何のためにわざ

わざこんなところまで来たと思ってるのさ？」

さっさと歩き出すストレーガ。

それをもったいぶって、正確なところを教えてくれないのはあんなです——そんな恨み言を喉の奥に飲み込むと、その背中を追って歩き始める。

ストレーガとガウエインのあいだに、かつて何があったのか。隣を行くストレーガに目を向けるが、仮面の奥に表情を隠した彼女は何も語ることがない。仮面のアバターはこういうとき、不便だ。すぐ横にいる人間の顔色さえ、伺い知ることはできないのだから。

「……まあ、キミの聞きたいことは分かるよ」

「うえっ!？」

「そんなに驚かなくても」

「あ、いえ……」

心の中を読んだかのような彼女の言葉に、思わず声が裏返った。いや、ストレーガなら、秋月雪乃であるならば、他人の心の一つや二つ、読み切ることができても不思議はない。そう思わせるだけの雰囲気、彼女は身にまとっている。経験の為せるものだろうか、それとも——

「ま、すぐに分かるさ、すぐにね」

「そう……ですか」

話を打ち切るように、ストレーガはそう言った。そんな風に言われてしまえば、首を縦に振るほかない。反論するための根拠を、彼は持ち合わせていないのだから。

「ちょっとは期待してもいいよー？ きつと退屈はしないだろうし」

愉快そうに彼女は「ふふん」と鼻を鳴らす。
嫌な予感しかない。

確かに彼女にとつては『退屈しないこと』なのかもしれない。だがジェット・バレルにとつてはトラブル——それも、超弩級の厄介事が、この先に待っているようにしか思えなかった。

鬼が出るか蛇が出るか。そう身構えていたジェット・バレルが連れて来られたのは、ホールというにはあまりにも広すぎる空間だった。

広さはちよつとした野球場ほどもあるだろうか。これまでの場所のように無機質なデザインではなく、どこか古代ローマの闘技場「コロッセオ」を思わせる雰囲気だ。

数千人は収容できそうな客席部分には誰もいない。代わりにホルの中央部に百人はくだらない数のアバターが集まっているのが見える。『白銀騎士団』のランカーたちとそのパートナーだろう。エンブレス・オーダー

整然と並び、控えた彼らの姿からは、美しささえ感じる。整えた隊伍は誰のためであるのか。

考えるまでもない、自分やストレーガに見せるためではないのは明白だ。二人は招かれざる客、彼らにしてみれば『血色獠犬』と『蒼い氷壁』ブルー・グラードという同胞を討ち果たしてきた紛れもない襲撃者だ。そんな相手を、これほど丁寧に迎える謂われはない。

「まったく……ヒマというかムダというか。どうして大きいアライアンスは、こういう過飾が好きなのかね？」

「俺に言われても……」

大アライアンスに所属などしたことないのだから、分かるわけが

ない。それでも推測するなら、集団を維持するためには力を見せる必要がある、とかだろうか。分からない話ではない、昔から閱兵式とか馬揃えとか、支配者が己の力を天下に誇示するイベントは存在する。そういうものなのだろう。

『聖銀の女皇』というアバターについては名前くらいしか聞いたことがないが、きっと自己顕示欲が強いタイプに違いない。

「いや、真逆だよ。どちらかといえば彼女は控えめでね。大人しすぎるくらいで、自分に自信がない。いつもどこかの誰かに頭を下げている……そんな子だったよ」

「……詳しいですね」

「色々あってね」

ストレーガはそう言って、軽く肩をすくめる。その言葉にどこか寂しそうな雰囲気混ざっていたのは、ただの気のせいなのだろうか。

「ま、何にせよ、はつきりしてるのは……」

ストレーガが脚を止める。

「ろくなもんじゃなかったことさ。このアライアンスは、何もかもね」

シールド・コンタクトに覆われたその眼は、並んでいる『白銀騎士団』の騎士たちの最奥に向いていた。どこか冷ややかに、彼らを見つめるストレーガ。静かに、誰かを待っているようだ。

前を歩いていたガウエインが、一歩横に動いた。道を空けるように脇に控えると、騎士達もまた、その列を左右に分けていく。モーセを描いた映画『十戒』で紅海が神の力によって二つに割られたよ

うに、一人の存在の意志が彼らの隊伍を二つに割っているのだ。

並び立ち塞がる騎士たちによって隠されていた反対側に、一筋の道が出来た。魔女のいる場所から、真っ直ぐに伸びる道が。

「ふん」

あまりにも芝居がかった大仰な演出に、鼻白んだように小さく声を上げる。腕を組み直し、開いた道の向こうから来る者を待ち受けた。

「……誰が来るのか、聞かないのかい？」

「今さら……分かりますよ、もう。俺のことバカだと思ってませんか？」

「ははは」

否定しなかった。バカと思っているのかもしれない。

だが実際、バカでも分かるだろう。訓練したのか、それが忠誠心から出るものか、そこまでは分からないが——騎士たちがそこまでしなくてはならない存在など、ただ一人しかありえない。

「あれが……！」

ジェット・バレルの視線の先に、人影が現れる。

それは白銀色のマントを身に纏ったような姿をした、女性型のアバターだった。

放熱索を兼ねた長い髪は、ホールの照明ライティングを受けて、虹色の輝きを帯びているように見える。手には杖——中核コアとなっている赤い宝珠の周りを囲むように黄金色の金属フレームが配置され、さらに刃のように鋭い三日月型の金属板が取り付けられている。何を模してこのような杖を持っているのかは分からないが、白銀のような色をし

たマント状の装甲版と相まって、どこぞの神妙なる神官のような印象があった。

アバターの美しさという意味では『剣の魔女』^{ストレীগ}も相当なものだが、彼女はそれとはまったく別ベクトルの美しさを持っているように見えた。

圧倒的存在感だ。彼女と比べれば、騎士団長と呼ばれたガウエインですら霞む。誰しもが、そこに在ることを無視することができない——そんな強烈な個性が、記憶に焼き付いた。ジェット・バレルは、彼女の姿を忘れることはないだろう。少なくとも、この『ペルソナクライン』をやめるまでは。

「……ようこそ、と言つべきでしょうか？ それとも、久しぶり……かしら？」

ゆっくりと歩きながら、銀色の仮面を付けたアバターは言った。鈴の音のような、とても言えばいいのか、とても澄んだ——それでいて、どこか蠱惑的な魅力の声だ。けっして大きくないのに、よく通る。上質の陶器同士を打ち鳴らしたとしても、こうはなるまい。

「飲まれるなよ、ジェット・バレル」

「分かっちゃいますがね……あれが、アライアンスの頭首の存在感……！」

正直言つて、自分が圧倒されているのを感じていた。少しでも気を抜くと、平伏して彼女の軍門に降ってしまいそうだ。まるで洗脳^{ヒュブノ}・ヴォイス音波がごとき声。ただの声さえ、自分とは格が違うということを本能的に理解してしまった。この感覚は、以前にも一度味わったことがある。

「……！」

ふと、隣に立つ魔女の横顔に目を向ける。彼女の超然とした雰囲気は、どこか——どこか『剣の魔女』に、ストレーガがまとうそれと同質のものだ。

しかし二人を比べると静と動。女皇は静で、魔女が動。外見からも、似ている部分を見つけることができない。銀の衣に身を包んだその姿はどこか柔らかく、鋭く尖った魔女のオペラピンクのドレスとは似ても似つかない。

何から何まで『ストレーガ剣の魔女』とは対照的。それが『エンブレス・オーダー白銀騎士団』を統べる頭首、『エンブレス・オブ・クローム聖銀の女皇』というアバターだった。

2 - 6 白銀騎士団（後書き）

ようやくここまで来たか……長かったなあ。

そして『聖銀の女皇』のルビがはみ出すので困るw

2 - 7 聖銀の女皇

「まったく……何も変わってないとは。成長がないね、女皇^{クロム}」

ゆつくりと近づいて来る女皇にかけた言葉には、どこか懐かしさのようなものが滲んでいた。

いや、滲んでいるように見える。古い知己、旧交を温めるかのように装っている——そう、装っているだけなのだ。言葉の裏側には、隠しきれない敵意と、なぜ混ざっているのか分からない憐憫、その他複雑な感情が幾重にも折り重なっている。一言では形容しがたい感情、そして関係が込められているように感じられた。

珍しいことだと思う。ストレীগ——秋月雪乃という少女は普段、軽佻浮薄な態度で自分の本心を見せようとしないのだから。

無論、彼女の内心の全てを推し量ることができるほど、ジェット・バレルは成熟した精神の持ち主ではない。だがそれでも今の彼女が、ただならぬ感情を抱えていることだけは確信できた。

「そうね、私は変わらない。私は私のままよ、いつまでもね」

二人のすぐ近くまで来ると、女皇^{クロム}は足を止めた。ストレীগが剣を抜けば、その首に届く距離。だが平然としたまま、聖銀の女皇はそこに立っている。この魔女が自分を討つことはない、確信しているかのようだ。

「その結果が、このお山の大將なのかい？ アライアンスは大きくなって、中身は力と恐怖で従えた、有象無象じゃ意味がない」

「……彼らは私を慕ってくれる、大切な人たちよ。従えているつもりはないわ。守ってくれているのよ」

「守っている……？ ふうん、なめられたもんだな。僕が手下を恐

れて手を出さないと思ってるのかい？」

「まさか。あなたはやるときはやる人よね。でも、状況の不利が分からないわけじゃない。違つかしら？」

「……たかが百人やそこらで、僕が止められるとでも？」

圧倒的なまでの自信。だが、彼女の言葉に嘘はない。乱戦で百人を討ち果たすというのも、ストレーガであればやってのけるだろう。そういう人種であると、その佇まいこそが雄弁に語っている。幾つもある魔女の恐怖を語るための形容詞は、決して大仰なものではない。それだけの實力を持っているのだ。

だが、そんなストレーガを前にして、女皇はいささかも心を乱した様子がない。魔女の力をよく知りつつも、確信を持ってその前に立っているように見える。

「私のための百人よ。彼らが……そしてガウエインがあなたに食らい付いているあいだに、私があなたを討つ。そう、討つわ……だけと」

女皇は言葉を切ると、己を両腕で抱き、マント状装甲をを翻しながらくると楽しげに回る。挑発——というわけではない。心の底から楽しげに、楽しいから回っているのだ。

「私は、あなたを討ちたくない。分かっているでしょう、ストレーガ？」

「……」

その瞬間、ぎしつと魔女の指が音を立てた。鋭い鉤爪にも似た、金属で出来ているはずの指が、握り込まれて悲鳴を上げている。すぐ分かった、彼女が計り知れないほどの怒りをそこでせき止めているのだと。彼女に少しでも自制心が欠けていれば、後先考えず、す

ぐにでも女皇に斬りかかっていたであろうということを。

仮面で素顔が見えないのは、幸いだったのかもしれない。彼女は今たぶん、校内のアイドル『秋月雪乃』として、絶対にしてはいけない表情を作っていただろうから。もっともジェット・バレル、つまりは陸朗以外の生徒が見ているはずもなかったが。

「討ちたくないから、何だというんだ。そんな気遣いは無用だよ」

「気遣いだなんて。あなたのことを大切に思うのは、当然でしょう？　だって、私とあなたは……」

「僕は……お前の所有物じゃない！」

絞り出すような声だった。悪魔が地獄の底に響かせるような、そんな声色だ。

言葉から殺気を感じて、ざわりと騎士たちに動揺が広がる。しかしそれを、片手を上げたガウエインが制した。さすがは騎士団長と言うべきか、完璧な統制が行き届いているようだ。

女皇は満足げにその様を見届けると、小さく頷き話を続けた。

「ええ。もちろんよ、ストレーガ。あなたは、私の大切な親友だもの。『物』ではないわ」

朗らかで穏やかな意味を持つその言葉。だがそこから、言いようのない惨憺たるものを感じた。何か得体の知れないものに包み込まれるような、そんな恐怖が背筋を駆け上る。ストレーガの側にいるだけでそうなのだ。直接向けられているストレーガの感じる『おぞましさ』たるや、察するに余りある。

エフェクトのかかっている素の声からして、女皇は現実リアルでのストレーガやジェット・バレルと大差のない年齢だろう。中学生——子供ではなく、大人にもなりきれない。まだ少年とか、少女とか、そついう言葉で語られる年齢のはずだ。

にも関わらず、その言葉から感じられるのは『母性』に似た、それでいて負の情念のこもった『何か』だ。演技ロールプレイしているのではない、心の奥底からわき出る、包み込むような『何か』。欲してやまない、飢えて求めるような感情が目に見えるようだった。

「もう一度……そう、もう一度、あなたとこうして話す日を、ずっと待っていたわ。話せば、きっと分かってくれるって……」

「……あれから、もう二年だ。そろそろやめないか、僕に干渉しようとするのは」

「どうして？ 親友のことを心配するのは、当然でしょう？」

心底、何を言われているのか分からない。そんな様子で、女皇は首を傾げる。

これまでの彼女の言動、そのベクトルは全て「ストレーガのために」という方向で一致している。その反応も、納得はできる。ただし、それはこの上なく独善的だった。

今、女皇は魔女と会話をしている。しかし、彼女の言葉を聞いているようで聞いていない、聞く気がない。言葉が交わされているわけではなく、魔女の言い分はすり抜けていき、ただ一方的に女皇が自分の意志を告げているだけだ。

「心配……？ そんな言葉で片付けられるものでもないだろうに」

「悲しいわ、私たちの友情を疑うなんて」

「僕は真面目な話をしているんだ！」

芝居じみた女皇の態度が、よほど癪に障ったのだらう。彼女らしからぬ——そう言い切れる剣幕で、声を荒げる。

「私はいつも真面目よ。こんなことで冗談は言わないもの」

「なお悪い。冗談でないのならね」

彼女たちにかつて何があったのか。ジェット・バレルはそれを知る由もない。しかし、二人のあいだに横たわる溝は、とても深く広いものだということは分かる。

「僕たちはもう道を違えたんだ。お前の元に戻る理由も、意志も、僕にはない！」

そう答えたストレーガの言葉に揺らぎはない。それは完全なる決別の言葉だ。

二人の会話から察するに、何度もこの種の会話は交わされてきたのだろう。だが、女皇は彼女の翻意を願い、魔女はそれを否定し続けている——といったところか。

こういうものは、どこまでいっても平行線で終わる。話の前提がすでに違うのだ、普通に考えれば、歩み寄ることなどあるはずがない。

「どうしても？」

「くどいよ。何度繰り返させる気だ。お前の時間は、あの二年前から止まっているのか？」

「くどい……？」

女皇の声色が変わった。今までの、どこか譫言めいた現実感のない言葉ではない。そこには包み隠していた、生の感情が少しだけ覗いている。

「そこまで言うの？ そんなにも、私の元には戻りたくないの？」

「当たり前だ。お前がやっていることは、ただのアイアンスの拡張じゃない。ペルソナバターの、プレイヤーの駆逐だ。そんな奴のところに戻る気などない！」

トーキョー・スフィア最大のアライアンス、『白銀騎士団』のよくない噂は、ジェット・バレルのようなアウトローの耳にも届いている。

ここ一年半で一氣に最大勢力へと踊り出た、その手腕は強引かつ悪辣。

以前、騎士団が『領土戦』^{コンクエスト}で、ジェット・バレルが根城にしているイケブクロへと攻め込んできたことがある。あいにく彼は現実^{リアル}で試験期間であつたため、直接対峙はしていない。けれども知り合いのアバターから、おおよそくでもない連中だったと、話を聞き及んでいた。

ジェット・バレル自身とて『不正改変者』^{チーター}だ、けっして褒められることをしている存在ではない。しかし騎士団は、そんな彼が思わず眉を潜めてしまうほどのやり口を使うのだ。

「僕はあれほど言つたはずだ、強引で卑劣なやり方はやめろと！アライアンスを大きくするのはいい、だが……正々堂々とした手段でやれと！」

とにかく使えるものはなんでも使う。あらゆる手段を使って、自分たちの勢力を大きくする。それが『白銀騎士団』の基本理念だという。

敵の主力を通常対戦で『活動臨界』へと追い込み、『領土戦』に参加させないなど、ゲーム内で完結するものはまだ序の口。

嘘か誠か、暗号取得^{キログラー}プログラムによるアカウントハックや、あまつさえ運悪くリアル割れしていたとあるアバターが拉致監禁ストレスの行為まで受けた、などという都市伝説めいた話すらある。

滅多に運営が動くことがないという『ペルソナクライン』の特殊な事情もあいまって、深層は闇の中だが、かようなほどにダーティな手段を活用している——『白銀騎士団』というアライアンスに、

そういう噂は数え切れないほどあった。

「何が『騎士団』だ、聞いて呆れる。プライドのないやり方で、一体何が得られるっていうんだ!？」

「……私には、私の居場所を守る義務と責任があるの。そういう私のやり方に、ガウエインたちも付いてきてくれているのよ？ 大アライアンスのリーダーというものはね、その『場』を維持するため、どんな努力だって惜しむことは許されないの」

「しかし……!」

諭すような女皇の言葉。だが、それでストレーガが納得できるはずもないのは当たり前だ。きつと二年前から、ずっと同じことで意見を戦わせてきたに違いないのだから。

「ガウエイン！ キミたちはそれでいいのか!？」

「……我は、いや我らは女皇の言葉に従うまでだ。二年前に、我はそう決めた。そうだ、貴様が騎士団を去ったあの日から」

無然とした態度で、ガウエインが答える。どうやらこの巨体の騎士も、二年前の事情を知る者の一人ということか。

「ふうん……殊勝だね。じゃあ、僕の『裏切り』も許せるんだ？」

「……ッ!」

冷やかな言葉の刃は、ガウエインの急所を抉ったのかもしれない。睨み付けるように、その視線が魔女の仮面に向けられたまま動かなかった。

「どうなんだい？」

「それが女皇の望みであるならば、我が異を唱える法はない」

感情的には納得出来ないだろう。喉の奥から絞り出したような言葉には、苦渋が満ちている。根深い対立は、この二人の間にもあるのは間違いない。

「阿諛追従の輩つてのは、感心しないよ」

「なんとも言う方がいい。我らには我らの立場がある。野に下ったお前にとにかく言われる筋合いなどない」

「ああ、そうかい」

鼻白んだ様子を、魔女は隠そうとしなかった。

「本当に……二年経っても何も変わりやしない。少しは頭を冷やしたのかと思ったが、期待した僕がバカだったよ」

「あなたの方こそ。理想だけで人が動かせるはずもないことは、あなたが一番よく知っているはずよね？」

「……だから？」

その言葉に反応したかのように、魔女の肩がピクリと動いた。まとう雰囲気、肌を――アバターの装甲表面を切り裂くような剣呑なものに変化する。

「いえ、分かっているからこそ……よね？」

ちらりと、女皇の視線が動く。ジェット・バレルの方にだ。その視線は、魔女のように射貫くがごとく鋭いものではない。冷たくて同時に生温い、生理的嫌悪感を覚えるものになで回されるような、そんな視線だ。たとえるなら、蛇妖メドウサーのような――とでも言えばいいのだろうか。

そうついで、女皇はジェット・バレルをじっと見つめている。

品定めでもしているようだった。

「あなたが連れてきたこのパートナー。ええと……なんて名前だったかしら？」

「『^{ジェット・バレル}黒い銃身』だ、女皇」

「ああ、そうそう、ジェット・バレルだったわね。スピット・ダンプでは名の知られたアバター。昔は強かったようですが、今は色々と身を持ち崩して最底辺暮らし……だったかしら？」

言われて愉快的なプロフィールではないのだが、何一つとして間違いはない。どこでそこまで調べたのかは気になるが、それを令、いちいち口にする気にはなれなかった。

それに、女皇の視線にさらされているだけで、気分が悪くなりそうだ。詳しい事情を知らないジェット・バレルは、当然二人の会話に割って入ることはできない。それなのに、ただここにいるだけで地雷原のただ中に放り出されたような焦燥感を感じていた。

あの目。女皇の目だ。目が言っている、お前こそが魔女の急所だと。それが何故か、どうということなのかは分かるはずもないが、彼女がそう言おうとしていることは分かる。

しかしどうすることも出来ない。女皇の糾弾に、身を任せるしかない。

「まあ……^{スピット・ダンプ}あんなところにいるような輩がどのような人物か、考えなくても分かるけれど。そういう人種と手を組んで、一体あなたは何を為すつもりなの、ストレーガ？」

「言わなくちゃ分からないのかい？」

小馬鹿にしたような女皇の台詞にも、魔女は動じた様子がない。傲岸不遜に胸を反らし、この場にいる誰よりも尊大に振る舞う。文句があるなら勝手に言えとばかりに、とりつく島もない。

ふふんと鼻を鳴らすと、ジェット・バレルの腕を取って絡ませる。そのままぴたりと女皇を指差すと、高らかにこう宣言した。

誰にも、何にもはばかることなく、ただひらすらに自分の意志を示す。それが『剣の魔女』^{ストレーガ}のあり方だ。

「決まってるだろ、クロム。僕がやることなんて、二年前からたった一つきりだ。お前と、お前の騎士団を叩く……叩いて潰す！ 僕と、この『黒い銃身』とでね」

冗談を言っている様子はない。彼女は真剣だ。そしてそれが可能であると、間違いなく信じていた。

「宣戦布告だよ、『^{エンプレス・オブ・クロム}聖銀の女皇』。お前と、僕の……僕たちの、戦争だ」

2・7 聖銀の女皇（後書き）

仕事忙しいのに加えて、純粹に難産しました。

プロット段階で魔女と女皇の対立原因を先送りにして誤魔化してたんですよねw

そのツケをここで支払うことになってしまったという。

3 - 1 雪乃の過去

「どどどどーすんですか!？」

「どうするって、何が？」

「宣戦布告ですよ!」 『エンプレス・オーダー 白銀騎士団』 に 『コンクエスト 領土戦』 挑むなんて、聞いてませんよ!？」

『ペルソナクライン』 からログアウトした瞬間、陸朗は反射的に雪乃へと詰め寄っていた。

生徒会室には二人きり。誰も見ていなくて助かった。押し倒さんばかりのこの状況を誰かに見られたら、校内ゴシップでは済まされないだろう。最悪、転校ものだ。

「まあ、言っていなかったからね。知ってたら、さすがに怖じ気づいてたろ？」

「そ、それは…… だけど!」

「やっと見つけたパートナーの腰が引けてたら困るじゃない? だから、退つ引きならない状況に追い込ませてもらった」

「お、俺をハメたんですか!？」

「うん。これでキミもめでたく騎士団の敵ってわけさ」

にたりと笑う雪乃。思わず「魔女め!」と叫び出したくなるところをこらえて、陸朗は大きく息を吐き出した。

「間違いなくそうでしょうね。下手すりゃ賞金首だ」

正直、よく『リミット・バースト リアル 活動臨界』 で現実へとぶつ飛ばされず、まともにログアウトさせてもらえたものだ。

『エンプレス・オブ・クローム 聖銀の女皇』 の気まぐれ——いや、慈悲ですらあるかもしれない

い。彼女の目には、『白銀騎士団』という巨大アライアンスに自分と陸朗、たった二人で挑もうとしている雪乃の姿は、さぞや滑稽に映っていることだろう。

やれるものならやってみろ。つまるところ、女皇の態度はそれに尽きる。そして、自分たちを倒すことなど——出来るわけがないと思っっているに違いない。

そして、それは間違いではないのだ。

宣戦布告？ 何をバカなことを。そもそも、戦争になどなりはしない。たった二人で何を、どうしろというのか。無理無茶無謀の三拍子、無為無策にもほどがあるというものだ。

「どうして、あんなことを言ったんです。できるわけがない！」

「キミはそう思うのかい？」

「当たり前ですよ！」

「決めつけちゃあ、ダメさ。できないじゃない、やるんだよ」

客観的に見て、そんな精神論でどうにかなる問題ではない。しかし断言する彼女の言葉には、いささかの迷いもなかった。開き直っているのとは違う。あるのは確信だ。自分と——そして、陸朗の力を信じている。そんな目をしていた。

「不安は分かるよ。常識的に考えたらできないって考えるのは当然。そこまでは間違ってない、キミは間違えていない。だけど……やり方はある」

自信満々に、雪乃はそう言い切った。文句のつけようもないほどに卓越した個人戦闘力を持つ彼女だが、集団戦闘においてはいまだ未知数、陸朗には見せていない。ただ彼女はまだ、実力の底を明かしていないことだけはわかる。そんな彼女ができると言っているのであれば、それはおそらく事実なのだろう。

やり方はある——そして、そのやり方には、きっと陸朗が必要なのだ。だからこそ、彼女は陸朗の前に姿を現した。そうでなければ、彼女が声などかけるはずがない。ならば果たして——自分はどのように使われるのか？そこは一番の興味、関心、そして不安だった。

「なんなら、まずはとくと想定してる作戦を説明してあげてもいいんだけど、どうする？それとも愚痴なり文句なりを言いたいのかな？聞くだけ聞いてあげるよ。それ以外のことはしてあげないけど」

言いたいことも聞きたいことも山ほどあったが、彼女がこんな態度では言ってもしょうがない。口にするだけカロリーが無駄だ。まずは真意を確かめるべきだろう。これからどうするのか、己の身の振り方を決める前に。

「それを聞くより先に、まず確認していいですか？」

「なんなりと」

「……気は確かなんですか？はつきり言って、正気とは思えません」

自分とアテにならないチート野郎の二人組で巨大アライアンスに宣戦布告。もちろんそれ自体も大概だが、敵地のど真ん中でそれをやつてのける度胸こそが異常だ。

ああいうことが出来る人間は、なかなかいないだろう。ゲームだから『ペルソナクライン』だから、という区分けにはあまり意味がない。そこを意識してしまうような人間は、そもそもあんな行動を取らないはずだ。

無論、陸朗自身にもできない。巻きこまれたからあの場にいただけで、許されるならば即座にあそこを逃げ出したかつくらいだ。真似しろと言われても無理だ。

「あそこでやらなきゃ意味がなかった。あいつは……」
エンプレス・オブ・クローム
『聖銀の女皇』

は、巨大組織の長なんだよ？ だから心情的なこだわりがあっても、『剣の魔女』たるこの僕であろうと、取るに足らない存在と見なす必要がある。そう振る舞わなければいけない立場なんだ。普通の手段じゃ、取りあってもえなかったさ」

「だから、わざわざ相手の懷に飛び込んだと」

「そういうことだね。あいつの劇場型な性格はよく知ってる。あの状況でこっちから出向けば、上手いこと話を回せると思ったのさ。それでもまあ、無事に戻れる確率は五分五分だったけど。女皇がよくても、周りが許さない可能性はあったんだ」

「……『太陽の騎士』ですか」
ガウエイン

「ああ。あいつが僕を許さない可能性はあった。あえて挑発してみたけど、ずいぶん我慢を重ねてたみたいだね。いやあ、すっかりしてるよ。昔はあんなこと言ったら、即座に突っ込んで来たものだけど。血の気の多い子でさあ」

言葉には、どこか懐かしむような響きがある。

雪乃とガウエイン、そして女皇は親しかったのだろう。それがなんらかの理由で決別した。今までのやりとりからして、それはまちがいない。

「ずいぶん詳しいですよね、会長。あの二人のこと」

「ン……回りにくいね。言わなくてもわかってるんじゃない、キミ？」

「……以前、仲間だったんでしょう？ 同じライアンスに所属していた。違いますか？」

「正解だよ、ご名答だね。もっとも、ほかに答えはないと思うけど」

まるで懐かしい思い出を回想するように――いや、事実懐かしい

思い出に違いない。話から察するに、二年は前のことのはずだ。だからこそだろう、彼女はしんみりとした眼差しで宙を見つめた。

「僕があいつらとつるんでいたとき……というか、実際のところ僕はクロムとだけ組んでいたんだが、当時よく対戦してた連中がなにかと集まるようになってね。やがて、僕をアライアンス・リーダーにした集団ができた。その名を……『アウトランダーズ異邦人の旅団』」

「『異邦人の旅団』……？」

「聞いたことはないと思う。活動期間が短かったからね。たぶん一ヶ月もなかったはずだ。『領土戦』をやったことも一度きりだし、知ってる人がいたとしても、おそらく『白銀騎士団』の前身くらいの認識だろう」

陸朗は情報には聡いつもりだったが、『異邦人の旅団』という名前についての記憶はない。おぼろげながら、現在のトップランカーたちが集うアライアンスが過去存在していたという噂くらいは覚えがあったが、今現在の状況から考えると眉唾だろうと思っていた。

しかし雪乃の言うことが本当なら——そして彼女には嘘をつく理由がない——、噂は事実だったということになる。一体どのようなアライアンスだったのか、彼らしくもないことだが、俄然興味が湧いていた。

「とはいえ、面子は騎士団とはまるで違ってた。共通してるのはクロムとガウエインだけさ。まあ……はみ出し者の集団だったな。今のイケブクロ・エリアほどではないけどね、無秩序で、ゆるい集まりだった。駄弁るのが好きな奴も、戦うのが好きな奴も、商売が好きな奴も、みんな一緒くたでさ。目的はなにも持たず、ただ『ペルクラ』で一日数時間を思い思いに過ごす。そんなアライアンスだった」

「なるほど。けど問題は……その『異邦人の旅団』でなにがあった

かですよ」

「……やっぱり、それを聞きたい？」

「当然。それこそ核心でしょうに。会長と女皇のあいだにある確執は、生半可なものじゃない。そのくらい、俺にだってわかる。何事もなかったら、ああはならない」

「そうだよねえ……ああはならないよねえ」

雪乃の柳眉が、辛そうにしかめられていた。

彼女が女皇とあんなってしまった原因でも考えているのだろう。当事者なのだから知っていて当然、しかしここまで洩るからには、語りづらいことであることは十分に察する。

しかしそれでも、これだけは確かめなければならないことだ。正悪をいちいち口実にする気はないが、なにも知らずに利用されたような形になることだけは御免だ。すでに退つ引きならない状況であるとしても。

「実のところ、こっちの事情については頃合いを見て、僕から切りだそうとは思っていたんだけど……催促されたんじゃあ、しょうがないよね。いいよ、話そう」

雪乃はしばし考えてから、小さくうなずいた。

「出ようか？　ちょっと長い話になるだろうし」

くいつと、親指で窓の外を指す。ガラスの向こう側に見えた空は、少し赤みを帯び始めていた。

「で、なんでラーメン屋なんですか？」

「好きだから」

生徒会室を出た二人は、雪乃の「ちょっとお腹が空いたな」という一言で、軽く食事をしていくことになった。無論陸朗に拒否権らしきものはなく、有無を言わずという感じで連れて来られただけであるのだが。

赤いのれんのその店には、でかでかと『札幌ラーメンおろちゃん』と書かれている。この屋号で博多ラーメンを出したら詐欺なので、札幌ラーメンの店なのだろう。

「しかし……意外だ」

「みんなそう言うんだよ。まいっちゃうよね」

「そりや言うでしょう。会長は『秋月』のお嬢様なんですし、そのイメージとかけ離れてますよ、こういう店」

「怖いなあ、先入観つてのは」

店先にいると、ゲンコツダシと味噌、そして脂の香りが遠慮なく漂ってくる。好きな人間にはたまらない匂いだろう。そして陸朗もこういう脂っこい食べ物嫌いではない。くうと、小さく腹の虫が鳴いた。

「あ」

「ふふつ、キミも準備出来てるみたいだし、入ろうか」

小さく笑いながら、のれんをくぐる雪乃。彼女にわずかばかり遅れて、陸朗も店内に入る。

狭くて小さい店だ。コの字型のカウンターに座れるのはせいぜい八人ほど。それ以外の席はなかった。奥にある厨房にいた、妙に筋肉質で体格のいい中年の店主が、見事なバリトンで「らっしやい」と声を出す。

うながされるように、壁に貼り付けられたメニューに目を向けた。種類は多くない。札幌ラーメンの味噌と醤油、あとは餃子と炒飯くらいだ。

雪乃の隣に座りながらたずねる。

「どっちがオススメですか？」

「味噌だね。つーか僕は味噌しか食べない」

「じゃあ俺も味噌で」

「ん、あえて醤油にいくと思ったんだけどなあ、キミの性格的に」
「食い物で冒険はしない主義なんで」

奥にいる店主に注文を伝えてから、カウンターにある水差しの中身をコップに注ぐ。ほんのりとレモンの香りのする冷水を飲みながらコの字の向こうに目を向けると、先客がいることに気づいた。

年齢は自分たちと同じくらいだろうか、女の子の二人連れ。眼鏡をかけたボブカットの少女と、陸朗の知識ではゴスとかロリとかしか表現のしようのない雰囲気、ロングヘアの少女だ。着ている制服に見覚えがある。あのブレザーはたしか、要町のほうにある『青葉台付属女子』の制服だ。同級生か、クラスメートといったところか、何やら楽しげに言葉を交わしている。

こういうラーメン屋に来るタイプには見えない二人連れだが、そんなことを言ったら隣に座っている雪乃などなおさらだ。金髪碧眼の彼女こそ、こういう店には似合わない。そのツレである陸朗の心配など、それこそ余計なお世話というものだろう。

「どうかしたかい？」

「いえ、なんでもありません。それより……」

「ああ、そうだったね。と言っても、あんまり声高に言うようないつちやないんだが……」

「そうなんですか？」

「当たり前だよ。僕にしてみれば、昔の恥をさらすようなものじゃないか」

「何をしでかしたんですか、一体？」

「しでかしたというか、してしまったというか……」

この期に及んでも言葉を濁しているからには、相当のことなだろう。しかし、そもそも説明する気はあると言っていたのだ。ここで誤魔化されるわけにはいかない。

「わ、わかってるよ。そんな怖い顔しないでよ。ほらラーメン来ると、食べながら話そ？」

「……頼みますよ、本当に」

念を押す。

そう言っておかないと、またはぐらかされそうな気がした。

「学校でも言っただけど、結構こみ入った話だね。まず当時の状況を教えておくよ」

小さな唇で黄色っぽい縮れ麺をもやしと一緒にすすりながら、雪乃は話を切り出した。

いつの間にか、席は満席になっている。残りの席を埋めているのは全員サラリーマン風の男たち。常連客が多いのだろうか。明らかにラーメンを作るには過剰なほど筋肉質の店主と、ずいぶん会話が弾んでいる。

雪乃はにわかに活況を呈した店内をはばかりような、少し抑えた声で話を続けた。

「それは、まだ僕が『僕』じゃなくて『私』だったころの話。秋月の跡取りじゃなくて、ただの末娘だったころの話だ」

秋月家という存在は、陸朗たちが住むこの豊島区池袋界隈では非常に大きな影響力を持つ。いわゆる地元の名士というやつで、一族からは政治家、それも大臣経験者まで輩出していると、まだ子供である陸朗でも知っているくらいだ。

雪乃自身はそれを鼻にかけるようなことはなかったが、客観的に見て彼女の能力は、秋月一族の跡取りとして、恥じることはないものがある。

「たしかに僕は今でこそ秋月の跡取り娘だ。家と、家に連なる人たちのために働く義務がある。けど、昔はそうじゃなかった」

唇を湿らせるように、レンゲですくったスープを口の中へ。好物であるはずなのに、彼女の表情は、嫌いな野菜でも食べているかのように辛そうだ。

「二年と少し前……僕には年の離れた兄がいた。僕は父の後妻の子なんだけど、彼は前妻の忘れ形見だね。家中での扱ひ的に、僕は正直雲泥の差をつけられていた。けれども、兄は優しい人だね。そんなことは少しも気にした様子もなく、妹としてかわいがってくれたんだ」

「お兄さん……いたんですか」

「いたんですよ。過去形だがね」

つまり、今はいないということだ。

まさかと思ひ表情を曇らせると、雪乃は違ふ違ふとばかりに、はたはたと手を振った。

「ああ、別に死んじやったわけじゃないよ？　今はどうしてるのかは知らないけどさ」

「ええと、それって……」

「そう。兄は逃げたんだよ。重圧に勝てなかったんだろっね、秋月の嫡男っていう責任の重さのさ。今頃、どこで何をしてるやら」

「妙にさばけてますね」

「しょうがないじゃん。手紙のひとつもよこさないんじゃ、心配するにも限度はある。それに……僕は兄の気持ちはわかるけど、兄の行動を認めることはできない」

「少しだけ厳しい口調の言葉だった。罪人を断ずるような、決然とした響きがある。別に自分が責められているわけでもないのに、思わず陸朗は息を呑む。」

「な、なぜです？」

「だって考えてもみてよ。僕が僕として今日まで生きてきたのは、秋月という環境があればこそ。そしてそれは、家を支えてくれた人たちの努力のたまものだ。どんなに父が優れていたって、ひとりでできることなんて、たかが知れたことさ。秋月っていうのは、いわば父を代表とする共同体なんだ。だから僕は父だけに育てられたわけじゃないし、ましてや僕ひとりで育ったわけじゃない。僕はその共同体にこそ育てられた……そう思っている」

「家のため、ですか」

「もちろん、好きで生まれた家ではないよ？　でも、そこで育ったのならしょうがない。生まれた責任ってやつは、果たさなきゃいけないと思ってる。だから……僕は兄を認めることはできないんだ。兄の優しさも、その背負っていた責任も、すべて承知した上でね」

「普通の家に生まれたかった。彼女はそう思っているのだろう。だが、それは叶わない夢だ。生まれてしまったからには、切り離せない」

い責任というものがある。雪乃が兄が逃げたことで、若い身空で思い知ってしまった。

だからこそ誓ったのだ。兄のように逃げることはすまいと。秋月という名の意味と重さを受け止めて生きようと。その決意こそが、今の『秋月雪乃』を作っているのだ。

「……なんか、世界が違いすぎて共感はしにくいけど、会長の言っていることはわかります」

「うん……まあ、結局僕は秋月という家を自分から切り離せなかっただけなんだけどね。幼すぎたとか、言い訳はいろいろあるにせよ、事実としてはそれだけだ……でも、だから」

雪乃はそこで一度言葉を切った。これから口にする言葉に覚悟が要る。そんな面持ちだ。

もちろん、先を急かすような真似はしない。彼女を見つめながら、話を続けるのをじっと待った。

三十秒——あるいは一分か、それともそれ以上だろうか。雪乃が血を吐くように辛そうにしながら、言った。

「だから、僕は……『私』は、父や祖父の決めたことに逆らうことができなくて……たったひとりの友達とした約束を、破ったんだ。悪いのは、僕なんだよ」

そのまま顔を伏せる雪乃。その白い拳は、まるで何かをこらえるように小さく震えていた。

3 - 1 雪乃の過去（後書き）

お待たせしました、久々の更新になります。

今回は色々背景設定説明の回。

あとラーメン屋デート。

秋月雪乃、という少女を掘り下げていく展開です。

3 - 2 裏切り者

兄がいなくなってから、自分を取り巻く環境は大きく変わってしまっただけ——雪乃はそう言った。

想像には難くない。跡取り息子が失踪したのだ、一大事どころの騒ぎではなかったらう。秋月という家、そして権力の屋台骨を揺るがすような事態だ。

「ま、その時から僕には、自由というものがなくなっただけ。完全にといいわけじゃないが……かなりのレベルでね。たとえば、進学先も変えられてしまった」

雪乃と陸朗の通う『国教学院』は、この界限ではかなりレベルの高い私立の進学校だ。卒業生からは国立大へ進学する者も少なくない。

ちなみに陸朗の成績は上の下といったところ。がんばればもっと上を狙えるぞ、といったも教師に言われてしまうポジションだ。あいにく本人としてはそこそこ点が取ればいいので、がんばることはないのだが。

そういえば雪乃は文句なくぶつちぎりの学年トップだったはずだ。テストも満点以外のほうが珍しいというレベル。教師生徒問わず、一目も二目も置かれているのは伊達ではない。

「別に無理してうちの学校に入ったとか、そういうわけではなくてね。学力的には余裕があったから、それは問題じゃなかった。問題なのは……」

「行くはずだった学校への進学を、取りやめたことですか？」

「その通りだよ。もともと僕はね、青葉台付属女子に進学するつもりだったんだ。言質を取ってたわけじゃないけど、父もそれでいい

と思っていたようだし」

青葉台付属女子、と聞いて先ほどカウンターの向こうにいた二人連れを思い出す。あいにくと今は必要以上に筋肉質な店主の巨体に遮られて、その姿は見えない。

「こら、ちゃんと聞いてくれよ」

「あああ、すいませんちよつと……」

あそこに青葉台の生徒がいたもんで、という言葉を言いかけて飲み込む。雪乃の目つきが「僕の話聞け」と言っていた。

「まったく……内申書に落ち着きがないと書かれてるのは伊達じゃないね、キミ」

「……なんで俺の内申書の内容知ってるんだアンタ」

「こと学校について、僕が知らないことはあんまりないね」

戦慄した。今さらだが、実はとてつもなくヤバイ人間が、学校中樞に食い込んでいるのではなからうか。

「ちなみに、内申書見たのは昨日初めてさ。それにキミだけだよ？」

「なお悪いですよ、そりゃ。つーか、なんで俺だけ？」

「決まってる。知りたくなったからね、キミのこと。色々調べたよ……僕を助けてくれる人なのか、知りたかったんだ」

そう言いながら、少し冷めてしまったラーメンの残りをすする雪乃。長い金髪は、ヘアゴムを使って首の後ろでまとめている。触れたら折れてしまいそうな首筋は、うっすらと汗ばむ肌が照明を反射して、妙に艶めかしかった。

「助ける……ですか」

「そう、僕には助けが必要だったんだ」

ふう、と箸を置きながら、雪乃は小さく息を吐いた。

「さっき言ったよね、僕は約束を破ってしまったつて。あれ、同じ学校に行こうねっていう、他愛のない話だったんだ」

「その、青葉台に……ですか」

「ああ。でも、その約束を果たすことはできなかった。そのこと自体はまあ、仕方がないことなんだが。そもそも、後で謝ればいいと思っただくらいだし」

たしかに、現実リアルの事情というものは、しがない学生的身ではどうしようもないこともある。雪乃とて保護者のいる身だ、できることとできないことは厳然として存在するのだろう。

「けどね、その機会がこなかったんだよ」

「……どういうことです？」

「単純に忙しくなつてね、僕はしばらく『ペルクラ』で遊ぶことを控えてた。実際のところは息抜きで遊ぶことくらい、父も大目に見てくれたとは思っけど、正直言つてそういう気分にはなれなかったものもある。自分の中で、まだ気持ちの整理もついてなかったしね」

なるほど、道理だ。その頃はまだ雪乃の兄が失踪したばかりのはず。いかに彼女といえども、幼い時分では動揺していたのは想像に難くない。

「まあ一月弱かな。気持ちを整理して、新しい境遇に納得するまでそのくらいかかって。それからようやく『ペルソナクライн』にアクセスした。そうしたら……」

雪乃は一旦、そこで言葉を切った。表情には自重めいた笑みが浮かんでいる。

そして一呼吸のあと、悲しそうな口振りで言った。

「僕は、裏切り者になってたんだ」

言葉の意味を飲み込むのに、しばらく時間が必要だった。

「……事態が急変しすぎじゃないすか？」

「そう思うだろ？ 僕もそう思う」

軽口にも力がない。

「僕がいないあいだに、どんな葛藤があいつにあつたのかは分からない。それを聞いても答えてくれなかったし。ただあいつは……『聖銀の女皇』は、『異邦人の旅団』とはまったく違う組織を、その短期間に作り上げていた」

「それが『白銀騎士団』ってわけですか」

「そういうこと。そして騎士団と……いや、そのころのあいつと僕は馬が合わなくなってるね。考え方の違いが浮き彫りになってきたというか……」

全部は飲み干さない主義なのだろうか。彼女は井に残ったラーメンスープを箸先でかき回しながら、かつてを思い出すように、ゆっくりと言葉を選びながら話し続けた。

「考え方の違いってのは、結構大きな要素だね。ぶっちゃけて言え

ば、僕は彼女よりも『ペルクラ』に対して真剣じゃなかったんだよ。今にして思えば、そう言うしかない気がする」

「真剣……ですか。まあ、ゲームはゲームなりに真剣にやるっていうのは理解できますけど」

「そっいうんじゃない。あいつはもっと切実だった」

雪乃は静かに頭を振る。

「なぜなら……『ペルソナクライン』は、あいつにとって全てだったからね」

全て。

とても、とても重い言葉だ。軽々しく使っているような言葉ではない。そして雪乃も、そのことはよく理解している。それが分からない彼女ではない。

だがあえて、彼女はその言葉を使った。それだけの重さがある、ということだ。

「全て……と言われても、『廃人』ってやつですか？」

オンラインゲーム黎明期より言われるようになった『廃人』という呼び名は、実生活を犠牲にしてまで、ゲームでの成果を求めるようなプレイヤーを指す。そのため、雪乃のようにゲーム内で突き抜けた実力を持っていても、実生活を犠牲にしていない者は、『廃人』とはあまり呼ばない。

「廃人とは少し違うね。あいつは実生活を犠牲にしたわけじゃなくて、実生活から逃避するために、ゲームの世界に没頭していただけだから」

「それって、つまり」

「……そう。報われない実生活からの逃避先が、『ペルソナクライ
ン』だったのさ。この『もうひとつの世界』に没頭することで、実
生活の辛さを忘れていた。無論よくある話だよ、この手のヴァーチ
ヤル・リアリティ・アプリケーションにのめり込む奴なんて、多か
れ少なかれそういうところはあるはずだ。たとえばそう、キミもね。
違うかい？」

「はいって素直にうなずきにくい質問、やめてほしいんですが」

「心当たりはあるか。あるだろうねえ、僕にもある。あっちが世界
の全てであれば、どんなに楽しいことか」

くくく、いつものように、他人を斜め上から見ているような笑
みを浮かべる。少し、調子が戻って来たのだろうか。

「けどね、僕にしてもキミにしても、彼女…… 女皇に比べたら甘っ
たれてただけなんじゃないかな。そのくらい、彼女は現実に絶望し
てたよ」

「そんなにも、ですか？」

「まあね。あんまり口にしたい言葉じゃないんだが…… 『ドメスティック・バイオ
レンス 家庭内暴
力』ってやつだ」

急に空気が重くなった。聞かなければ良かったとさえ思う一言。
正直ラーメン屋でする話ではない。だがもう聞いてしまった以上、
後には退けない。自然と顔が引き締まった。

「僕もかなり後になってから知った事実なんだけど…… 両親が育児
に興味のないタイプだったらしくてね。最初はいわゆる『ネグレクト 育児放棄
』、それでも彼女が健気に育つと、だんだんと手が出るようになった
らしい」

まるで我が事のように、辛そうに顔をしかめながら言う雪乃。

「そういう家庭環境だからね。人を信じられない彼女は、人見知り
がそれはもう激しくて。学校でも仲のいい友達なんているはずがな
い。学校と家、たったふたつの狭い世界でなお安らげない彼女が、
唯一安息を得られる空間こそスフィア——そして『ペルソナクライ
ン』になったのは、納得してもらえるんじゃないかな」

なるほど、帰結はわかった。彼女——『聖銀の女皇』がそのよう
な過去を背負っているのならば、『ペルソナクライン』に固執する
のは当然だ。

けれども——ならばこそ、雪乃と仲違いした理由が分からない。

「親友だったんでしょう、会長とその……『聖銀の女皇』は」

「ゲームの中ではね。学校のほうでは、なかなかそう上手くいかな
かったよ。なにせ、最初はクロムのプレイヤーがあいつであるなん
て、僕は知らなかったくらいだし。先に出会ったのは『ペルソナク
ライン』の中でのことだったのさ」

「上手くいかないって、なんでです？ リアル現実バレしたなら、普通に

付き合えばいいじゃないですか」

「分別盛りの今ならともかく、あの頃はまだ子供だったからね、周
りが。僕も子供なら突き抜けられたんだろうけど、当時の僕は今ほ
ど責任を背負ってないとはいえ、やっぱり教育された賢い子供だ
った。だから理解しちゃってたんだよ。秋月雪乃という存在が、特
定の一人と深く付き合うことの意味と、影響をさ」

「それは……」

要するに子供社会ではえこひいきと映ることを、当時の雪乃は恐
れたのだ。そしておそらく彼女の推察は正しかったろう。人見知り
するような、クラスメートと距離をおきがちな子供に雪乃が肩入れ
すれば、どんなことが起こるか。十中八九、いじめのターゲットに

なっていたことは間違いない。

彼女はそれを恐れたからこそ、学校での親しい接触は避けていた、
というわけだ。

「それ自体は正しい選択だったと思う。けど、そのせいであいつの世界はますます小さく、閉じていった。それだけが全てであるかのように……いや、さっきも言ったよね。まさしくあいつにとってはそれこそが、『ペルソナクライン』こそが全てだった」

子供ゆえの純粋さ、そして視野狭窄。世界を縮める、ありとあらゆるものが折り重なっていき、当時の『聖銀の女皇』の世界を狭めていったのだ。

「けど、僕にはどうしようもなくてね。せいぜいその小さな世界にあつて、『ペルソナクライン』であいつと共にいることで満足しちゃったのさ。無知つてのは罪だよ、ホント……自分が間違ってたって気づけたのは、それからずっと後になっちゃうんだから」

「裏切り者になってたつてのは、つまりそういうことですか」

「うん。僕が『ペルソナクライン』に繋がなかったあいだに、状況は悪化の一途を辿っていったわけさ。僕という支えがなくなったことで、彼女は不安に絡め取られ……まあ、恐慌状態になったってとこかな。狭くなり続けていた彼女の『世界』は、僕なんていうたった一人がいなくなっただけで、儚く、脆く、そして弱く見えただろう。そして彼女はもうしたか？」

そんなもの、答えはひとつしかない。

「自分の世界を、守ろうとした……？」

「正解。あいつは彼女らしからぬ決断力を発揮した。まさしく乾坤一擲だね。オール・オア・ナッシング、あいつの主観では全てをな

くすかどうかの瀬戸際だったんだろう。あいつは僕と一緒に培ったあらゆる人脈と力を使い、自分の『世界』を強化していった。その結晶がアレさ、『白銀騎士団』だ。^{エンプレス・オーダー}そして彼女は本当の女皇となり、このスフィアを席卷する巨大アライアンスを作り上げたというわけさ。その過程で生まれた、ありとあらゆるひずみと恨みを黙殺してね」

最大規模のアライアンスという尊名と同じくらい、『白銀騎士団』の悪評は『ペルソナクライン』に鳴り響いている。手段を選ばないその拡張志向の理由が、たった一人のアバターの恐慌にあったと、雪乃は言った。

「しかし、それでよく騎士団の面子は女皇に従いますね？」

「ガウエインの奴は例外だと思うけど、勝ち続けるかぎり女皇から……そして騎士団というアライアンスから受ける恩恵は多い。ギブ・アンド・テイクが成立するのなら、多少の無茶は出来るものさ。無理を通せば通りが引つ込む、だ」

実にバブリーな話だよ、と雪乃は冷ややかに笑う。
そして文字通り、泡のような脆弱さを危惧したと、彼女は続けた。

「僕は『ペルソナクライン』に戻ってから、何度となくあいつに忠告した。そのやり方では、騎士団以外の全てが、お前たちの敵になるぞと。だが、あいつはもはや聞く耳を持たなかった。一度離れていった僕のことを、あいつは信用してくれなかった」

「だから『裏切り者』ですか」

「かわいさ余って憎さ百倍、よくある話ではあるけどね。だけど、そこで引つ込むような僕じゃない。口で言っただけなら、叩いてでも教えてやれと、母から秋月の流儀を教わってる。僕は僕の全力で『白銀騎士団』に挑んだ。ただ、教えるためだけにね」

「……あの、まさか一人ですか？」
「うん。一人で」

思わず頬が引きつる。どこまで真っ直ぐなんだ、この女は。^{ひと}バカ正直にもほどがある。

「アホか！？ 『異邦人の旅団』はどうしたんですか！？」
「しょうがないだろ！？ 僕がログインしなかったあいだに、当時の知り合いは騎士団に組み込まれるか、別のアライアンスを組むかしてたんだよ！ 僕には味方がいなかったんだ！！」

そんな寂しいことを全力で表明されても、陸朗だって正直困るのだが、事実であるならば責めてもしようがない。

「……それにね、結構いい勝負には持ち込んだんだぜ？ なにせ、あいつの懷まで飛び込んで斬り結んだんだからね。でもさすがに……女皇とガウエイン、二人を同時に相手にするのは無理だったよ」
「そりゃあ……そうでしょう」

呆れるしかない。一人で戦いを挑んだ無謀さと、責任感の強さ、そして『いい勝負』にまで持ち込んでしまう、規格外の強さに。

「まあいい勝負とは言っても負けは負け。結局、僕は組織としての『白銀騎士団』には勝てなかった。目的は、果たせなかったよ。僕はあいつを……女皇^{クロム}を止めることはできず、二年を無駄に費やした。そしてそのあいだに、『白銀騎士団』はさらなる拡大を続けた」
「そして今に至るわけですか。正直、あのアライアンスは俺も好きじゃないですけど……それほどひどいんですか？」

「ひどいね。いや、状況は僕の想像を超えて悪化していると言っていい。今日現在、『領土戦』^{コンクエスト}の対立状況は最悪だ。めちゃくちゃだ

よ、誰も彼もがいがみ合ってるくらいでさ。競い合うんじゃない、いかに相手を騙し、出し抜くかの勝負になってる。その分大手アライアンスの部下に対する締め付けは厳しくなり、恐怖政治すら横行してるくらいだ。『ペルソナクライン』全体のコミュニティは崩壊寸前と言ってもいい。皮肉なものだね、スフィアの中で一番自由なのが、キミたちのような無法者の集まりである、このイケブクロ・エリアだっていうんだから」

「まとまりがないだけです、たぶん」

「けど、その混沌こそが望ましい。僕はそれが欲しかった」

そう言った雪乃の顔は、一人の生徒会長ではなく——ペルソナクラインのプレイヤー、『剣の魔女』^{ストレীগ}としてのものだった。

「だから僕は、キミという存在に目を付けた。とはいえ……もともとキミというペルソナバターがいると知ったのは、本当に偶然だったのだけだね。『鮮血獵犬』^{ブラッド・ハウンド}といったっけ？ 『領土戦』の前にイケブクロのまとめ役を『暗殺』^{リミット・バースト}するため、送り込まれた奴がいたんだが、そいつのターゲットの一人がキミだった」

「……礼を言うべきなんでしょうね。暗殺者の手から救ってくれたんでしょ？」

「まあ恩義に思ってくれてもいいが、大したこっちゃないよ。まさか、ウチの学校から『ペルクラ』やってる奴がいるとは思ってなかったから、単純に興味が湧いたのが助けた理由だしね」

「ということは、パートナーに選ぶのは、俺じゃなくても良かったと？」

望んでなったパートナーではないが、誰でも良かったというのであれば、それはそれで面白くない。陸朗にだって少しばかりは、面子やプライドというものがある。

「正直なところ……キミでなきゃダメだったかと聞かれたら、答えはノーだと言わざるを得ないね。ただ二年の間で、僕の求める条件を満たしてくれたのはキミだけだった」

「条件？」

「一つは、『白銀騎士団』におもねらない反骨心があること。二つ目は、無法地帯であるイケブクロ・エリアのアバターたちに、一定の影響力を持っていること。そして最後の三つ目は……」

「三つ目は？」

「強いつてことだよ、僕を驚かせるほどね」

3 - 2 裏切り者（後書き）

ずいぶんお待たせして申し訳ありません。

忙しいのと疲労性の頭痛で夜も寝れないくらい苦しむもののダブルパンチで執筆どころじゃなくて……。

それでもなんとか、こうして仕上げることができました。

ちなみに、まだラーメン屋編はもうちょっと続きます。

具体的にはあと一回くらい。

3 - 3 山名さやか

一瞬、思考が止まった。

この金髪の女の子は、一体なにを言っているのだろう。そんなふうにさえ考えた。

陸朗はここまでストレートに、実力を評価されるなど想像だにしていなかったのだ。自他共に認める卑怯者である彼には、そんな賞賛を受ける権利はない。そう考えていたし、それが当たり前だったし、それ以外の体験はなかった。

しかし彼女は違う。秋月雪乃は、陸朗の『強さ』そのものをはつきり褒めた。彼女自身が矛を交えたからこそ出てくる台詞として、褒めたのだ。

「そういう歯の浮く台詞は……やめて欲しいんですが」

「僕がお世辞を言うタイプに見えると？」

「時と場合によっては」

「どこまで信用ないんだよ、僕……」

「だって会長、言葉に重みがないじゃないですか。その態度じゃあ、信じろって言われても」

「ひどいこと言うねえ。情けとかないのかい、キミには？ ぱっと

見の印象で他人を判断するもんじゃないぞ、陸朗君」

「それはそうでしょうけど」

実際のところ、雪乃のこうした本心の掴みにくい軽佻浮薄な態度は、かなり作っているところが大きいのだろう。彼女の生い立ちと置かれた環境。それに対する彼女なりの解答が、この『僕』という一人称と、この態度なのだ。

重圧に押し潰されなかったための、自分を守る鎧のようなもの——陸朗は彼女の話から、そう理解していた。

「というかだね、僕は見込みのない奴を数合わせのためだけに、パートナーになんかしないよ。やるなら勝つためにやる、徹底的にやる、とことんまでやり遂げる。そうさ、不可能を可能にするパートナーを選ぶとも。いいかい、そんな執拗で神経質で完全主義者の僕が結論したのがキミだったんだ。もっと自信を持つてくれないと困る。本当に困る」

少し怒ったような口調だった。陸朗を見る目が険しくなっている。彼の自信のなさ、そして不甲斐なさというものに、腹を立てているのかもしれない。

「謙遜は美德だが、自信がないのは考えものだよ。キミがどうしてそうなったか、僕は分からないけど……キミの力がどれほどのものか、僕はよく知っているんだ。キミは、キミ自身が思っているよりも間違いなく強いプレイヤーだよ」

「……」

陸朗は答えられず、ただ目を逸らす。そんな彼の横顔に向かって、たたみ掛けるように雪乃は言葉を続けた。

「さつきも言っただろう。キミは僕の求める条件を全て満たしていたと。無法地帯イケブクロ・エリアですつと戦ってきたというキミの経歴、そのイケブクロ・エリアのアバターたちに一目置かれているという人脈、そして何より、キミはこの僕に攻撃をぶち当てた。角を折られた。裸に剥かれた。この僕がだぞ？ ダミー・アバターといっても、あそこまで僕を追い込めた奴なんて、ざらにはいないんだ。事実、騎士団にだってあれができるのはほとんどいないよ。キミだって僕の戦いを見ただろう？ 僕はあのブルー・グランドから有効打は受けていない。傲慢じゃないがね、あの程度の相手ならば

無傷で勝てる。キミとあのアバター、二人と戦った僕が断言しよう。キミはあいつより強い。強かったから、あいつに勝ったんだ」

「でも、あいつはランカーで、俺は……」

「キミはレギュレーションに従わない、アウトサイド・プログラムの使い手だから、ランカーポイントを稼げなかったただけだろ？ 僕は違法改変者^{チーター}を無条件に弱いとは思っていない。無法地帯で戦うからこそ、得られるものもあるはずだ。キミの異常な反応速度は、レギュレーション外のでたらめなルールで戦い続けたからこそ、身についたものなんじゃないかな？」

「それは……」

言われていることは、理解できなくもない。チートやチートすれのアウトサイド・プログラムの飛び交うイケブクロ・エリア——スピット・ダンプでは、通常のアバターの常識は通用しない。そこにはそのルールがあり、常識があり、独特の世界があった。

たとえば速さ。スピット・ダンプでは、とにかくでたらめにスピードだけをいじりまくるようなアバターも少なくない。『速度中毒^{スピードジャンキー}』とでもいうべきか、古の時代のMMORPGでも、ひたすら自キャラの攻撃速度だけを高めようとしたプレイヤーが後を絶たなかったというが、誰よりも速く動くという欲望は、確かに抗いがたいものがある。その欲望に忠実になった者が行き着く先は、やはりアウトサイド・プログラムなのだ。

もつとも、速くなりすぎてアバター・フレームが速度に耐えられず、対戦が始まった瞬間にバラバラに自壊していったアバターを陸朗は何人も見てきた。しかし中には見事なバランスで、速度と実用性を両立していた者も存在する。そういう相手は、純粋に手強い。彼らの速さに対抗するため、自分が鍛えられていたと言われたら、そういうこともあるかもしれないと思う程度には。

「まあ確かに……こんなところで長いこと戦ってたせいで、変な方

向に能力が進化してる感じはしなくてもないですが」

「その変な感じが大事なのだ。騎士団は戦略レベルでは搦め手をいくらでも使うけど、戦術は基本、正攻法でぶち当たる質パワー・ウォールより量の戦法が主体だ。まともに対峙するのは得策じゃあない」

「得策じゃないというか……とてもじゃないですが、まともに対峙したくないですね」

「大変けっこうなご意見だ。まさしくその通りで、ああいうのは隊列を引っかかり回し、裏をかき、混乱したところで崩れた奴から仕留めていくのが上策さ。ちよろいもんだよ、浮き足だった連中を刈り取るのなんて」

「……そりゃ、あんたには簡単なことでしょうけど」

単体としての戦闘力がズバ抜けている雪乃——ストレーガであれば、確かにそれは簡単だろう。だが乱戦に斬り込み、かつ巻きこまねずに相手を駆逐していくとなると、並の腕前でやれることではない。

「そんなことないさ。要は自分の得意なポジションを作り出すって話だからね。僕は乱戦が得意なタイプだから、自分でかく乱して自分で叩きのめすのが好きだけど、キミなら……そうだな、前に使った地雷みたいので足止めして、離れたところから狙撃したりすればいいんじゃない？」

「……確かに、それができりゃあ理想です」

「だろ？」

くしし、と得意そうに雪乃が笑った。

もちろん、そんな上手くはまるものではない。事実、ストレーガのように仕留めそこなうことはしよっちゅうだった。それは陸郎の詰めが甘いということでもあるのだが、結局のところは彼我の戦力差に行き着く。人事を尽くしても、超えられない壁というのはある

のだ。

いや、正確に言えば超えられないと思ってしまっ壁、だろうか。根本的な部分での淡泊さ——諦めの早さが、陸朗をスピット・ダンブという場所に押し込んだ原因なのだろう。

「だったら、盛り上がってみればいいじゃない。キミの潜在能力はかなりのもんだよ。磨けば光る珠ってやつさ。正直少しばかり嫉妬したし、腹が立った。どうしてこんなにすごいやつが、こんなところでくすぶってるのかって」

「それは……勝手すぎますよ、会長」

「分かってるって。でもね、僕は本当にそう思っただぜ？ だから

……」

「だから、何？ だから私を倒すために、その力を貸してくれ。そうとでも、言っつもりなの？」

その声は、店の戸口のほうから聞こえてきた。

刺すような視線に、振り向くのを一瞬ためらう。だが、躊躇している場合ではないだろう。私を倒すため——彼女はそう言ったのだから。

言葉の意味を、確かめずにはいられない。

「そうやって、その男を引き込んで私を倒そうというのね、雪乃」

立っていたのは、さっきまでカウンターの向かいにいた青葉台女子の生徒だった。もう一人の小柄な少女を横に連れた彼女は、制服の胸を反らし、眼鏡の奥から鋭い視線を陸朗に——いや、雪乃へと向けている。

これが誰であるかを問うのは、野暮というものだろう。彼女は雪乃に言った。私を倒すつもりなのかと。雪乃が倒そうとしているのはただ一人、親友にして仇敵の『聖銀の女皇』だ。ならば彼女こそ

が『聖銀の女皇』その人であると察するのは、難しいことではなかった。

「……ああ。その通りさ、僕と彼とでお前を倒す。そのつもりだよ、さやか」

「できるつもりなの？」

「やれるさ。愚かなお前を倒すことぐらい簡単だ、彼の力を借りればね」

「愚か？ 何が愚かだと言うの？」

「全部がだよ。スフィアで、現実^{リアル}で、何回僕に言わせる気だ。お前は間違ってるんだよ、さやか。お前とお前の騎士団が、『ペルソナクライン』をどれだけ混乱させてると思ってる？ 見るに堪えないよ。だから僕と彼とで、お前に引導を渡してやる。今度こそ、お前の作ったお前の『世界』を破壊してみせる。それが……お前の道を誤らせた、僕なりのケジメってやつだ」

「……ッ！」

ギリツと、女皇が——さやかと呼ばれた少女が唇を噛んだ。

「それをあなたが言うの？」

「言つさ。だって、僕とお前は……友達だったんだから」

それは、あくまでも過去形。

「……青葉台の生徒会役員名簿に、『山名さやか』って名前を見つけたときは驚いたよ」

さすがにラーメン屋で口げんかはできない。激昂していてもその

くらいの分別は、まだ残っていたのだろう。

店を出た四人は、路地裏で対峙することになった。

「別人かと思った。僕が知ってるさやかは、生徒会役員なんてやらないだろうと思ってたからね」

「……あなたから見て、私は変わったのかしら？」

「変わったさ。立派になったよ、どこから見ても小さい頃の面影は全くないね。どこから見ても、青葉台の副会長さん以外の何者でもない」

「その物言い……ふざけてるの？」

「僕は真面目だよ。ねえ、陸朗君？」

「会長は常日頃からふざけてるような気がします」

「あれ、ここって僕の敵しくないの!？」

実際、ふざけているようにも見える。だが雪乃もそれなりに真面目だろう。なにせ目が笑っていないのだ。揺れる金髪からのぞくその蒼い瞳は、鋭くさやかを見据えている。

一触即発——そういう空気が、この場に蔓延していた。

「はあ……本当にあなたは何も変わらないわね。背が伸びただけで、その金色の髪も、青い瞳も、いつも笑ってる顔も、同じだわ」

「怒ってみようか？」

「できるのかしら？」

「お前のためならできるよ。正直、僕は本気で腹を立てている。お前の行いに……というよりは、お前を止めることができないに自分にだけどさ」

「……そういうところも、変わらないのね。子供がそのまま大きくなっただけ」

「そうかい？ 出るところは結構、出てるつもりだよ？ キミもなかなか捨てたもんじゃないと思うが、負けるつもりはない」

そう言つて、雪乃は大きく胸を張った。

スタイル、という点ではさすがにフランス人の血を引く彼女のほうがややリードといったところか。しかし、さやかも負けてはいない。日本の巨乳業界もなかなか侮れないようだ。残念なのは、さやかの連れている後輩らしきゴスロリ少女だけだが、彼女も平均的に日本人体型なだけで、恥じ入るほどではない。だが――さやかの後ろで控えめにしているのは、性分なのだろう。

「ちよっ……何を言ってるのよ、あなたは！？ そっちのあなたも、じろじろ見ない！」

顔を赤らめ、恥ずかしさに身をよじりながら、さやかが素早く後ずさる。

「いやあ、陸朗君も結構男の子だねえ。でも初対面の女の子にそれはいただけないな。僕のならいくらでも見ていいけど」

「ちよ……ご、誤解ですよ！？ 俺、興味ないですから！」

「……それはそれで枯れすぎじゃない？」

「人をいつも漲ってるみたいに言わんでください。変な目で見られてますよホラ！？」

「にやはは」

陸朗の慌てぶりに、溜飲の一つも下がったのだろう。けらけらとひとしきり笑った雪乃がばさりと髪をかき上げる。

目付きが変わった。鋭く冷たい、凍てつくサファイアの瞳が、真っ直ぐにさやかへと向けられる。

「さて、からかうのはこのぐらいにして……だ。まさか、こんなところで鉢合わせするとは思ってもみなかった」

「それはこちらの台詞よ」

腕組みして睨む『女皇』さやか、腰に手を当て胸を張って視線を受け止める『魔女』雪乃。

距離が近い。お互いの胸が、ぶつかり合うほどに。お互い、微塵も譲るつもりはないらしい。わざとか、無意識か、押し相撲をするくらいだ、

思わず、女皇の側にいるゴスロリ風少女と顔を見合わせる。少しだけ、彼女は困ったように眉を斜めに傾けていた。どうやら彼女も女皇には苦勞をさせられているらしい。そこはかとなシンパシーい共感が、彼女とのあいだに結ばれた気がした。

もつとも、陸朗と彼女が仲良くなってもしょうがないのだ。今の主役は雪乃とさやか。彼女たちは相変わらず、不倶戴天の敵に出会ったように睨み合っている。

「この店は、僕が見つけたんだけどね？」

「二年も来なかったのはあなたよ。私は『ペルクラ』をあがったら、必ずここに寄るようにしてるの。とやかく言われる理由なんてない」

「おっさんみたいな習慣だなあ……」

「お、おっさんですって！？ だいたい、あなたが現実リアルで連絡を絶つてしまうから、私は……」

「ん？」

「な、なんでもない……ともかく！ あなたに好き勝手言われる筋合いも、好き勝手されるいわれもないわ。これも、ちょうどいい機会ね……私もあなたのように宣言する。今度こそ……今度戦った時こそ、私はあなたを屈服させてみせる」

不穏当な単語が飛び出した。

どちらかと言えば柔和な顔つきのさやかが言ったとは、とても思えない単語だった。彼女の内に秘めた『女皇』としての矜持。それ

が、言わせたのだと感じた。

もつとも、対する『魔女』雪乃はさほど意に介した雰囲気はない。もう一度髪をかき上げると、呆れたような口調で言った。

「屈服、ときましたか。なかなか実社会で使う単語じゃないよ、そりゃ」

「そうね。でも『ペルソナクライン』では当たり前だわ」

「……当たり前じゃあ、なかったよ」

わずかに、雪乃の声色が変わった。緊張と——そして怒りを含んでいる。

「お前がそうしたんだ。お前がそういう『当たり前』を作った」

「否定はしないわ。でも、私にはそれが必要だった。あなたに裏切られた私にはね」

「……さやか、僕は！」

「あれは、きつかけよ。あなたの裏切りはきつかけに過ぎない。あなたが戻ってくるのなら、チャラにしてあげてもいい程度のことよ。私が作った私の居場所は、あなた一人を受け入れるくらいの余裕はあるもの」

「大した寛容ぶりだね、女皇サマは」

皮肉げに口の端をつり上げる雪乃。

「その台詞……つまり、拒否する、と？」

「そうでなけりゃ、宣戦布告なんてしないよ」

「でしょうね」

さやかも分かっていたのだろう。

ただ、それは一縷の望みゆえか、それともただの儀式か。単なる

再確認であっても、彼女は口に出さずにはいらなかったのか。さやかという人物を伝聞でしか知らない陸朗に、彼女の内心を推し量ることは難しかった。

だが、はつきりしたことがある。今、女皇と魔女の仲は完全に決裂したのだ。

「なら、いいわ。だったら叩きのめすのみよ。あなたと、その男と、たった二人だけの力でどこまでやれるか、見せてもらうわ。無論私は……手加減などしない」

「そうでなけりゃあ、意味がない。全力のお前を叩き潰すのが目的なんだ、手を抜いたとか、言い訳の余地を残されちゃ困る。めんどくさいからね、後で」

「……その言葉、あとで必ず謝罪させてあげる」

「できるものなら、やってみな」

売り言葉に買い言葉。そう言ってしまうのは容易いが、それ以上に根の深い何か、そこにあるのは間違いない。

どれほど言葉を尽くしたところで、彼女たちはもう同じ道を歩くことはできないのだ。

もはやこれ以上、語る必要もないと感じたのだろう。さやかはくると身を翻し、雪乃たちに背を向けて歩き始める。彼女に付き従うように、ゴスロリ少女も去っていった。

その背中をじっと見つめていた雪乃に、陸朗はひそめたような声色で、静かに声をかけた。

「良かったんですか？ 数年ぶりに会ったのに。もっと真面目に話していれば……」

今陸朗には、この秋月雪乃という少女を、初めて気遣う気持ちが芽生えていた。

彼女が執拗に女皇をからかうような素振りを見せていたのが、気になったのだ。素直になれないだけではないか……そんな風に感じていた。そうすれば、もしかしたらもう少し何かが変わっていたかもしれない。陸朗はそんな風に思ったのだ。

「真面目に？　僕は十分真面目だったよ。ああしてないと、掴みかかってしまうかもしれないからね。ああするしかなかったのさ」

「そ、それは……」

「キミも見ただろ、聞いただろ？　あいつは自分が間違っているなんて少しも思っちゃいないんだ。反省する気のない奴は、歩み寄る気のない奴だ。そんな相手とまともな話なんかできないよ。必ず、頭に血が上ったほうが先に手を出すものさ。僕はそれだけはしたくなかった。あいつは……そう、あいつは……『友達』だったからね」

「……やっぱり過去形なんですか」
「そうだよ。今のあいつは友達じゃない。僕の敵だ。倒すべき宿敵だ。僕のためにも、そしてあいつのためにも……今のあいつは倒さなきゃいけない。本当に、あいつの居場所が無くなる前にね」

その言葉には、怒りとともに心配する気持ちが含まれている。それがはつきりと分かった。その心配こそ、かつて『友達だった』ことに対する情けのようなものなのだろう。

ほかの誰かに討たれる前に、雪乃自身が引導を渡す。それが、彼女の言っていた『けじめ』に違いない。

「……さて、なんだか思ったよりも根が深い問題になってきちゃったな」

ゴキゴキと音を立てて首を回しながら、他人事のように言う。

「今さらですよ。人間関係のトラブルなんて、いつだってめんどくさいもんです」

「達観してるねえ。キミを頼った僕の見立ては、やっぱり間違ってたか」

くすくす笑う雪乃。

何か、掴みきれないことを考えているような気がする。

「キミはやっぱりベターな選択だった。ベストではない。けど、ベターだ。その時、最善の選択だった。僕のパートナーに相応しい」
「おだてても、何も出ないですよ？」

「そうだろうね。おだてても、キミからは何も得られない。賭けの負け分以上のものは」

「……む」

少しだけ、鼻白むような言葉だった。

確かに今、自分がこの場にいるのは、あの時賭け試合に負けたからだ。しかし、それを理由にして戦いで手を抜くようなつもりはない。雪乃とさやか、二人の関係に思うところもある。頼られたからには、全力を尽くすつもりだった。

「俺に不満がありますか？」

「だから、ないって言ってるだろ？ 能力的にはさ、ベストではないにせよベターだったって言ってるじゃない」

「だったらなんです？ その持って回ったような、含みのある口振りには？ 俺に何か不満があるから、そんなふうに言うんでしょ？」
「ふむ」

問われた雪乃は、顎に手を当て、小さく考えこむような素振りを見せた。

「な、なんです?」

何やら妙な予感がする。

何か、とんでもないことを言われる気が。

「会長、あの……」

「陸朗君。賭けの負け分は今日の今、この瞬間までいいや。キミはよくやってくれた。あいつに『宣戦布告』ってのが元々の目的だったし、キミのおかげで十分それは果たせた。だから、賭けの負け分はここまでいい」

「は? あ、あの、それはどうい……?」

混乱する陸朗に、すつと顔を近づける雪乃。その耳元に唇を寄せると、ささやくように言った。

「分からない? 『強制』はここまでやってことさ。あいつと本気でやり合うんだ。どれほど律儀者であっても、強制じゃあ役に立たないよ。それはやっぱり想いが違う、気概が違う、覚悟が違う。どこかでズレが出てくるんだ。だからね、陸朗君……いや、ジェット・バレル」

「は、はい……」

「ここから先は、キミが決めてくれ。僕に付いてきてくれるのかどうか。あいつらを敵に回せるのかどうか。ランカーと本当に戦える自信があるかどうか。全部自分で考えて、キミが決めてくれ。キミの意志で、女皇と騎士団と戦ってくれ。できないと思うなら、僕に協力してくれなくても構わない。それならそれで、僕の見込み違いだったというだけだ。キミを恨んだりはいしないよ」

「それは……それは……っ!」

無茶苦茶だ。これまでに一番ひどい要求だ。

自分で決めると、腹を据えろと、責任を自分で背負えと――彼女は
はこの後に及んでいきなり言い放ったのだ。

ここまで教えておいて、知らせておいて、わから理解させておいて、自
分で決めろと決断を投げた。

ひどい。本当にひどい。この女は、どうかしている。そんなふう
にさえ思った。

じろり、と半ば憎しみのこもった目で、雪乃を見る。

学校一の美少女は、脅えもせず、すくみもせず、ただ微笑みなが
らその目を受け止めるだけだった。

3 - 3 山名さやか（後書き）

そついうわけで二日と開けずに更新。
頑張りましたよ、ええ頑張りました。

今回でラーメン屋編終わり。

ようやく出せた女皇の本名。

うっかりすると全部アバターしか出ない小説になるところだったんで、こうして生身の出番を設けましたw

巨乳でボブで眼鏡っ子なのは俺の趣味です。

おっぱいバンザイ。魔女もおっぱいでかいしね。

3 - 4 訪問者

時間をもらった。

次の『領土戦』までに決めてくれればかまわない——それが雪乃の言葉だった。

時間があつたところで、決断を先送りにする場当たりの対処でしかないことは、陸朗も十分理解していたが、それでも即断はできなかった。

しかし決断が難しい問題であることは、雪乃も十分察していたのだろう。しばらく『領土戦』で使う武器のチューンをしてくると言つて、彼女は偽装装甲をストレーガの身にまとうと、いそいそ対戦に出かけていった。決めるには、自分は離れていたほうがいい——そういう気遣いだろう。

実際のところ、陸朗は主体性のあるタイプではない。太陽と月で言えば、間違いなく月だ。自ら光り輝くような相手が側にいれば、その影響を多大に受けてしまう。

間違いなく、雪乃はそこまで見切っている。なんだか手玉に取られているようで、少しだけ面白くなかった。

「はあ……」

今日、何度目のため息だろうか。

彼女と知り合ってから、一人になるとため息ばかりついている気がする。こうやって一人、ニュートラル・フィールドのバザーで露店——不特定多数に戦闘用の自作アウトサイド・プログラムを売ることで、ジェット・バレルはゲーム内通貨『クレジット』を得ている——を開いていても、こうため息ばかりでは常連客ですら逃げていくというものだ。

しかし、珍しくそんな彼に向かって声をかける者がいた。

「ジェット、ちょっといいかのう」
「あ、ジジ様」

ジジ様。

ジェット・バレルほか、イケブクロ・エリアに集うほぼ全てのアバターからそう呼ばれている彼は、無論本当の老人というわけではない。単に老人口調で喋る演技を好むところから付けられたあだ名だ。本当のアバター・ネームはほかにあつたはずだが、誰も覚えていない。しかし彼は本物の好々爺のごとく、その状況を受け入れていた。

誰も悪意からそう呼んでいるわけではないからだ。彼には不思議と他人を惹き付けるような魅力——もしくは統率力があつた。本人もそのところは理解しているようで、今ではイケブクロ・エリアの顔役として雑多で個性的な面々をゆるやかにまとめている。

「何か用？」

「用がなければ話かけちゃいかんか？」

「そんなこたあないけど」

「まあ用はあるんじゃないけどな」

どっこいせと言わんばかりに、鈍い赤銅色をした身体を曲げて、ジェット・バレルの隣に腰かける。

そこでは重量級の丸っこいアバターがさつきまで露店をやっていたはずだが、いつの間にかいなくなっていた。ため息攻撃に耐えられなくなったのかもしれない。

「なんだか、ずいぶんと面倒に巻き込まれておるようじゃのう」

「……耳が早いねジジ様」

「イケブクロ・エリアのメールマガジンに、『剣の魔女』のコメン

トが載っておったぞ」

「何考えてんだあのバカ女!？」

「なんでも、二年ぶりに『白銀騎士団』に喧嘩売ったとかで、そのパートナーがお前さんつつーことになっとるんじゃが……」

「それは……」

事実かどうかでいえば、事実だ。否定する要素がない。だが今現在には最終返答を保留しているということも、説明が面倒だった。

「だいたいは合ってるよ。三日前、魔女と賭け試合させられてね。んで負けて、ごらんの有様ってわけだ」

「アレと立ち会ったのかお前!？」

老人らしからぬ——実際、別に老人型アバターというわけでもないのだが——激しい動きで、ジジ様が身を起こす。

「一応ね。相手はナメにナメきってたと思うけどさ」

「よく無事じゃったのう……」

心底驚いたようにいうジジ様。

たしかに、魔女の本気の強さを知っていれば、自分が『活動臨界』に追い込まれず、こうしてピンピンしているのは信じられない話だろう。

「ナメきってたって言っただろ。手加減されてたんだよ、思いつきり」

「いやあ……手加減したくらいでどうにかなる奴じゃないんじゃが」

「じゃあ、運がよかったんだろ」

「……うつん、しかしのう」

まだ納得がいかないのか、ジジ様はぶつぶつとこぼしながら座り

直す。

「まあええわい。それでお前さん、どうするつもりじゃ？」

「どうする……って？」

「あの魔女、ずいぶん無理難題を押しつけてきおったのは知っておる。じゃが、アレの望みに応える義務があるわけじゃなかるう。

お前さんはどうするつもりなんじゃね？」

「……それを、今考えてる」

「ほっほう」

その声色は、興味深いものを見つけたと言わんばかりのものだった。

普通ならば苛立つところだが、あまり何を言っても他人を不快にさせることはないという、不思議な特技をこのジジ様というアバターは持っていた。

「ま、お前さんの好きにしたらええ。アレについて行くのは、かなり大変じゃろうがのう」

「さっきからアレ、アレって……なんだかずいぶん魔女と親しそうだな、ジジ様」

「んー、昔いろいろあったのう」

古いペルソナアバターなら、アレのことは皆知っておるよ——ジジ様は、そう言って力力力と笑った。

「ふうん……だったらジジ様はどっちの味方なんだい？」

「心情的にはどっちの味方でもないがのう。立場的には魔女を応援せざるをえんな」

「そりやまたどうして？」

「決まっとる。『聖銀の女皇』がイケブクロ・エリアにとって有害

だからじゃよ。あやつと『白銀騎士団』はこのイケブクロを支配しようとしておる。わしらはそれに抗っておるんじゃ。つまるところ、敵の敵は味方というやつじゃな」

「意外に単純な思考だな」

「こついうのはシンプルにしたほうがええんじゃ。もつとも魔女の奴は……「敵に回せば恐ろしいが、味方にしたらなお恐ろしい」という感じじゃがな」

「それは単なる危険物なんじゃないか？」

「そうかもものう。歩く核ミサイルみたいな奴じゃよ」

ひどい言い草だ。明らかに褒めていない。しかし、言葉にはどこか親しさのようなものも感じられる。ジェット・バレルの知らない時代の話——そういうものを、少し想像する。

それはきつと、魔女と女皇がまだ仲睦まじかったころの話になるはずだ。二人の周囲にはあまたのペルソナ・アバターが集い、彼らは『異邦人の旅団』なる組織……いや、居場所を作り上げた。もしかしたら、ジジ様もその場所に集う一人だったのかもしれない。

たしかめてみようか。そう思ったりもしたが、ジジ様に限らず、イケブクロ・エリアのアバターは過去を詮索されることを嫌う。きつとはぐらかされてしまっただろう。

「なんじゃ、なんぞ聞きたいことでもあるかの？」

「いや、いいよ。どうせ答えないだろうし」

「そうかの？　じゃあしょうがないのう」

聞きたいことを察したのだろう。そしてそれに答えるつもりもな——もう一度、ジジ様は力力かと笑い声を上げた。

「……いかにいかに、おしゃべりはこのへんで切り上げんと。用事を済まさんとな」

「用事？　今のが用事じゃなかったのかよ？」

「今のは世間話じゃよ。それだけのために、お前さんを訪ねたりはせん。わしも結構、忙しいんでのう」

「やっぱり、次の『領土戦』の準備？」

「うむ。いかんせんわしらは烏合の衆だからのう。『城』^{シタテル}の防衛計画を立てるだけでも、喧々囂々じゃわい。おまけに、次はあの『白銀騎士団』が総力を挙げてくるわけじゃし」

「大変だな」

「何を他人事みたいに言つとる。『領土戦』で騎士団と真つ向からぶつかるのは、お前さんと魔女になるんじゃないぞ？」

「あ……」

すっかりと失念していたが、確かにその通りだ。矢面に立つのは、自分と魔女である。怖れはないが、それほどの大規模戦闘の経験はない。満足に動けるのかという懸念はあった。

「ただまあ、本気の潰し合いになれば『白銀騎士団』もタダでは済むまい。それを懸念しておる奴が、どうやらいるみたいじゃのう……」

「どういうことだ？」

ジジ様は答えず、黙って自分のインベントリから一枚の立体電子書類^{↑パー}を取り出し、ジェット・バレルに渡した。

白紙——のように見えるが、おそらくはフィルタがかかっているのだらう。ホロ・ペーパーにアクセスした瞬間、内包されたデータが展開されるような仕組みになっているようだ。

「これは？」

「対戦フィールドの転送アドレスじゃ。知り合いから頼まれた。お前さんと内密で話がしたいと言つてのう」

直接対戦時に使う対戦バトル・フィールドはスフィア内にインスタンズ形成される。

「誰？」

「それは行つてのお楽しみじゃよ」

「危険はねえんだろうな……」

魔女とつるむようになってから、ジェット・バレルは少しばかり自分の身边に気をつけるようにしている。

『白銀騎士団』の評判はきわめて悪い。何をしかけてくる分らない相手だ。警戒をどれだけしても、やりすぎということはない。

「それは保証するぞい。それより相手が待つとるはずじゃ、早く行け」

「え！？ 待つてるのかよ！？ なんだよ、それを早く言えよな！」

てつきり、このあと何時までに何処そこへ来い、というような果たし状的なものだと思っていた。

「あまりに話が弾んで忘れておつた。すまんのう」

「すまんのうじゃない！ ああもう、とにかく行ってくる！ 店番やっつけ！」

あいよ、というジジ様の返事を聞き届けると、ホロ・ペーパーをデコード展開する。ポータル転移システムのまぶしい輝きが、彼の身体を包み込んだ。

呼び出された対戦バトル・フィールドは、枯れ果てた荒野——たとえばテキサスのような——の光景を模したものだ。ランダム選択か、あるいは呼び出した相手の趣味なのだろうか。

「……で、どこのどいつだ？」

早速思考内デスクトップから『ペルソナクライン』のコンソール・パネルにアクセスし、対戦相手の名前を探す。だが、名前を確認することはできなかった。

「フィルタがかかっている……だと？　はン、素性を簡単には明かしたくないってことか。ったく、この俺様ちゃんをナメんなよ。この程度のフィルタなんざ、小指の先で……」

「それには及ばぬ」

ずおつと、頭上から影が差した。のしかかるような重厚な気配に驚き、思わず横っ飛びで飛び退くと、天を衝くような巨大なアバターがそこに立っていた。

白銀に輝く西洋騎士にも似た甲冑を身にまとい、並のアバターよりも頭二つか三つ分は大きいその身体。見覚えがある——否、見忘れるはずがない。

「お、お前は……『太陽の騎士』^{ガウエイン}ツ！？」

「見知りおき光荣だ、『黒い銃身』^{ジェット・バレル}」

巨軀を傾け、頭を下げる。

そこには、魔女を前にしていたときの苛烈さはない。『騎士団長』の名に恥じぬ、物静かで紳士的な態度のアバターがいた。

「……な、なんであんたが？」

「卿^{けい}と話がしたくてな。そこでこの場を用意し、旧知の者に頼んで卿に取り次いでもらったのだ」

「お、俺と話がしたいって、言われても……」

にわかには信じられない話だった。

確かに今のジェット・バレルは、魔女のパートナーとして警戒と注目が必要なアバターだろう。しかしながら、このガウエインこそは巨大アライアンス『白銀騎士団』のナンバーツーだ。断じて自分ごとのために、のこのこと敵地であるイケブクロ・エリアに姿を現していい存在ではない。

「信じられん……」

「そんなにおかしいだろうか？」

「あ、ああ。遠慮なく言わせてもらえば、何かの罠なんじゃないかと思うくらいだ」

「罠にかけられる可能性であれば、我のほうが高いと思うがな」

その言葉には、どこか自嘲めいた響きがあった。

勝つためには手段を選ばないという『白銀騎士団』。それは同時に、騎士団と戦う相手も、自然と手段を選ばなくなることを意味する。

もちろん矜持とかプライドとか、そういった単語で語られる無形の『何か』によって、自分たちの取るべき戦略・戦術を制限してしまふアバター、そしてアライアンスは少なくない。

しかし綺麗事を言っているのは、戦況に余裕があるうちだけだ。

もっとも悪辣で卑怯なアライアンスとして知られる『白銀騎士団』だが、同時にもっとも純粹に強大な戦力を抱えるアライアンスでもある。まともにぶつかりあつて、持ちこたえられるアライアンスなど、そうは存在しないのだ。戦力差によってじりじりとすり潰されるように消耗し、追い込まれた敵対アライアンスはどうするのか。

答えは一つしかない。

『白銀騎士団』のやり方を模倣するのだ。「あいつらがやって来

たから」「あいつらもやっているから」そんな言葉をつまらない免罪符にして、手段を選ばない反撃に出る。そうなれば後は泥仕合だ。しかし結局は正道においても邪道においても、そのような相手が『白銀騎士団』に及ぶことはない。いずれ、決定的な敗北を受け取ることになる。

だがルール上で白黒決着がついても、泥仕合によって生まれた遺恨はなくならない。試合が終わればノーサイド、などというのは幻想だ。彼らの恨み辛みは蓄積し、やがて『白銀騎士団』の構成員へと向けられることになる。そうした怨嗟の炎渦巻く最前線にいるのが、このガウエインというアバターなのだ。

スフィアに——『ペルソナクライн』に繋いでいる限り、その日常は危険と隣り合わせと云っていい。そんな状況下であるにも関わらず、ジェット・バレルに会いに来た。それは大事も大事、十分驚くに値することだった。

「……あんたの覚悟のほどはわかった。だったら、用件を言ってくれ。そんな危険を冒してまで、世間話に来たわけじゃないよな」

「無論」

こくり、と頭を動かすガウエイン。それだけで、こすれ合った金属製のヘルメットと襟がギシギシと音を立てる。どちらも重厚な装甲であることが、それだけでわかった。

「我は、卿に頼みがあつて来た」

「頼み？ あんたが俺に頼みだなんて……」

「卿にしかできぬことだ。ぜひとも、聞き届けて欲しい」

韜晦を許さない、決然とした口調だった。物腰こそ丁寧だったが、実際にはイエスカノーかで答える、そう強いられているような気がした。

「……話の中身を聞いてからだ。空手形は切れないよ」

「話の中身か。そうだな、当然だ。だが……難しいことではない。一言二言で済むような内容なのだ」

「え？」

それほど単純な内容だとは思っておらず、虚を突かれたかのように間抜けな返事をするジェット・バレル。

彼の様子をちらりと見つつ、ガウエインは静かにこう続けた。

「私の頼みはただ一つ。此度の『領土戦』で、卿が『剣の魔女』に肩入れすることを止めて欲しいのだ」

3 - 4 訪問者（後書き）

そついうわけでようやくスフィアパートに戻ります。

今回は前回最後の問いと対になるカウンターの問いの提示ですね。

当初出す予定なかったんですが、どうしてもクッション役が必要になつてキャラを追加。

しかもなんか思わせぶりのキャラにw

3 - 5 太陽の騎士

「敵に勝ちを懇願する……みたいな話だな、そりゃ。そういうのが、『白銀騎士団』の軍法なのかよ？」

「卿はまだ、敵ではない。我はそう思っている」

ガウエインの言葉は、一面では真実だ。実際、ジェット・バレルとして敵に回るかどうかを、今まさに悩んでいたところなのだ。彼にそういう選択肢が与えられているなど、ガウエインが知っているはずもないが、あたかも知っているかのような言葉だった。

思わず返答に詰まる。

その間隙を突くように、ガウエインは体軀に似合わぬ流暢な弁をもって話を続けた。

「卿がどのような事情があつて魔女と知己を持ち、そして肩入れすることになったのか……それは我には分からぬ。だがしかし、過日我が同胞『蒼い氷壁』^{ブルー・グラード}を一蹴した技の冴えは、さすが魔女が己の相棒と頼むだけのことはある、そう思った。言っておくがブルー・グラードは決して弱いアバターではない。我が騎士団において、一隊を任せるに足る男だ。油断であれなんであれ、それを倒したという事実は、おそらく卿が考えているよりも重い」

身に余る評価というやつだろうか。ストレーガに賞賛されたときもそうだったが、あまりにも褒め倒されると身体がむずがゆくなる。

「ブルー・グラードのように、アバター・ランキングに縛られぬスピット・ダンプの住人だからと甘く見る向きもあるようだ、我はそうは思わぬ。ランカーでないから弱い……そのような戯言が通用するのであれば、我ら『白銀騎士団』にしても、あるいは『四季姉^{フォー・シスターズ}」

妹社』や『超人同盟』にしても、もつと早くこの地を支配していたことだろう」

烏合の衆。

そう評されることの多いイケブクロ・エリアのアバターたちだが、一つの目的のために団結すると、意外なほどの力を発揮することがある。ジェット・バレルと同じように、彼らもルール無用の世界で戦いを繰り広げているのだ、ランカーたちとはまた別の意味で、歴戦の闘士たちと言ってはばかりない。

そんな彼らが団結さえすれば、巨大アライアンスにも劣らぬ戦闘力を発揮する。事実、これまでの『領土戦』においては、その個々人の高いスキルによって幾度となく外敵からの侵略をはね除けていた。

ストレーガの行動も、このイケブクロ・エリアのアバターたちを無視してはいない。彼女とて、巨大アライアンスと対抗しうる戦力については、はっきり言ってアテにしていた。ジェット・バレルをパートナーとして選んだときの条件の一つに「イケブクロ・エリアへの影響力」を挙げていたことから、それがわかる。

彼女自身は強大な戦闘力を持ち、その力によって有象無象を退け敵中枢に斬り込むことは簡単だ。だが彼女の相棒となるアバターには、そこまでの戦闘力はない。多勢に無勢では、真の目的——すなわち、ガウエインとの戦いまで持ち込むことはできないだろう。そこで考えたのが、イケブクロ・エリアのアバターを利用する方法だったのだ。彼らの協力を得る、あるいはそこまでいかなくとも都合良く動かすことが可能であれば、魔女の立てた空論は一気に現実味を帯びてくる。

実際、ジェット・バレルはイケブクロ・エリアの中ではエース格の存在だ。ジジ様ほどではないにせよ、顔は広いし腕も立つと知られている。彼が前線に立つのであれば、それを支えてくれる者は少なくないだろう。

そこまで読み切つての魔女の策だった。『白銀騎士団』がイケブクロ・エリアを攻めるこのタイミングで動いたのも、偶然ではないのだろう。学校内を含め現実とスフィア、両方にいくつか網を張っていて、そのうちの一つにジェット・バレルが引っかかったことで、一気に自分の策を現実化させようとしたに違いない。

しかし、これはとにかくにも全てではジェット・バレル次第となる。一面では計算されているが、残りはあまりにも不確定であやふやだ。選択を全て他人に投げている。だからこそ、こうしてガウエインが介入する余地も出てきたのだ。

「此度の魔女の戦、卿こそが要だ。卿なくして、魔女の戦略は成り立たん」

「どうしてそう思う？」

わかりきった答えを、確認するように問いかける。

「簡単だ。卿が、我を止めるのだろうか？ その役目を任されたはずだ。卿が我を止めているあいだに、魔女が女皇を倒す。実にシンプル、だがそれゆえに確実な戦法だ。乱戦必死の『領土戦』において、女皇の近衛である我を引き離し一対一を作り出すのに、これ以上は望めまいよ。そして乱戦そのものは……卿に与するイケブクロ・エリアのアバターに引き受けさせる。おそらく卿さえ引き込めば、その目論見は成るだろう」

的確な分析だ。ジェット・バレル自身もまさしく同じことを考えている。

「だからこそ、だ。卿にはこの戦に介入して欲しくない」

結論こそ、まさしく単純だった。ガウエインの話は、全てそこに

行き着く。そのために、ガウエインはこの機会を作り、わざわざジエット・バレルに会いに来たのだから。

「もちろん、それ相応の謝礼はする。まず卿には即金で二十万クレジット。また、イケブクロ・エリアの支配権こそ我らで握ることになるが、そのほかの環境については可能な限り現状を維持することを『太陽の騎士』の名にかけて約束しよう。必要な者があれば、我が『白銀騎士団』ほかへ大手アライアンスへの士官の紹介もする。ほかにも必要なことがあれば、何なりと言ってくれて構わぬ」

「破格の条件だな。そんなにまでして、女皇を勝たせたいのかよ？」

「無論。だが、それだけではない」

そう言つて、ガウエインは遠くへと目を向けた。今ではないいつかを見るような目——わかる、この目はきつと『かつて』を見ているのだ。これは、魔女やジジ様と同じ目。あの頃を知る者の目だった。

この目を前にする度に、どこかいたたまれない気持ちになる。自分とは場違いではないのかと不安になる。スフィア^{ニッ}にいてはいけないのではないのかと思つてしまう。

そして——ガウエインはまさに、そう言っているのだ。

「関わるな」「前に立つな」「ここにいるな」——ガウエインの要求は、つまりそういうことになる。無論それはガウエインの立場から出た、勝手な言葉だ。ジエット・バレルが聞き届ける義務はない。だが同時に魔女の要求もまた、彼女の立場から出た懇願にすぎないのだ。二つは等価なものであり、価値は変わらない。

だからこそガウエインはここにいる。己の選択肢を、ジエット・バレルに選び取らせるために。

「……此度の戦、我がいる限り魔女の勝利はない。彼女は一面で偉大なるペルソナアバターだが、その敗北により、この世界より消え

去ることになるだろう。女皇は屈服させると言ったが、あのプライドの高い魔女が、それを受け入れるとは思えん」

「き、消え去るって……」

「アプリを消去し、二度とこの世界に関わらないということだ」

それだけではない。アプリを消す、ということとは埋めることのできない敗北感と空虚感を抱えたまま、それを抱えて生きていくということなのだ。

たかがゲームに——と他人は思うだろう。しかし一度ペルソナアバターとなったものはそうではない。ストレーガやジェット・バレルを含む、全てのペルソナアバターが奪い合うのは、ただスフィアに構築されたデジタルデータだけではないのだ。

奇しくもストレーガが以前、言っていた。自分たちが本当に奪い合っているものは、己自身のプライドなのだ。

そのプライド——面目を潰された以上、もはやこの世界にはいられない。汚名を返上する機会すら持たず、ただ敗者として去るのみ。

「だ、だったら俺は……」

魔女に手を貸す、と言いかけたジェット・バレルを、ガウエインは片手で制した。

「だから、卿には手を出して欲しくないのだ。これは儀式だ。『剣の魔女』が己の敗北、そして退場を飾るための」

「ぎ、儀式……?」

「彼女がこの世界で果たすべき役目は、もう終わった」

ガウエインは静かに、しかし決然と言った。そうである、微塵の間違いもないことを確信した口調。傲慢極まりないとも思えるが、その巨軀に溢れる絶対的な自信は、言葉にさえ揺るがぬ信念を与え

ているかのようだ。

「ちょ、ちょっと待てよ、ガウエイン。わけがわからねえよ。果たすべき役目ってなんだ？　それが終わってたってなんだ？　自分の中だけで完結するなよ。あんた、俺を説得しに来たんだろう。だったら俺に分かるように話せ。あんただけ理解してても意味がない」

「このままでは、答えられぬと？」

「当たり前だ！」

「……一つ聞く。卿が魔女に肩入れする理由は、なんだ？　魔女との約定を反故にしたところで、卿には何の不利益もあるまい。あれは見切りの早い女だ。卿に脈なしと見れば、速やかに卿から離れていくことだろう。あれを今とどめているのは、卿の思わせぶりな態度ということになる。本気で踏み込む気がないのであれば、早く魔女を解放してやるのが情けというものだぞ？」

「解放って……そんな、俺がストレーガを縛っているみたいに」

「縛っているのだ。あれは卿という希望を見つけたからこそ、この世界に舞い戻ってきたのだぞ」

「え？」

反射的に問い返すと、わからないのか。そう言わんばかりに、ガウエインの首が軽く傾いた。首を傾げたのだろう。厳つい外見に似合わぬコミカルな仕草に、思わず吹き出しそうになる。だが、ガウエインの語る言葉は真剣そのものだ。笑うことなど、一瞬たりとて許さないほどに。

「二年前。思いの丈を込めて、魔女は女皇とその築き上げた力に挑んだ。そして敗れたのだ。彼女はそのまま、この世界から遠ざかり、やがては消えるはずだった」

「……ストレーガは、諦めてなかったみたいだが」

二年間、探し続けていたと彼女は言っていた。女皇とガウエイン
に対抗しうる、自らの力を。^{パートナー}そうして選ばれたのが、自分なのだ。

「……訂正しよう。諦めかけていた。そしてそのまま、諦めていた
……はずだったのだ。卿が見つからなければな」

「穿つて見すぎだよ、そりゃ。もともとやる気はあつたはずだ。実
際、俺じゃなくてもよかったと言われたし」

「二年間、我は幾度か魔女の動向を探っている。あれが何を求め、
どのような手を打ってくるのかも、ある程度は読めるつもりだ。そ
してついに魔女が探し当てた存在が、卿なのだ。それは奇跡にも等
しい確率だろう……卿である必要はなくても、卿以外にはいなかった
のだ。天命は尽きつつあつた、そう考えるのが自然だろう」

「それをあんたが決めるのかよ」

「決めるのではない。ただの事実だ。きやつはもう、一度負けてい
るのだぞ。言っただろう、ほとんど死んでいたアレを、甦らせたの
は卿だ」

ガウエインの言葉はまぎれもない賞賛だ。しかし、言葉の奥には
それと似つかわしくない、暗くて冷たい炎が燃えているように感じ
る。

仮面をかぶったアバターの内心を推し量るのは難しい。ましてや、
ガウエインのような巨漢は、視線を合わせるのだけでも大変だ。

それでも、どこことなく感じるのだ。ガウエインから贈られる賞賛
の裏には、その氷にも似た無機質のシールド・コンタクトと同じよ
うな、冷酷なものがあると。

そしてその冷たい衝動こそが、今のガウエインという人物を動か
している原動力に違いない——ジェット・バレルはそう確信してい
た。

そう、わかる。腹の底を隠したまま、相手を自分の都合よく動か
そうとしている。そういう手合いの目に、よく似ているのだ。

「……そこまで、俺がいると都合が悪いか」

「有り体に言えばな。卿がいなければ、あれは緩やかに消えていくだけだった。もう二度と、女皇の心を惑わすこともなかった……！」

「言っなあ。そこまで魔女が嫌いだよ」

「はつきり言おう。大嫌いだ」

エフェクトのかかったガウエインの声であつてもなおわかる、その怒り。

そこまで断言されては、返す言葉もない。何かしようと思つていたジェット・バレルの指先が宙を泳ぐ。

「そ、それだつて魔女と女皇、二人の仲がこじれたのはすれ違いみたいなもんじゃなか。もう少し互いに歩み合つて、話し合つてだな

……」

「そのような甘いことを言っていられる時期は、とうに過ぎたのだ！」

「おおっ!？」

ビリビリと空気が震える。

「卿は当時を知らぬ者だ。女皇が何を思い、何を考え、そして立ち上がったのか知らぬだろう。我はそのような者が、女皇の行く手に立ち塞がることを望まぬ。立つのであれば、ただ『ペルソナクライ』というアプリケーションのルールに則つて、競い合えば良いこと。そこに別の思惑を持ち込み、介入することなど許さぬ」

決然と言い放つガウエイン。気の弱いアバターならば、これだけで即口グアウトを考えるような剣幕だ。

「けどなガウエイン。その『ペルソナクライン』の純粹性を今歪めているのは、あんたらの女皇じゃないのか。俺だつて噂くらいは聞いている、あんたらのやり口は。あんただつて自覚はあったみたいだしな。そういう連中が吐いていい台詞かよ!？」

「そ、それは……我もわかつている。わかつている……いつか、女皇に理解させねばならぬ。だが、女皇は……今の女皇は、『友』の言葉しか聞かぬのだ……」

最後の台詞は、吐き出すような苦しさを伴っていた。

「ちよつと待て。間違つてると思つたら、止めてやるのが友達だろ。あんたそんなに女皇のことを想つてるのに、友達じゃないのか!？」

「我は友ではない。友には……なれなかったのだ」

「どうして!？」

「決まっている。女皇の心には、今も魔女が棲んでいるからだ!！」

ぞくりと背筋が震えた。声だけでライフ・ポイントが削られたかと、一瞬コンソール・パネルで確認してしまう。

「……女皇にとって友と呼べるのはただ一人。彼の者、『剣の魔女』のみなのだ」

「そ、それは……」

「わかるか、ジェット・バレル。かつて二年前、その魔女ですら女皇を止めることができなかったのだ。それ以上を望むことはできない。此度に卿が助力したところで、勝つことは不可能だ。そして力無き者の言葉には、この世界では何の意味もない」

「あんたに手抜きしろ……つて言うてできるとは思えないもんな」

「……女皇はその手の嘘をたやすく見抜く。そしてその『裏切り』にまた傷つくのだ。そして我には、女皇を一人にすることもできん」

ガウエインにしてみれば、状況は詰みなのだろう。八方塞がり、どちらを向いても遠からず破滅があるだけ。残された手段は、女皇に殉じることのみである——そういう思い込みが、この忠心の塊のようなアバターを支配していた。

「女皇は魔女と決別せねばならぬ。しかし、ただ手切れをするには、状況がこじれすぎた。魔女の挑戦は千載一遇の機会なのだ。女皇は『友』への妄念を断ち切り、魔女は世界から消える。こうすることで、初めてこの世界から不幸がひとかけら消えるのだ。しかし……卿がいてはそれもならぬ」

「ど、どうして？」

「卿がいるかぎり、魔女は希望を捨てぬだろう。自分の力が及ばぬと認めず、卿を鍛え上げ、我に抗する存在としてふたたび挑むに違いない。そのあいだ、ずっと女皇の心は荒んだままになる。我は、それを捨て置けぬ」

「……要するに女皇がストレーガの引導を渡すことこそ、あいつらのためだっていうのか？」

「その通りだ。魔女に引導を渡す者も、また女皇でなくてはならぬ。なぜなら、彼女たちは『友』だったのだからな」

話は、それで全てだった。

重苦しい沈黙が、対戦バトルフィールドを満たしている。

ガウエインから視線を外し、しばし思索にふけるジェット・バレル。やがてふと思いついたように、ぽつりと呟いた。

「なあ、仮に……俺があんたの提案を蹴ったらどうするんだ？」

「異なことを聞く。そのとき取る行動など決まっているだろう」

「じゃあ、そのときは？」

「そのときは……この『太陽の騎士^{ガウエイン}』、刃をもって丁重にお相手致す！」

「懸命な判断を期待する」

そう言い残すと、ガウエインは転移システムで姿を消した。

同時に構築されていた対戦バトルフィールドが解除され、ジェット・バレルも転移前の座標へと戻ってくる。だが仮面の下にあるその表情は、とても機嫌がいいとは思えないものだった。

そういう雰囲気を感じ取ったのだろう。代わりに店番をやっていたジジ様が、やや遠慮がちに声をかけてきた。

「渋い顔じゃな」

「うるせえよ」

「ひどい言い草じゃな。店番してやったのに」

「あ、悪い……」

バツが悪そうに頭をかくジェット・バレル。

そのまま、無然としているジジ様の横に腰を下ろした。

「……いろいろ話してきたようじゃのう」

「うん」

「腹は決まったのか？」

「だいたい」

「ならどうする？」

問いには答えず、少しだけジェット・バレルは顔を伏せた。最後のもうひと押しを、自分の中でまとめるように。

たっぷり三分は悩んだろうか。待ちくたびれたジジ様が、機会を改めようと腰を挙げたその時、ジェット・バレルが言った。

「……ジジ様。つなぎのある連中、集めてくれないか。話があるんだ」

3 - 5 太陽の騎士（後書き）

三章はここでオシマイです。

ようやく戦争開始ですね、次あたりから。

書きたかったパートがきたなあ。

気合い入れよう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9585u/>

仮面の魔女と黒い銃

2011年12月15日22時13分発行